

さぬき市内遺跡発掘調査報告書

平成18年度国庫補助事業報告書

一つ山古墳
赤山古墳
蓑神塚古墳

2007. 3

さぬき市教育委員会

さぬき市内遺跡発掘調査報告書

平成18年度国庫補助事業報告書

一つ山古墳
赤山古墳
糞神塚古墳

2007. 3

さぬき市教育委員会



一つ山古墳 トレンチ4 上段葺石



一つ山古墳 トレンチ6 下段葺石



赤山古墳 1号石棺 南小口



赤山古墳 2号石棺 石枕



義神塚古墳 墳丘



義神塚古墳 石積

序

平成16年度から津田湾沿岸の古墳群を明らかにするために発掘調査を実施しております。今年度は調査を円滑に進めるため第1回『津田湾古墳群調査検討委員会』が開催され、今後の調査計画を中心討議が行われました。

今年度は、昨年度から調査を継続しております一つ山古墳に加え、赤山古墳も調査しました。一つ山古墳は墳丘の斜面から葺石が2段に確認され、墳丘の大きさが判明しました。また、多くの壺形埴輪片が出上しました。赤山古墳は墳丘測量と石棺の実測を実施し、古墳の現状や石棺の特徴が判明しました。

蓑神塚古墳は、旧寒川町の頃から復元について検討されてきました。古墳の内容を明らかにするために平成14年に横穴式石室の中を調査し、今年度は墳丘の大きさを明らかにするためにトレンチ調査を実施し、およその大きさが判明しました。今後の整備に活かして行きたいと思います。

最後になりましたが、調査にあたりましてご理解とご協力をいただきました地元の皆様ならびに関係各位、また、調査にご指導とご援助をいただきました方々に厚くお礼を申しあげます。

平成19年3月

さぬき市教育委員会

教育長 豊田 賢明

例　　言

1. 本書は、さぬき市教育委員会が平成18年度国庫補助事業として実施した発掘調査並びに測量調査の報告書である。
2. 今回の発掘調査はさぬき市津田町鶴羽1548に所在する一つ山古墳とさぬき市寒川町石田甲1749－1他に所在する蓑神塚古墳で測量調査はさぬき市津田町鶴羽395－1・5他に所在する赤山古墳である。
3. 調査の実施はさぬき市教育委員会が調査主体となり事務を、現場実務は大川広域行政組合埋蔵文化財係が実施した。
4. 本書の編集作成は大川広域行政組合埋蔵文化財係松田朝山が行なった。また、遺物整理を武井美和、遺物実測・トレースを多田歩が行った。
6. 報告で用いる北は国土上座標第IV系の北である。縮尺は掲載図面内に掲載している。
7. 遺物観察表及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準上色帖1998年度版』を使用している。
8. 報告書で使用した写真の一部は写真目次及び図版目次に記した方々及び機関より借用・購入したものである。
9. 本事業及び本書の作成にあたっては、地権者をはじめ次の方々より多大なご指導・ご援助を得た。記して謝意を表します。(敬称略・五十音順)

香川県教育委員会文化行政課、さぬき市シルバー人材センター、瀬戸内海歴史民俗資料館、遠藤亮、大久保徹也、大野宏和、片桐孝浩、鎌川敬子、菊川ナミエ、清野孝之、藏本晋司、佐藤貞子、多田伸吾、信里芳紀、富士川仁、溝渕正則、六車恵一、六車ふみ子、森下友子、山下平重、米田武子、渡部明夫

本文目次

序文

例言

一つ山古墳

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 一つ山古墳に関する過去の記載	2
第3章 墳丘測量調査の成果	2
第4章 トレンチの設定	4
第5章 調査の成果	4
第1節 各トレンチの状況	4
(1) トレンチ 1	4
(2) トレンチ 4	6
(3) トレンチ 5	10
(4) トレンチ 6	10
第6章まとめ	13
第1節 墳丘の復元と規模	13
第2節 盛上の様子	13
第3節 外表施設の様子について	15

赤山古墳

第1章 調査に至る経緯と経過	17
第1節 調査に至る経緯	17
第2節 調査の経過	17
第2章 赤山古墳に関する過去の記載	18
第3章 出土遺物について	22
第4章 墳丘測量調査の成果	26
第1節 墳丘の現状	26
第2節 旧墳丘傾斜面	28
第3節 宅地法面の精査	31
第5章 剥抜式石棺の観察	31
第1節 石棺の位置	31
第2節 1号石棺	31
(1) 現状	31
(2) 石棺の設置状況	33
(3) 石棺の法量	33
(4) 棺蓋の形態	33
(5) 棺身の形態	34
(6) 工具痕	34
(7) 石材	34
(8) 赤色顔料	34

第3節 2号石棺	34
(1) 現状	34
(2) 石棺の法量	35
(3) 棺蓋の形態	35
(4) 棺身の形態	38
(5) 石材	38
(6) 赤色顔料	38
第6章 まとめ	38
第1節 墳丘削平の経過と墳丘の復元	38
(1) 墳丘削平の経過	38
(2) 墳丘の復元	41
第2節 刻抜式石棺について	43
第3節 円筒埴輪の検討	45
第4節 赤山古墳の評価	45
 蓑神塚古墳	
第1章 調査に至る経緯と経過	47
第2章 蓑神塚古墳の立地と歴史的経過	47
第3章 蓑神塚古墳に関する過去の記載について	50
第4章 墳丘と横穴式石室の現状	50
第1節 墳丘の現状	50
第2節 横穴式石室	53
第5章 調査の成果	54
第1節 トレンチ設定地点	54
第2節 トレンチ調査の成果	54
(1) 古墳上位の堆積状況・近世石列の様子	54
(2) 古墳前庭部の破壊状況	54
(3) 古墳前庭部・石積の様子	54
(4) 墳丘の様子	56
第3節 山上遺物の検討	57
第4節 砂糖甕の調査	57
第6章 まとめ	59
第1節 蓑神塚古墳墳丘の推定復元	59
第2節 古墳の時期について	59
第3節 蓑神塚古墳と周辺の後期古墳	59

挿図目次

一つ山古墳

第1図 遺跡位置図	1
第2図 墳丘測量図（1／200）	3
第3図 トレンチ配置図（1／400）	4
第4図 トレンチ1平面・断面図（1／60）	5
第5図 トレンチ4平面・断面図（1／60）	7
第6図 トレンチ4葺石平面・立面・断面図（1／20）	8
第7図 トレンチ5平面・断面図（1／60）	11
第8図 トレンチ6平面・断面図（1／60）	12
第9図 トレンチ6葺石平面・立面・断面図（1／20）	12
第10図 墳丘ライン復元図（1／200）	14

赤山古墳

第11図 遺跡位置図	17
第12図 伝赤山古墳出土鏡（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）（1／5）	21
第13図 伝赤山古墳山上鏡拓影図（1／1）	22
第14図 伝赤山古墳山上右鉗（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）（1／2）	23
第15図 伝赤山古墳出土管首（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）（1／2）	23
第16図 伝赤山古墳出土ガラス玉・勾玉・管玉（さぬき市郷上館蔵）（1／2）	25
第17図 墳丘測量図（1／100）	27
第18図 墳丘東西エレベーション図（1／100）	28
第19図 墳丘周辺図（1／300）	29
第20図 旧墳丘傾斜面立面図（1／20）及び出土遺物（1／4）	30
第21図 宅地法面の断面図（1／40）	30
第22図 1号石棺平面・立面・断面図（1／20）	32
第23図 2号石棺平面・立面・断面図（1／20）	35
第24図 1号石棺石枕（上）・枕身南側小口（下）拓影図（1／3）	36
第25図 2号石棺石枕拓影図（1／3）	37
第26図 明治23年地籍図	40
第27図 昭和3年赤山古墳報告書に記載された図面	40
第28図 赤山古墳墳丘復元図（1／1,000）	42
第29図 快天山古墳と赤山古墳の石棺の変遷（1／80）	44
第30図 快天山古墳1号石棺と赤山古墳1号石棺の比較（1／40）	44

蓑神塚古墳

第31図 遺跡位置図	47
第32図 周辺主要遺跡位置図（1／20,000）	48
第33図 蓑神地区出土白磁四耳壺（1／3）	50
第34図 墳丘測量図（1／100）	51
第35図 橫穴式石室（1／50）	52
第36図 橫穴式石室内出土遺物（73～79=1／2 80～83=1／3）	53

第37図	トレンチ内平面・立面・断面図（1／40）	55
第38図	トレンチ内出土遺物（1／3）	56
第39図	砂糖甌平面・断面図（1／30）	58
第40図	墳丘復元図（1／100）	60
第41図	蓑神塚古墳周辺の後期古墳（1／10,000）	62

表目次

赤山古墳

表1	石剣観察表（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）	24
表2	管玉観察表（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）	24
表3	ガラス玉、勾玉、管玉観察表（さぬき市郷土館蔵）	25

写真目次

赤山古墳

写真1	昭和22年航空写真（日本地図センター）	39
写真2	昭和39年航空写真（日本地図センター）	39
写真3	昭和42年航空写真（日本地図センター）	39
写真4	昭和45年航空写真（日本地図センター）	39
写真5	開発前の赤山古墳（南から）（六車恵一氏蔵）	40
写真6	開発直後の赤山古墳（南から）（六車恵一氏蔵）	40
写真7	開発直後の赤山古墳遠景（南から）（六車恵一氏蔵）	40

蓑神塚古墳

写真8	明治32年の讃岐史要に掲載された相ノ山古墳	62
写真9	昭和6年の石川村誌に掲載された蓑神塚古墳	62
写真10	大正時代頃の石田地区の横穴式石室（多田伸吾氏蔵）	62

図版目次

一つ山古墳

図版1－1	墳丘（南西から）
図版1－2	墳丘（北から）
図版2－1	トレンチ1上段葺石（北から）
図版2－2	トレンチ1上段葺石（西から）
図版3－1	トレンチ4下段葺石検出状況
図版3－2	トレンチ4下段葺石検出状況
図版3－3	トレンチ4下段葺石検出状況
図版4－1	トレンチ4上段葺石（西から）
図版4－2	トレンチ4上段葺石（上から）
図版4－3	トレンチ4上段葺石ディテール（西から）
図版5－1	トレンチ4全景

- 図版5-2 トレンチ4下段葺石ディテール
図版5-3 トレンチ4下段葺石ディテール
図版5-4 トレンチ4下段葺石
図版6-1 トレンチ5全景(西から)
図版6-2 トレンチ5全景(東から)
図版7-1 トレンチ6下段葺石(西から)
図版7-2 トレンチ6下段葺石基底石
図版7-3 トレンチ6下段葺石基底石
図版7-4 トレンチ6下段葺石ディテール

赤山古墳

- 図版8-1 昭和40年代の墳丘(南から)(六車惠一氏蔵)
図版8-2 現状の墳丘(南から)
図版9-1 墳頂部(北から)
図版9-2 墳頂部(西から)
図版10-1 1号石棺南側小口
図版10-2 1号石棺北側縄掛突起
図版11-1 1号石棺石枕
図版11-2 1号石棺棺内部(北端)
図版12-1 2号石棺(北から)
図版12-2 2号石棺(東から)
図版13-1 2号石棺西側縄掛突起(西から)
図版13-2 2号石棺棺内部(西端)
図版14-1 蔓石(南から)
図版14-2 蔓石(南から)

養神塚古墳

- 図版15-1 墳丘の現状(東から)
図版15-2 横穴式石室(北から)
図版16-1 石積検出状況(東から)
図版16-2 石積(東から)
図版16-3 石積(北から)
図版17-1 石積のディテール(東から)
図版17-2 トレンチ東端の石列(西から)
図版18-1 石積東側の土層
図版18-2 局溝断面(東から)
図版19-1 石積上層石列(東から)
図版19-2 石積上層石列(南から)
図版19-3 砂耕竈竈部(東から)
図版19-4 砂耕竈全景(東から)

一つ山古墳

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成16年度から国庫補助事業として津田湾古墳群の内容確認を実施しており、平成16年度から17年度の2ヵ年で鶴の部山古墳の確認調査を行なってきた。一つ山古墳はこれまでに十分な評価はなされずにいたが、平成16年度の台風によって埴丘北側が崩落し、崖面に葺石が露出し、崩落土から壺形埴輪片が採集された。埴丘の崩落面は埴頂部の埋葬施設に迫る状態となり、津田湾古墳群の検討古墳の一つとして学術的評価を行うこととなった。平成17年度は埴丘測量調査を実施し、古墳の現状を把握するとともに崩落地周辺にトレンチを設定して古墳の内容確認を行なった。調査前は岩崎山4号墳、やけば山古墳のような前方後円墳に対する小古墳という位置づけでしたが、径20mを越す規模であることが判明し、埴頂部に刳抜式石棺の蓋が確認されるに到って大きく一つ山古墳の重要性が高まることとなった。平成18年度は昨年度の調査を受けて古墳の埴丘規模、外表施設の様子、築造年代を明らかにすること目的にトレンチ確認調査が計画された。平成18年度の調査体制は以下のとおりである。

(調査体制)

さぬき市教育委員会生涯学習課

課長 六車 均

課長補佐 佐伯 宗澄

係長 山本 一伸

主事 鶴身 昌大

大川広域行政組合埋蔵文化財係

主査 阿河 銳二

主事 松田 朝山

技術員 多田 歩

技術員 武井 美和

第2節 調査の経過

平成18年12月26日、津田湾の古墳群の調査を円滑に進めるため第1回『津田湾古墳群調査検討委員会』が開催され、一つ山古墳の調査方法について検討された。調査は平成19年1月15日から2月16日までの実働24日実施した。2月2日にトレンチ4の葺石を検出、2月13日にトレンチ6の葺石を検出した。2月7日には文化庁調査官の清野孝之氏が現地指導に訪れた。



(S=1/7,000)

第1図 遺跡位置図

第2章 一つ山古墳に関する過去の記録

一つ山古墳は津田湾古墳群の中ではこれまでほとんど注目されてこなかった。最初の記載は大正11年(1922)香川新報に掲載された大内豊谷氏の『津田と鶴羽の遺蹟と遺物』の連載である。16回目に以下のような記述がある。

1月30日・16回目

『茲所から東方に見える小山が一箇山と称す。東北は断崖絶壁見るからに物凄く、下は海波溝々と打寄せて居る。峰は大小二つに別かる。其東方の高き峰にも塚穴があつて今から廿年以前に仏法の廿四押堂を立てんとして発掘したら石棺内に朱づめにした人骨があり傍らに五寸ばかりの鏡や太刀などがあつたが皆津田の分署へ引揚げられて仕舞つたと云う。私は麓の里で此話を聞いて登山したら何事ぞ。頂上には一物も無く綺麗きっぱり取り除けられて上器類の破片すらなく、只奇体な面構えした佛像の彫刻された石碑一つ建てられてあるばかり。骨折損の疲労れ貫けで実に腹立たしい程であった。』

この記録からは明治年間に二十四輩さんを設置した時に石棺から鏡、太刀が出土したこと、大正11年段階で地表面に埴輪類は採集できなかつたことが分かる。今回、麓で聞き取り調査を行なつたところ、昔は砂利を使用した石が傾斜面に2段見られたということであった。

1926年の長町與彦氏の『津田町史』には一つ山古墳の記載は見られず、続く記載は昭和34年(1959)の『津田町史』である。以下の記載がある。

『鶴部山東方一つ山の山上にあり、明治年間発掘して、其後棺材まで搬出され何物もとどめていない。』

簡単な紹介であるが、棺材が運び出されたことが指摘されている。津田町史の記述内容はその後の改訂(1969)、再訂(1986)も同文である。

昭和40年(1965)、六車忠一氏は「讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ごろの謎」において以下の紹介をしている。

『海岸にそり立つ小山の頂上に直径20mに近く高さ3m位の円墳がある。裾の部分に海岸の砂利を葺石としておいでいる。明治時代に発掘され石棺内に朱詰めの人骨とその傍に五寸ばかりの鏡や直刀があったといわれる。』

葺石に海岸の砂利を使用している点は発掘調査によって確認されている。

以上のように一つ山古墳は津田湾古墳群の中ではほとんど注目されてこなかったが、石棺の中から鏡、太刀が出土したという記載や、石棺材が持ち運ばれたとする記載は刎抜式石棺の存在も伺わせる内容である。

平成17年度の国庫補助事業における一つ山古墳の内容確認調査では墳頂部から刎抜式石棺の蓋を確認し古墳の重要性が飛躍的に高まった。

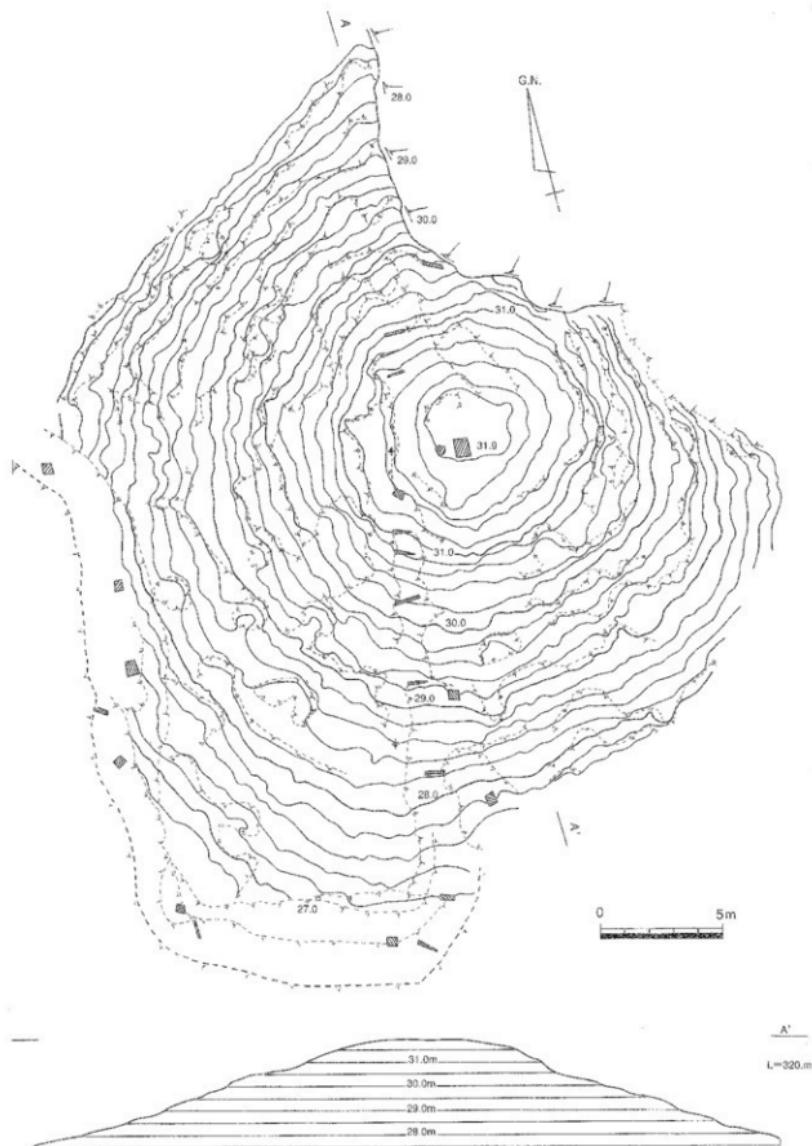
第3章 墳丘測量調査の成果

平成16年の台風によって墳丘北東部は大きく崩落した。平成17年度の調査では墳丘の現状を把握するため墳丘測量調査を実施した。墳丘測量調査は平成17年11月8日から17日までの8日間で縮尺1/50、20cmセンターで実施した。

まず、現状は平成16年の台風により、墳丘真北から東にかけて大きく崩落しており、真北では標高30.6m地点まで崩落が認められる。一方、墳丘東側でも標高29.5m付近で大きな崩落が見られるが、この崩落は平成16年より以前のものである。

墳頂部の最高地点は右仏の位置する付近で標高約32mを測る。墳頂部から標高31m地点までは急傾斜で、以下は若干ゆるく傾斜する。

地表面で観察できる墳丘の傾斜変換点及びテラスは、墳丘南西部の標高29m地点で幅約1.5mの比較的広いテラスが認められる。このテラス上には葺石が所々に露出している。ただ、テラスは墳丘全体には周らず、墳丘西から北にかけては緩やかな傾斜になっている。一方、墳丘南にかけてはテラス幅が広くなり墳頂部に至る南側の石段付近では非常に緩やかな傾斜になっている。石段付近には葺石の露出が比較的多く確認できる。次にさらに下位では標高28m付近においてテラスが確認できる。この地点のテラスは幅が狭いものの上位のテラスに比べて広く墳丘を取巻いて確認できる。墳丘南西部は墳頂部に至る山道によって南にかけて擾乱が顕著に認められ、露出する葺石も多い。墳丘西側はかろうじてテラスと確認できる状況で墳丘北側に向ってテラスの下位は崩落によって急傾斜になっている。墳丘北側は北西に続く尾根上から少し西に下った傾斜面であるが、標高28m付近で傾斜変換し緩やかである。以上の地表面観察からは標高28m付近と標高29m地点で局所



第図2 墳丘測量図 (1/200)

一つ山古墳

的にテラスを確認でき、標高31m付近で傾斜変化し、そこから墳頂部にかけては急傾斜する。

墳丘南部の石段の西側は傾斜が緩やかである。この箇所では擾乱による地形の乱れが顕著で、幅広いテラス状をなす箇所もある。この地点は墳頂部に至る登り口であり、そのため土砂の堆積によって地形が緩やかになっている可能性があるが、一方で、この地点に張り出し状の突出部が位置する可能性も考えられる。この問題については今後の調査課題である。なお、墳頂部の石仮付近を中心として同心円を描くと、墳頂部から標高29m付近までは比較的現状のコンターラインも同心円に近いが、標高28mライン付近では墳丘南西部において同心円よりもコンターラインが外側に広がっており、流土の堆積が推測される。

墳丘表面には葺石は散見されるが、埴輪等は全く採集することができない。周辺の人々の話ではごく近年まで小礫が墳丘斜面の上下二段に見られたという。特に墳丘東部で残りが良好であったという話を伺っている。現状では葺石もほとんどが土中で局所的に散見されるのみである。

台風で崩落した墳丘北から東にかけては現在崖になり、岩盤が露出した状態にある。墳丘北側の南北に崩落している崖面では標高29~30mにかけて葺石と考えられる拳大の礫が認められる。他の崖面では盛土らしい堆積ではなく、全体に岩盤が崖状となって露出している状態である。なお、墳丘東側の崖面では葺石らしき石材は確認していない。

平成17年度の調査前において台風の崩落の中から壺形埴輪の口縁部が1点採集されている。

第4章 トレンチの設定

平成18年度確認調査は墳形、墳丘範囲、葺石など外表施設の特徴、盛土の状況などの把握を主たる目的とした。墳丘東側にトレンチ4、南東側にトレンチ5を設定した。調査の経過においてトレンチ5で十分なデータを取得できなかったため、補足として墳丘南西側にトレンチ6を設定した。各トレンチは幅1mである。また、今回墳丘の検討を行なうに際して昨年度の墳丘北側に設定したトレンチ1の情報を不可欠な為、今回トレンチ1の概要についても同時に報告する。



第3図 トレンチ配置図 (1/400)

第5章 調査の成果

各トレンチの調査結果を以下で示すが、今回出土した壺形埴輪の具体的な出土状況と観察結果は接合作業、埴輪実測等の終了した時点での改めて報告したい。今回は遺構の状況と概略的な壺形埴輪の出土状況に記述をとどめる。

第1節 各トレンチの状況

(I) トレンチ1

墳頂部から6m北の墳丘傾斜面を起点として北方に向かって11.5mに設定した。トレンチ内では2段に葺石を検出した。

トレンチ南端から約0.6m地点（以下ではトレンチ南端からの水平距離を～m地点と呼ぶ）の標高約30.15mから上位で盛土が認められる。

2.4m地点から3.5m地点において上段の葺石が認められる。葺石は多くが転落してきたもので、壺形埴輪片が混ざって堆積している。上段葺石の下端付近は1~2cmの小礫が集中するが、この箇所は地形がゆるくテラスをなす。西半分を掘り下げたところ、テラス上に小礫は続き、墳頂部側に向って地山が傾斜変換する壁面に葺石の基底石と想定される30cm以上の大礫が確認でき。礫の下面是標高約29.45mである。小礫は基底石の下面まで入り込ん



第4図 トレンチ1 平面・断面図 (1/60)

一つ山古墳

でいる。基底石の周辺には挙人の礫が散乱しているが、原位置を保つものはほとんど見られない。基底石前面のテラスは小礫が顯著なことから、礫敷のテラスが考えられ、テラスの標高は埴塀側で約29.3m、埴頂部側で29.15mを測り、ゆるやかながら埴頂部に向かって傾斜している。

上段葺石の下位は3.5m地点から5.7m地点まで地山の傾斜が見られ、5.7m地点から7.5m地点で下段葺石を確認できる。

下段葺石は検出時において上位に小礫が顯著に見られたが、これは上段葺石のテラスに敷かれた礫敷が転落してきたものと考えられる。小礫の集中地点から下位は拳大の礫が顯著に認められる。西半分を掘り下げた所、葺石の散乱する下部分で地山のテラスが確認された。このテラスは埴頂部に向かって幅1.7m間をゆるやかに傾斜し、上位は傾斜変換して35°で急傾斜となる。この傾斜面に葺石は葺かれていたと想定されるが、原位置を保つ石材は確認できなかった。傾斜変換点の標高は約28.1mを測る。テラスには下段葺石で見られたような小礫の礫敷きは認められない。テラス上面には壺形埴輪片が散乱していたが、原位置を保つものは見られない。

下段葺石から北は地山がゆるやかに傾斜しながらドッていきトレンチ北端に至る。トレンチ北端の地山上の標高は約26.9mである。

(2) トレンチ4

埴頂部から約3m北西の埴頂部の端を起点として長さ13mで設定した。上下二段に葺石を確認し、埴丘裾部には地山の傾斜変換点を確認した。トレンチ内は全体的に攪乱が多いが、盛上、上段葺石は良好に確認できた。

トレンチ東端から3.7m（以下ではトレンチ東端からの水平距離を～m地点と記述する）は表土から10～15cm下で盛上が確認できた。表土内には葺石が散見されたが埴輪類の出土は皆無であった。

① 盛土の様子

盛土は3.7m地点から東に見られ、堅くしまった灰色土が厚さ10cmで20°で傾斜する地山の傾斜に沿って見られる。盛上の下場は3.7m地点で標高30.25mを測るが場所によって多少の上下がある。灰色土の上には3.3m地点から東に幅50cm、厚さ10cmで明黄褐色土が見られる（標高約30.45mの上位）。盛土範囲は狭く、平面で帯状に認められる。明黄褐色土の上には比較的柔らかいオリーブ灰色土が明黄色褐色土と同じように帯状に見られる。オリーブ灰色土の

上は2.4m地点から東で小礫を含み非常に硬くしまった灰黄褐色土が厚く堆積している。色調、小礫の混ざり具合で3層に分層しているが、トレンチ東端にかけて一連の盛土と理解する。断ち割り範囲では2m地点から1m地点にかけて地山直上の灰色土の盛土の上に20～50cm認められ、埴頂部に向って厚くなっている。

② 3.7m地点から4.8mの様子

3.7m地点から4.8m地点は表土下に灰黄褐色土が堆積し、その下位は地山が見られる。地表からの深さは約20cmである。この地点で葺石、埴輪の出土は皆無であった。

③ 上段葺石の検出状況

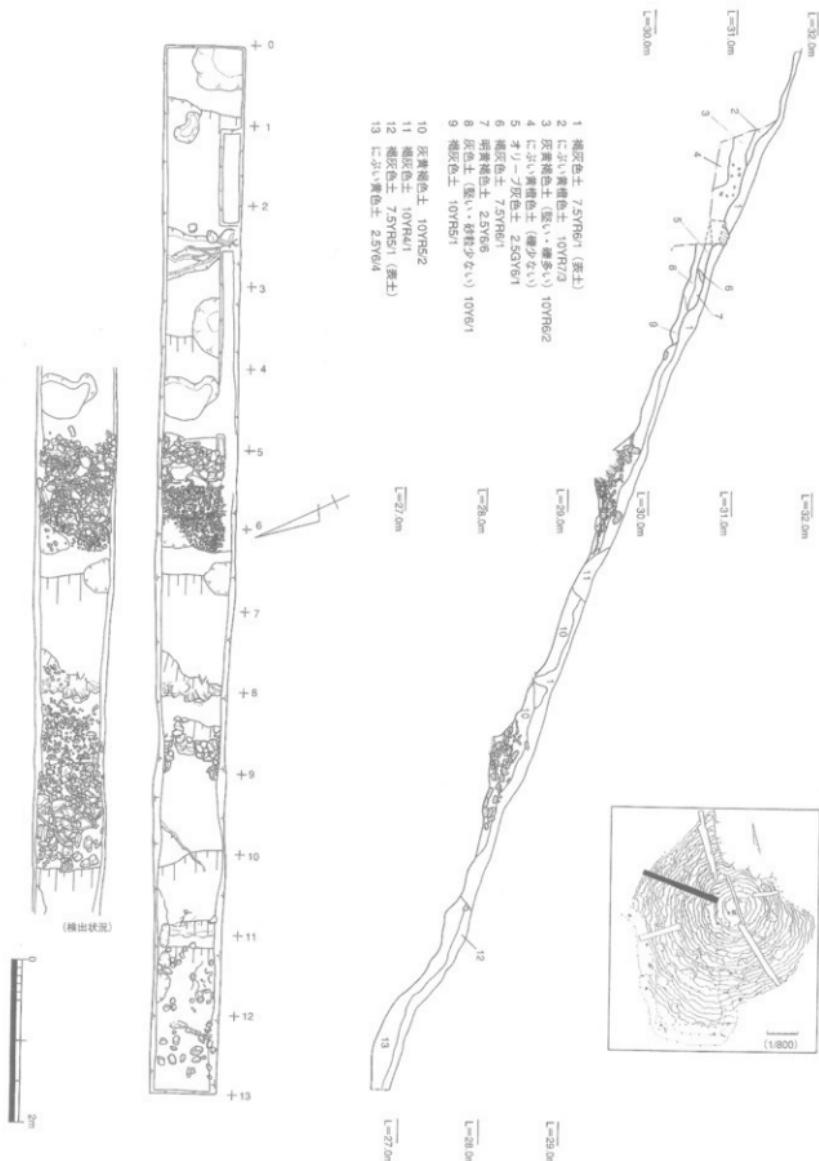
5m地点から6m地点は葺石、壺形埴輪片が顯著に認められた。表土を除去すると灰黄色土に混ざる状態で多量の石材を確認した。検出時の様子は5～5.6m地点で幅2～5cmの小礫が顯著に堆積しており、その上位に拳大から人頭大の石材が散在していた。小礫や上位の石材には壺形埴輪片が混在している。壺形埴輪片は上段葺石の最上部から認められ、さらに上位で壺形埴輪が樹立されていたことが指摘できる。5.6m地点から6m地点は小礫が少くなり拳大から人頭大の礫が主に見られた。6.1～6.2m地点では上位で観察された小礫よりもさらに小さい1～2cm程度の小礫が比較的しまった土に混ざって確認できる。検出面ではこの小礫中に壺形埴輪片は見られなかった。葺石検出状況からは相当量が上位から転落してきたもので、地山の傾斜に沿って石材は堆積している。

④ 上段葺石の転落石の取り外し

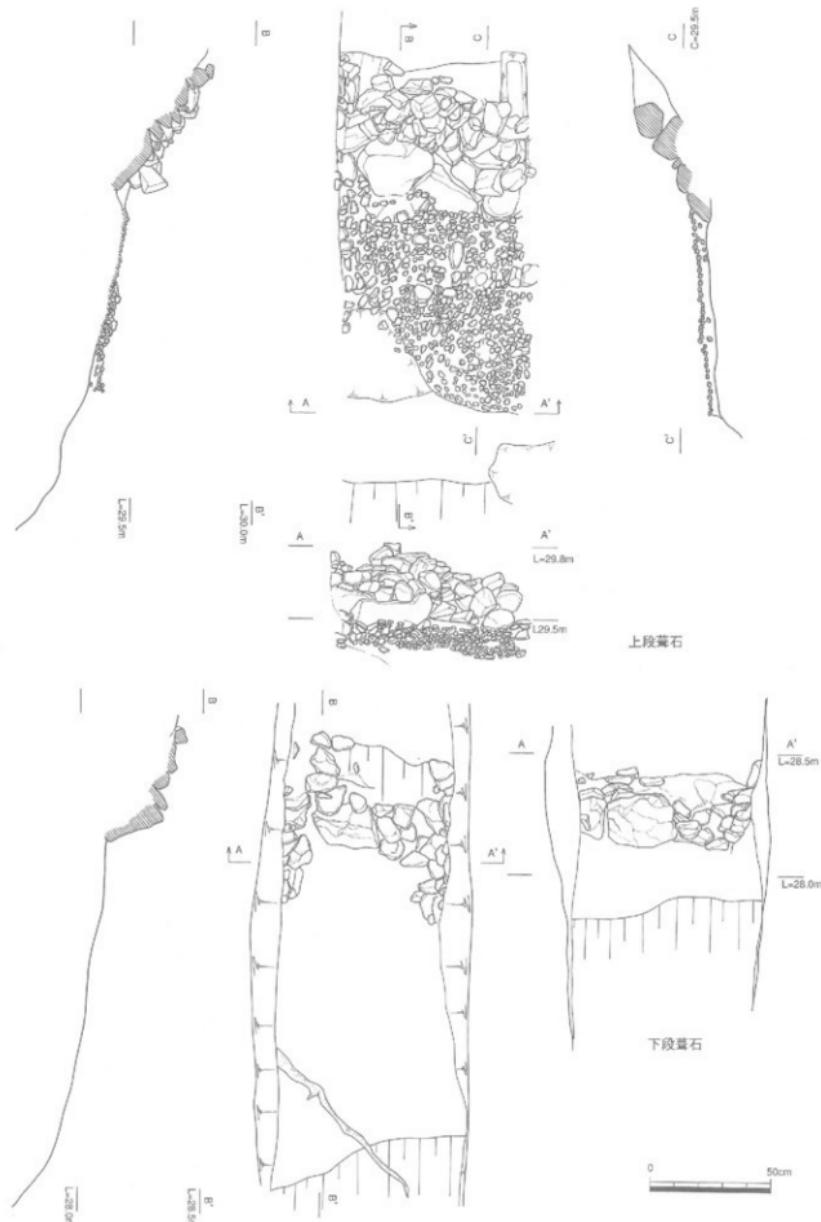
調査では原位置の葺石を把握するため転落してきた石材をはずす作業を行なった。まず、上位の拳大の礫や2～5cmの小礫には壺形埴輪片が混ざっているため、上位の礫からはずしていく。2～5cmの小礫をはずすと5m地点から5.5m地点にかけて原位置を保った葺石が検出された。次に5.6m～6m地点の拳大から人頭大の葺石材が多くが下位に壺形埴輪片を含むことから、一石ずつ確認をしながら取り外した所、葺石の裾（5.5m地点）から6.3m地点にかけて1～2cm程度の小礫が比較的しまった土に混ざって密に検出された。この地点は地山の傾斜がゆるくトランク状をなす。

⑤ 上段葺石のテラスの様子

このテラスの小礫の性格を明らかにするために断ち割りを入れた。小礫は表面に顯著であるが、地山との境は比較的少なく、地山直上は2～3cmの厚さ



第5図 トレンチ4 平面・断面図 (1/60)



第6図 トレンチ4 築石 平面・立面・断面図 (1/20)

でにぶい黄褐色土が目立つ。地山はわずかに傾斜するものの、埴丘傾斜全体からはテラスを意図していることが伺える。テラスの西側の端部は6.6m地点で、東側は上段葺石の基底石の地点の5.5m地点で、テラス幅は1.1mである。地山の傾斜は6.6m地点から6m地点までの60cm間は緩やかに10°で傾斜し、6m地点から5.5m地点の50cm間はほぼ水平になっている。地山上の小礫としまったにぶい黄褐色土はほぼ均等の厚さで地山上に堆積しているが、テラス東端は崩落のため小礫は認められない。下段葺石の上部には壺形埴輪片と堆積土に混ざって同様の小礫が顕著に確認できることから、ここからの転落と推察される。

この小礫と葺石基底石の設置の前後関係は、基底石の下半部まで小礫が覆いかぶさっており、特にトレント南端の基底石はこの小礫によって完全にバッタクされた状態であることから、基底石が先行するようと思われる。断ち割りは基底石2石がかかるよう入れた。トレント東端の基底石は埴丘に差し込むように斜めになっており、小礫は基底石の下面まで入り込んでいた。一方、トレント東端から2石目の基底石は地山直上に置かれており、小礫は下位に入り込んでいない。よって、基底石を設置した後に小礫を敷いたことが推察され、この小礫はテラスの礫敷きと考えられる。なお、断ち割りにおいて小礫中から壺形埴輪の小片が数点出土している。

⑥ 上段葺石の様子

現状で葺石は約5段確認できる。最下位に20~30cmの比較的大型の基底石が見られる。基底石の下場は標高29.4~29.45mで、地山にもたれかけさせ、上面は地山側に傾斜している。トレント南端の基底石は一見小さいが、南側がトレント内に入り込んでいるため大型礫になる可能性もある。基底石から上位は拳大の石材を斜めにはめ込んでおり、礫の隙間に2~4cmの小礫を充填している箇所もある。葺石の傾斜角度は35°である。

トレント南端の葺石上部には葺石が1石抜け落ちている箇所があり、この部分から葺石の内部を確認すると、葺石は地山の傾斜面に一石ずつ一重に設置し、局所的ににぶい黄褐色の置土が認められる。置土には小礫が若干認められる。上段葺石の最上部にも小礫の堆積が認められたが、流土と混ざった状態で、置土とは明瞭に分層できた。

石材は花崗岩、雲母片岩からなる。花崗岩は角の取れた礫とともに古墳の立地する岩盤も使用されており、上段葺石の北東付近にはこの岩盤の使用が目

立つ。

⑦ 下段葺石間の様子

上段葺石のテラスの西端である6.6m地点から8.5m地点までの約2m間は表土下に灰黄色土、その下位に地山が確認できる。地山上の堆積は厚さ約20cmである。地山は下段葺石上部付近で岩盤が露出している。この地点でも多くの壺形埴輪片が見られる。葺石は原位置を保つものではなく、転落石もごく少数であった。

⑧ 下段葺石地点の検出状況

8m地点では地表面から30cmで岩盤を確認した。ここから9m地点は流土と混ざって小礫と壺形埴輪片が顕著に確認され、9m地点から10m地点は拳大の礫（中には20~30cmの大型礫も見られる）が壺形埴輪と混ざって検出された。11m地点に地山の傾斜変換が見られ、以西は傾斜変化をしながら急傾斜する。

⑨ 下段葺石の様子

8~9m地点の小礫、壺形埴輪片をはずすと岩盤を検出し、8.4m地点から傾斜変換し急傾斜になっている。そして、8.8m地点、標高約28.1mで葺石の基底石と考えられる20~30cmの大型礫が2石並列しているのを確認した。この2石の西側は地山が平坦になっていることから、石材のある箇所がテラスからの傾斜変換点である。この2石から西も中・大型礫は見られたが、礫の下方に壺形埴輪片があり、埴輪片の上位の礫を取り上げていくと、2石の大型礫の前面は地山のテラスとなった。一部埴輪片が下に見られず取り上げることのできなかった礫もあったが、地山と礫の間には埴輪片を含む埋土と同様の土が堆積していたため、下段葺石のテラスに敷石等はなかったと考えられる。2石の大型礫の上には1~2石の平たい石が積まれているが、原位置を保っているか判断は困難である。葺石の基底石は2石とともに地山直上に設置されている。2石の大型礫の南側は葺石崩落のためか、大型礫は認められない。また、原位置を保っていると断定できる石材もない。検出した礫は各々拳大の平らな石で、斜めに駆け込んだように見える石材や圧力のためかや外側に飛び出した石も認められる。なお、この平らな石は全て雲母片岩である。

下段葺石のテラスは15°で緩やかに傾斜し、基底石からの水準距離約1.7mの11m地点付近に傾斜変換点がある。

⑩ 下段葺石から下位

11m地点の傾斜変換点から西は急傾斜となる。特

一つ山古墳

に11.2m地点から12m地点間は35°の急傾斜で、そこから西は若干緩やかとなり12.5m地点で平坦となる。この平坦地の標高は約26.7mである。この傾斜面は岩盤の露出した箇所が多く岩盤の塊石が点在している。

この地点で遺物は10.8m地点で比較的大きな壺形埴輪片が表土直下で1点出土したのみである。

(3) レンチ 5

墳頂部から約1.2m南の墳頂部縁を起点として長さ12mで設定した。レンチ北西隅は昨年度調査のレンチ2と一部重なる。地表面から20cm以内で地山を検出し、壺形埴輪片、葺石はほとんど確認できなかった。以下ではレンチ西端からの水平距離を～m地点と記述する。

① 盛土の様子

2.35m地点から西で盛土を確認した。2.35m地点の地山上面、標高約30.8m上は灰色土が見られレンチ4の状況と一致する。ただし、レンチ4は標高約30.25mから認められたのに対して、レンチ5は標高約30.8mで約50cm高い。灰色土から20cm上位（標高約30.45m）の2.14m地点から明黄褐色土が見られ、これもレンチ4と一致する。さらに約30cm上位からは小礫を含み非常に硬くしまった灰黄褐色土が盛土されている。この盛土はレンチ西端まで見られる。この盛土範囲内では墳丘傾斜面の上方で1点壺形埴輪片が見られたが、葺石などの石材は全く確認できなかった。

② 2.35m地点から7.7m地点の様子

地表面から約20cm下で地山の岩盤が見られる。塊石が散在するがすべて岩盤であり葺石とされるものはない。また、この区間に壺形埴輪は皆無である。岩盤上面は凹凸が顕著でテラス面も確認できない。

③ 7.7m地点から12m地点

7.7m地点（標高約29m）で傾斜変換し、8.8m地点まで岩盤の地山面は急傾斜する。この地点の地表面は緩やかな傾斜であるため、地表面から地山面までは約70cmの堆積がある。堆積土に混ざって安山岩の割石、小礫等が数点認められた。

9m地点から東は標高約27.9mで平坦地が約2.5m続き、以東は急傾斜で落ち込む。レンチの東側は攪乱のためか急傾斜しており、古墳築造時の様子を伺うことはできない。なお、平坦地上の10.3m地点から11.2m地点では小礫、安山岩の割石を複数確認した。安山岩の割石はレンチ1・4・6の墳丘傾斜面では確認しておらず、なぜ、この地点に集中

するのか注意を要する。ただし、これら石材は原位置を保つものではなく、すべて堆積土にある。壺形埴輪は小片ではあるがこのテラス面で2点出土している。

以上からレンチ5は後世の改変によって貸石、壺形埴輪はほとんど失われていると考えられる。また、地山の傾斜も7.7m地点以東の状況からは後世に改変された状況が伺え、墳丘範囲、外表施設を把握する十分な情報は得られなかった。

(4) レンチ 6

レンチ5で十分な内容が得られなかっただため、補足として設定した。このレンチは墳丘裾部を把握することを目的としたため、レンチ1、レンチ4で確認した下段の葺石の想定される範囲で設定した。ただ、調査の経過において上段葺石の情報も必要となり、上段葺石前面のテラスの小礫までを最終的には検出した。レンチは墳頂部から南西9mを基点として、長さ7mで設定した。以下ではレンチ東端からの水平距離を～m地点と記述する。

① 上段葺石の小礫

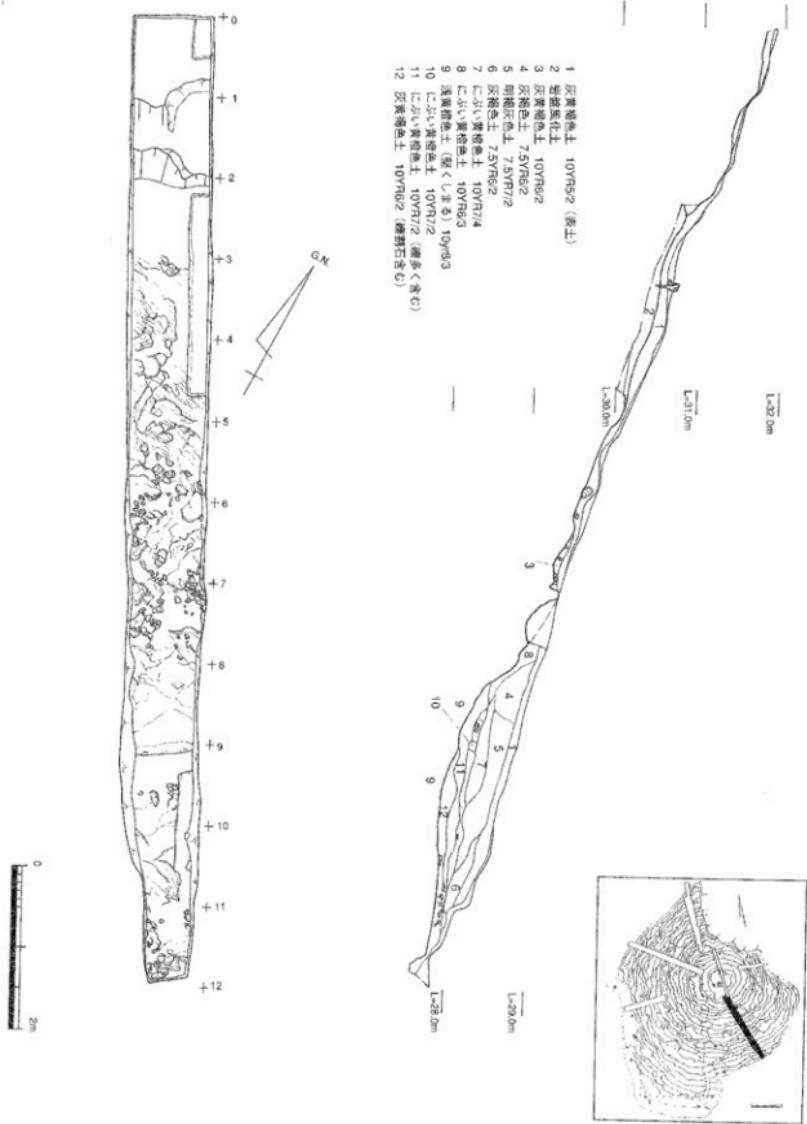
レンチ東端から20cm地点までの間に小礫が集中して認められる。小礫上面の標高は約29.44mで傾斜は緩やかである。小礫上面には長さ15cm程度の挙大の礫も散在しており、葺石の転落石と考えられる。おおよそ20m地点（標高29.4m）に傾斜変換点があり、以西は地山の岩盤が傾斜する。

② 20cm地点から3.2m地点

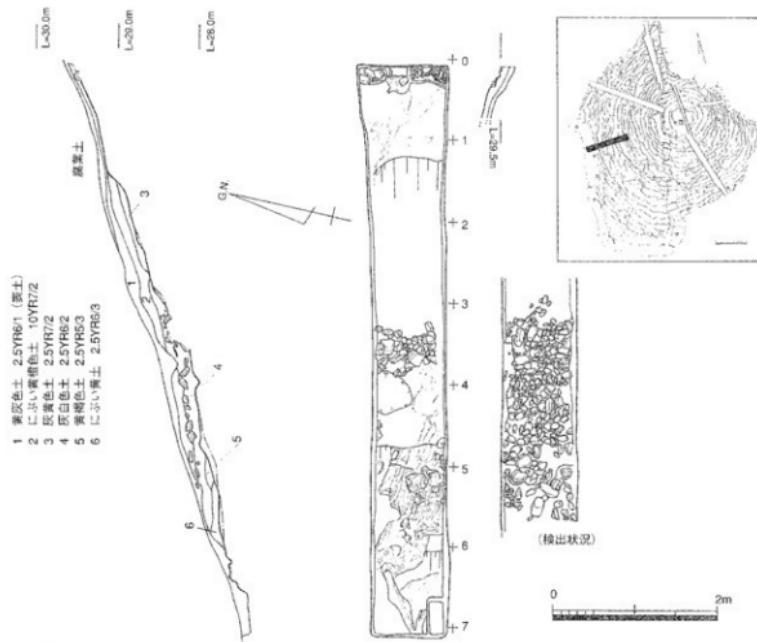
20cm地点から3.2m地点は地表面で幅1m程度のテラスが墳丘西部から南部にかけて墳丘を取巻くように認められた。表面観察ではこの地点に古墳のテラスが位置する可能性を想定していたが、地山は20°で傾斜しており、テラスは後世の堆積であることが判明した。従って1.1m～3.2m地点は堆積が厚く約30cmを測る。外表施設は壺形埴輪片、葺石が散在しているが、原位置を保つものはない。小礫も比較的多く見られるが、上段葺石のテラス面からの転落と考えられる。

③ 蔷石の様子

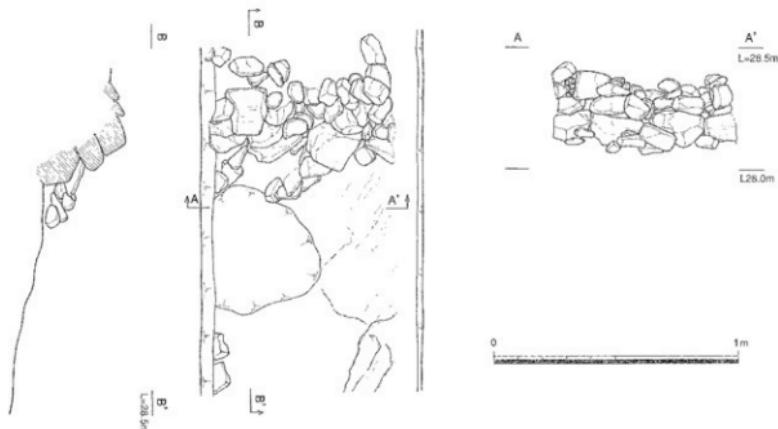
3.2～5.6m地点で葺石を検出した。葺石は壺形埴輪片と混ざった状態で検出し、表面に見える多くは転落してきた葺石で挙大の大きさが多い。レンチ4の下段葺石の上位で見られたような小礫の集中は見られない。下位に壺形埴輪や堆積土の見られる葺石をはずしていくと、3.3m地点から3.8m地点の50cm間で現位置を保った葺石を確認した。葺石は基底



第7図 トレンチ5 平面・断面図 (1/60)



第8図 トレンチ6 平面・断面図 (1/60)



第9図 トレンチ6 磚石 平面・立面・断面図 (1/20)

石として20~30cmの大型礫を置き、上位に幅10cmの拳大の礫を斜めに差し込むように入れている。基底石下面の標高は約28.1mでトレンチ1の下段傾斜変換点とトレンチ4の基底石下面の標高と一致する。石積は現状で基底石を含めて3~4段に積まれており、傾斜角度は60°である。興味深い特徴として基底石は地山面に置かれているが、2石の基底石の間や下に拳人の礫を入れてあることで、基底石の傾斜角度の調整や基底石間の石材の充填を意図した可能性がある。

基底石の前面はテラスが3.8m地点から4.6m地点までの80cm間見られる。テラスは水平ではなく、約15cm下る緩やかな傾斜をなす。テラス面は地山で石材の敷設は見られなかった。また、局所的に岩盤が見られるなど置土等の造作は確認できなかった。

④ 4.6m地点からトレンチ西端の様子

4.6m地点から西は緩やかに傾斜して下るが、岩盤の広がりが顕著である。この地点で遺物は4.6m地点から5.6m地点で若干見られるが量は少ない。また、5.6m地点からトレンチ西端にかけては皆無である。葺石も同様で5.6m地点までは見られるが以西では確認できない。トレンチ西端の7m地点の地山上面は標高約27.35mを測る。

第6章 まとめ

第1節 墳丘の復元と規模

昨年度のトレンチ1と今年度のトレンチ4~6から現段階における復元を試みたい。

まず、墳頂部から墳端にかけてトレンチを設定したトレンチ1・4では上下二段に葺石が確認された。上段はテラス面に疊敷が見られ、トレンチ4では疊敷のテラスの墳頂部側において良好な葺石を確認した。トレンチ1では葺石の残りは良くなかったが、同じく疊敷きの墳頂部側に20~30cmの基底石と考えられる石材があり、上位に葺石が葺かれていたものと推察される。一方、下段はトレンチ1・4において地山のテラスを確認し、トレンチ4ではテラスの墳頂部側に20~30cmの基底石と考えられる礫を2石確認した。トレンチ1では葺石は残存していないかたが、テラスからの傾斜変換点は確認できた。下段葺石の様子が不明瞭なため補足としてトレンチ6を設定したが、トレンチ6においても同様に地山のテラスを確認し、また、その墳頂部側には良好な形で葺石を確認することができた。これらの葺石やテラ

スの傾斜変換点をより古墳の中心点を導き出すと現在の石仏の北東角付近に位置する。この地点は直下に剝抜式石棺が想定される場所である。

この中心点から墳丘ラインを復元すると、上段葺石ではトレンチ1・4の葺石基底石とその前面のテラス端がほぼ対応していた。一方、下段葺石はトレンチ1・4の基底石は対応するものの、良好な葺石の確認されたトレンチ6の基底石は約70cm外側にずれている。基底石の外側のテラス端は各トレンチで対応していた。

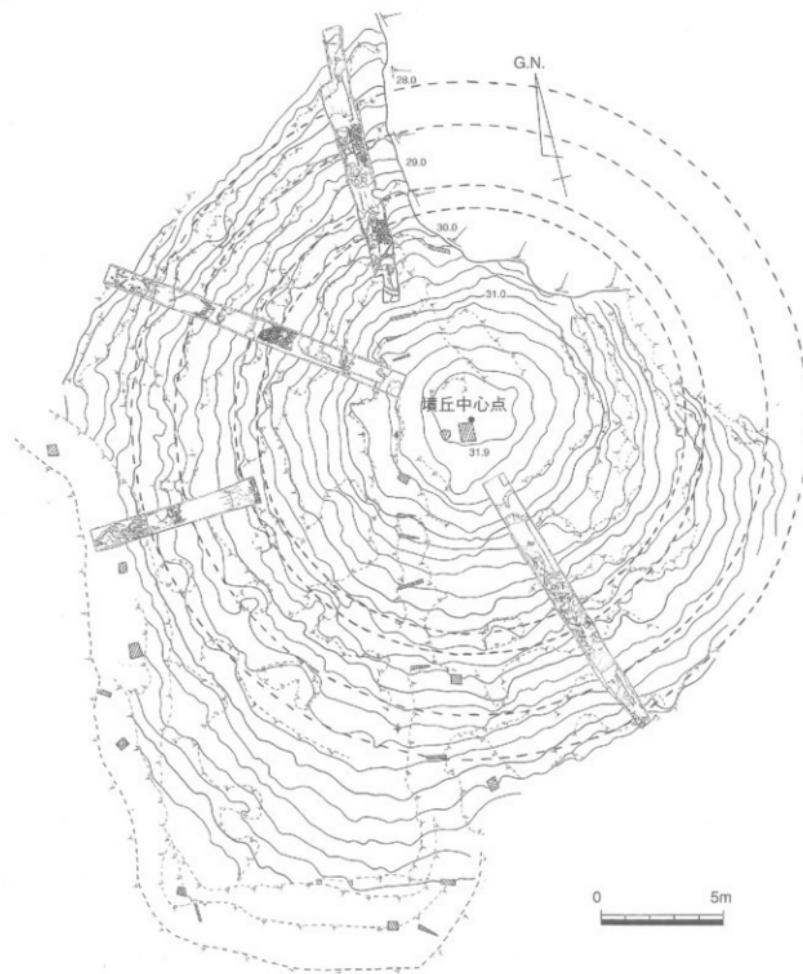
次に墳端部について検討する。下段トレンチの葺石の基底石が墳端と想定していたが、トレンチ4において下段葺石の基底石から水平距離3.5m西の標高約26.7mで再びテラスとなる。よって、この箇所で墳端となる可能性も想定され、トレンチ1、トレンチ6で確認したところ、墳丘中心点から同距離でトレンチ1が標高約27.2m、トレンチ5で標高約27.4mであり、それぞれ傾斜面でありテラスになっていない。また、傾斜角度もそれぞれ異なっていた。以上の検討から墳端部は下段葺石の基底石と考えられる。

以上から現段階での墳丘規模を復元すると、墳丘の中心から下段葺石の基底石まで約12mを測ることから、径24mと想定できる。トレンチ5では基底石が約70cm外側にずれているが、誤差の範囲と考えておおよそ径24~26mの範囲内に収まる。墳丘東側はトレンチ5の改変が顕著であったため、検討する十分なデータが得られなかった。よって、参考程度ではあるが、墳丘西側で確認した墳丘ラインを対応させると、トレンチ5東端の地山の岩盤が急傾斜で落ち込む箇所に墳端が対応し、上段葺石のテラス端は墳頂部からゆるやかに傾斜していた地山が抉れるよう急傾斜になる傾斜変換点にはほぼ対応はしている。墳丘高は墳頂部が標高約32m、墳端部が標高28.1mで、約4mである。

今回の調査では一つ山古墳が径24~26m、高さ約4mの正円をなす円墳であることが判明した。次年度では円墳に方形形状の張り出しが認められるか検討していく予定である。

第2節 盛土の様子

トレンチ4では標高約30.2mから上位で盛土を確認した。墳丘の中心からは約7mである。最下層の盛土は灰色土で断ち割した範囲では約10cmの厚さで地山の傾斜に沿って堆積している。灰色土の上位には明黄褐色土、オリーブ灰色土を帶上に盛土し、そ



第10図 墳丘ライン復元図（1／200）

の上位に小礫を混ぜて硬くしまった灰黄褐色土が厚く堆積している。断ち割りで確認したトレンチ東端から1.2m地点では灰色土の上に70cmの堆積が見られる。

埴丘東側のトレンチ5では標高約30.8mから上位で盛土を確認した。埴丘の中心から約4.7mである。最下層の盛土はトレンチ4と同様の灰色土で上位に明黄褐色土が帶状に見られ、さらに上位で小礫のまざった灰黄褐色土が確認できる。

このように埴丘東と西で盛土方法は類似した様子が伺える。埴丘傾斜面の最下層の盛土として灰色土を置き、傾斜面に帶上に明黄褐色土を配し、さらに上位には小礫を含みしまった灰黄褐色土を厚く盛土している。

次に盛土の確認できる地点であるが、埴丘東側のトレンチ5が標高約30.8mで埴丘の中心から約4.7mであるのに対して、トレンチ4では標高約30.2mで埴丘の中心から約7mで大きく異なる。これは、本来の地山の自然傾斜を利用しつつ、補足すべき箇所に盛土を施したためと推察され、本来の地山の最高地点は埴丘の中心点よりも若干東にあったためと推察され、そのために埴丘東の方が盛土最下層の高さが高く、埴丘の中心点からの距離が短くなっているものと考えられる。

第3節 外表施設の様子について

第1節では墳形、埴丘規模について検討した。この節では外表施設の特徴についてまとめる。

葺石は上下二段で確認されたが、上段葺石は葺石の前面にテラスをもち、礫敷きが見られる点に特徴がある。

テラスは埴端側の端で埴丘の中心から約9.5mを測る。この礫敷のテラスは水平ではなく、埴頂に向ってゆるやかに傾斜する。テラスの標高はトレンチ1の埴端側で約29.3m、埴頂部側で29.45mを測り、トレンチ4の埴端側では約29.2m、埴頂部側で約29.45mを測り、トレンチ6の埴端側では礫敷上で約29.44mを測りほぼ同値である。テラス幅は水平距離で約1mである。礫敷に使用している礫は1~2cmの小礫でにぶい黄褐色土と混合している。小礫は地山から2~3cmにぶい黄褐色土の堆積した上面に顕著に見られるが、内部にも少しは確認できる。この礫敷は基底石の下にまで及んでおり、トレンチ4南端の基底石は完全にパックされた状態であった。礫敷は一部基底石の下面にまで及んでいるが、葺石を設置した後に敷かれたものと考えられる。

上段の葺石はテラスの埴頂部側の端から地山傾斜面にかけて葺かれている。基底石は20~30cmで他の葺石に比べて大きな礫を使用しているが、全面に大きな礫が使用されているかどうかはさらなる検討を要する。基底石の標高はトレンチ1・4ともに29.45mで共通する。位置は埴丘の中心から約8.7mである。基底石の上位は拳大の礫を壁面に差し込むように斜めに入れこむ。一部圧力で石材の抜け落ちた箇所があるが、そこからの観察では葺石は基底石上に一重に葺き、所々に置土を使用している。また、石材間に小礫を充填している箇所もある。

石材は花崗岩、雲母片岩を使用しているが、一つ山古墳の立地する地山の岩盤も確認できる。

下段葺石は埴丘の中心からトレンチ6で約12.7m、トレンチ4で約12mに基底石が見られる。トレンチ1では基底石は確認できなかったが、地山変換点から約12.1mが推測される。上述したように、この地点が埴端部である。基底石の標高はトレンチ1・6で約28.1mを測り、トレンチ1は地山傾斜変換点で約28.1mを測り同値である。テラスは上段のような礫敷ではなく、地山が認められ、一部岩盤も確認できる。テラスの標高はトレンチ1で下側約27.85m、上側約28.1、トレンチ4で下側約27.8m、上側で約28.1、トレンチ6で下側約28m、下側約28.1mを測り、比高差約25cmで緩やかに傾斜する。テラス幅は約1.7m（トレンチ6は約1m）で下側の端部は埴丘の中心からの水平距離約14mである。

下段葺石はトレンチ6において良好である。葺石の積み方は上段葺石と同様に基底石に20~30cmの大型礫を置き、上に拳大の礫を壁面に差し込むように斜めに入れている。興味深いのは基底石の下部で、石材間に平らな拳大ほどの礫を入れ込んでいる。トレンチ4においてもトレンチ南側は基底石が欠失していたが、基底石が想定される箇所には平らの礫が見られる。もちろん上位からの転落石の可能性もあるが、トレンチ6と同様の役割を担った石材の可能性もあり注目される。

最後に葺石とともに出土した壺形埴輪について触れておく。昨年度の調査ではトレンチから出土した土器類は全て壺形埴輪であったが、今年度も同様に全て壺形埴輪であり、円筒埴輪は皆無である。今年度も葺石に混ざった状態で多くの壺形埴輪片が出土したが、原位置を保つと見られるものはなく、全て転落してきたものである。出土場所は上下段の葺石付近に多い傾向があるが、中間の地山傾斜面にも多く確認されている。また、上段葺石の最高位からも

一つ山古墳

確認されていることから、二段の葺石のさらに上段から転落してきたものも想定される。ただし、トレント4においては上段葺石から上位では出土は皆無であった。壺形埴輪の検討は現在接合作業中であり、次年度に報告する予定である。

<参考文献>

阿河銳二2006「一つ山古墳」

『さぬき市内遺跡発掘調査報告書』

大内齋谷1922『津田と鶴羽との遺蹟及遺物』

藏本晋司2004「丸龟市古岡神社古墳の再検討」

『研究紀要X 1』

津田町教育委員会 1973『ふる里津田の文化財』

津田町教育委員会 1959『津田町史』

津田町史編纂委員会1969『改訂津田町史』

津田町教育委員会 1986『再訂 津田町史』

津田町教育委員会 1986『津田町外史』

津田町教育委員会 2002『岩崎山第4号古墳』

長町與彦 1926『津田町史』

六車惠一 1965『讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ご

ろの謎』『文化財協会報7』

赤山古墳

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成16年度から国庫補助事業として津田湾古墳群の内容確認を実施しており、平成16年度・17年度で鶴の部山古墳、平成17・18年度で一つ山古墳の確認調査（継続中）を行なってきた。そして平成18年度の一ヵ年計画で赤山古墳の内容確認を計画した。赤山古墳は本来全長約50mの前方後円墳であったが、開墾、宅地化によって墳丘は縮小の一途を辿り、現在後円部の一部を残すのみになっている。墳頂部には2基の刳抜式石棺があり、出土遺物として鏡、石製腕飾類が伝わっていることから学史的に注目されてきた古墳である。しかしながら、現在に至るまで墳丘測量は実施されておらず、石棺の方位、墳丘の現状等の検討は十分に行なわれていなかった。また、刳抜式石棺についても詳細な内容は明らかではなかった。このような現状から、墳丘の測量調査を実施し墳丘の現状を検討すること。刳抜式石棺を詳細に図化し石棺を検討することを調査の主な目的とした。

平成18年度の調査体制は以下のとおりである。

（調査体制）

さぬき市教育委員会生涯学習課

課長 六車 均

課長補佐 佐伯 宗澄

係長 山本 一伸

主事 鶴身 昌大

大川広域行政組合埋蔵文化財係

主査 阿河 銳二

主事 松田 朝由

技術員 多田 歩

技術員 武井 美和

第2節 調査の経過

平成18年8月21日から24までの4日間草木の伐採をし、8月29日から墳丘測量を開始した。墳丘測量は29日から9月7日までの7日間を行い、11日から21日にかけて石棺の実測を行った。



(S=1/10,000)

第11図 遺跡位置図

第2章 赤山古墳に関する過去の記載

赤山古墳の記述の最初は鶴の部山古墳や一つ山古墳と同様に大正11年（1922）香川新報に掲載された大内豊谷氏の『津田と鶴羽の遺跡及遺物』の連載である。11~13回目の3回に渡る。内容は以下のとおりである。

1月25日・11回目

『赤山塚、これは鶴羽村の畠地新池の上に在り。里人は赤田と呼んで居るのは其土色の赤きを以って云ふのであろうが本当は自然の山でなく人工に依つて造られた。壁土である封土は年々ざいざいに掘付けられて、墳丘の裾の廻り今は僅に十四五間ばかり、高さ三間、墳上も亦程に削り取られて平地が出来、周囲に松樹十數本と山桜が一本残って居る。其下に白祇大明神と記し小さな陶焼の祠が一つと傍らに不動明王を影刻した石碑が建てられてある。其の桜の根元に正面して、円筒形の石棺の一端が露出して居る。石質は例の白粉石のやうであるが私は練石であるまいかと思ふ。棺の長さは不明なるが蓋石と底石を合わせた所で測って見ると直径二尺七寸、その露れて居る部分が二尺五寸ばかりである。塚の方向は南南東に築造されて、墳形は現状から考察すると円形墳、即ち丸塚であったらしい。規模は周囲が丈畝に開墾されてある点より見ると、其の当時は稍大なるものであったらしい。そこで此の塚が何人を埋葬したのかは無論判然せないが、私は白祇大明神成は塚に關係した人を祀つてあるのではあるまいかと思って、二人の人に尋ねて見たが誰も祭神名を知らなかったのには一寸落胆した。其時里人の話では安政二年の春土人の或者が此塚の頂上を少し掘った所、土中から壺に入った玉や鏡等が出て来たので吃驚して後の口を恐れ、又其の儘塚に手を懸くる口なく今日に残つて居るのだと云うことである。』

1月26日・12回目

『然らば此塚は一度発掘されたのであれど私は石棺の位置及び封土の状態から考察して発掘は墳丘上的一部分で全体には及んでいないやうに思われる。所が茲に一疑問がある。石室の存在しないのは甚だ不振の至りである。かう云う構造の墳墓にはどうしても石室が無ければならぬ。竪穴式か横穴式か何れにしても石棺を蔽むべき石室又は玄室が吃度あるべ

き筈である。ケボ山塚でも龍上山塚でも吉見塚でも背板石を以て造った竪穴の石室があるのに独其塚のみないのは仰も如何なる理由であろうか。人或は云はん。石室は既に破壊されて築石などは他へ持ち運ばれたのである。然れ共現在残る墳丘の何れの方向を観察して、更に形跡が認められないのみならず僅一個の築石らしきものさへ発見されない。それに石棺が今尚埋没せられて居る。以上若し石室の設けられてあったとしたら一部分でも残存せねばならぬ訳である。然□此の墳墓が所謂墳墓時代であつて築かれた新しいもの、或は平安朝以後の□塚の類か、又は極めて古い□一期古墳時代の無石柳のものと見るがと云ふ二問題に帰着するのであるがかうなつては大分問題が六ヶ敷なりて古墳論を□ぎ出して来なければならぬようになるが、私は此塚の構造□及び上器類の破片から觀察して之が墳墓時代の墳墓であるとは思われない。茲に於て簡単に古墳式制度に拘れる墳墓の築造法並びに石棺と石室との関係を述べて解決して見たい。凡そ舊い時代の墳墓、考古学者の所謂古墳時代のものは初期に在つては外部を主とした上工の大墳墓が行なわれて埴輪樹立が使用されており。石棺は墳丘の上段に置かれ、無論石室はない。中頃は内部外部双方に配意された土工的石工的墳墓が行なわれて埴輪樹物は僅少になり、墳丘の中段の所に石室を設けて石棺を納められている。此の二期の墳形は前方後円式、円形、半円形、山依古墳□形式を示して居る。後期には内部を主とした石工的墓、即ち石柳に狭道を只備したもののが一般に行なわれ石柳は地平面に築かれて横穴式となり、外形は円形と山依最も多く而して合葬改葬墓葬されたものがある。最早此の時代には埴輪樹物などはスッカリ無くなつて居るのである。之を單に石棺と石室との関係上から云ふと、初めは單に石棺ばかりを上中に埋め置けることと其が一変化を示して周囲に簡単な梯室を作つて石棺を保護するようになり、其の簡単な石室が次第に発達して宏大な梯室となり、更に一変して石棺其者が大きくなつて石室の意□をなせること、即ち石棺が石の厨子的に変化して居り、□には石棺に狭道の通路が付加せられるようになって居るのである。副葬品は素より雑多であるが弥生式土器又祝部土器は種々なる型式のものが埋没使用されて居る。而して藤原時代の末期になって此の制度が全然止んで仕舞つて不規律不完全な墳墓が造り出されて居る。実□これ以□は地平面以下、即ち地下に縦穴を穿つて石棺□蔵め、些少の封土を施し、決して大なる丸塚は築かれないと云ふのである。』

墳上には必ず墓碑が建設され方向も一定せず、東西南北何れの方面に向ってでも築かれてある。而も副葬品は古墳時代墳墓の曲玉や石器類、銅製品など残められてあるに反しそんな者はほとんどなく、遺物は鉄製品が多くなって居るのである。』

1月27日・13回

『以上の説明によって憶を逞しうして見ると石棺が墳丘の上段に置かれてあって、石室を具備せないのは第一期古墳時代の構造法に相似たるあり。それから塚の周囲の田畠に在る十器の破片は弥生式に祝部を混じ偶に刷毛目のあるものあり。祝部には内部に渦文の付せられたる上器把手も落ちて居る。之は一期二期を通じてのものである。又山車や鏡鑑を出して居るのは二期まで及ぶのである。鏡鑑は銅製であったらしい。私は長町與彦君に托し土器の破片や把手を津田小学校へ贈ってある。□□すると此古墳は第一期のものとも云われ又二期三期時代のものとも見られるけれども私は石棺所在の位置と土器破片とより考察して第二期の中期、即ち紀元一千二三百年の頃に築造されたものであつて、其石室のないのは改葬されたものか、或は又重葬であつて、この下部にもう一つ石棺が埋められ其处には槨穴式壙があるかも知れない。今露出来る石櫛は即ち重葬したもので墳丘が狹隘であったから石室も造られなかつたのではあるまいかと想像する。全体古墳は一人のために造る場合に比較的少ない特別の人の他は一墓中に数人の遺体を収めたのである。又特別な人の墳墓でも後にそれへ持つて行って合葬もし、附葬もし、重葬もせられたものである。大宝令の頃でも三位以上の人若しくは人の氏上、即ち氏宗か又は別祖かでなければ一人の為に墓を作ることは得られない規則であった。此れ等の例から考へて此塚は改葬若しくは重葬墓であろうかと思はれる。然しながら之は私の想像説である。只試しに云つた迄のことであつて、実際の解決は発掘して身なれば確かなことは判明しない。それに此の如き問題に対しては矢印に結論は急がれない。須らく徐々として研究を続けて自分一人の力で解らなければ弘く世の学者の助力を得て後に決定すべきものだと思ふ。故に私は結論を避けて読者諸君の御指導を仰ぐ。』

1月28日・14回

『最後に於いて此塚の丘上に祀られてある白祇大明神について簡単に私の思い浮かんだことを記して置かう。白祇と称するのはどう云う理由から生まれ

た神名であらうか。他に余り聞きなれないのみならず地方人も只シラギさんと呼んでいたと云うのであれば白祇と書くのは若や仮字であってシラギは新羅に非ざるかと思う。前回述べせし如く此地方には渡来民族、若しくはそれに接触した民衆の住んで居たとしたならば茲に新□の墳墓あるは敢て不思議ではない。私は平素から云う意見を抱持する。現今の大川郡内には韓半島或は満州地方よりの移民族や其地方へ盛んに交通して居た民族が古代には□□のであろうと云うのである。志度寺の海女の玉取伝説などは儘に之を証明するものである。志度には例の海民族の居て韓半島から遠く渤海に遙往来した所から藤原淡海公の女が唐の高宗皇帝の妃となつたなど云う奇々怪々なる伝説があるのであろう（志度寺の海女伝説に関しては志度町の遺跡を書く時に碑見を述べる）。尚圓造本紀に繼体天皇の御代、筑紫国造の磐井君が叛した新羅の海人部は古への韓半島□なる倭人所謂九州海部族の□であろうと迄云はれて居る。それは兎に角も本県仲多度郡金蔵寺付近であるが現に新□明神と称するのである。然ならば白祇大明神とは新羅大明神であつて此塚山は新羅人に因縁ある墳墓ではあるまいかと想像するのである。』

大内氏の記録から3年後の大正14年10月10日、赤山古墳は盜掘にあう。大内氏の記録は盜掘にあう前の赤山古墳の様子である。この内、興味深い点をいくつ挙げると、安政2年の発掘の様子が伝えられていること、周辺に埴輪片とともに須恵器が採集できたという情報である。また、墳丘については、前方後円墳の存在を知っていた大内氏が円墳と判断しており、前方部の低平化が顯著であったことを伺わせる。考察としては、古墳の年代を埋葬施設等から検討していること、古墳の性格を重葬墓としていること、新羅との関係を推測している点が興味深い。

次に大正15年(1926)の『大川郡誌』には赤山古墳に関する記載がある。

『此の古墳は鶴羽村相地赤山にて砂野弥吉郎所有地に在り。其の初めて発見せられしは今より約七十年前にして此の地を開墾せしとき石棺を発見し、その傍より曲玉及び壺高杯等上器を多数拾い取りたり。然れども其の祟あらんことを恐れて元の如く之を埋め、且将來荒廃に帰せんことを虞り、墳丘上に桜樹を植え尚ほ火山に祀れる白羽明神を遷りたりといふ。現今墳丘上に根元の周り二尺許の桜樹と一小祀等のあるもの即ち是なり。』

此の古墳現今は既に大部分開墾せられて畑となり、人に其の形状を損すと雖も所謂瓢箪形墳にして瓢形

赤山古墳

の台地の高さ上段より約一間半、基部よりは五六間あり。台地の上部に於いて南北三十間半、東西十七間ありて約三百五十四歩の面積を有し、其の規模宏大なり。然れども漸次開墾せらるるに従ひ、今は僅かに後円部のみを遺せるに過ぎず。其の頂上南北一十六尺、東西二十四尺、此所に二個の石棺露出し此の墳丘上を覆ひたる葺石今尚少許残存す。

墳丘上に露山せる二個の石棺は大正十四年十月十日頃何人か之を発掘して其の副葬品を竊取せり。石棺は凝灰岩(俗に白粉石といふ)にて造れる割竹形の刳抜式に窓し、大なる方は桜樹の下に在りて長さ九尺六寸、小なる方は長さ七尺四寸ありてその距離五尺三寸、其の内部の枕に充つる所は一段高く其の製作甚だ精巧なり。而して之を直接土中に埋めて石棺の設けなく頗る古代に属するものとす。実地に就きて検証を遂げたるに大なる石棺は孔を穿ちて其の副葬品を竊取したる後なれば石棺内には一物もなく屍体つめたる朱にて棺内一面に赤く染まり居たり。唯其の付近に管玉(出雲石にて製す)瑠璃卡各二個を拾ひたるのみ。然れども其の穴の口に線鋸破片の落ち居たるに徴すれば蓋し銅器(多分銅鏡ならん)の棺内に存せしを知るに足らん。小なる石棺は蓋を開きて副葬品を盗みたるものにして其の内も同様の朱にて一面に赤く染まれり。此の棺内を検せしに僅かに左記の数品残留せるのみ。

一、頭骸骨の破片 一、歯七本(門歯四本、犬歯一本、臼歯二枚) 一、管玉(出雲石)十一個 一、瑠璃玉九十三個

七十年前開墾に關係ありとし称する八十五歳の老翁の語る所に依れば其の当時現に露出せる両石棺の中間の下部に石棺ありて中に石棺を藏せるを認めたりといへど、之はその古墳全部を発掘するにあらざれば果して然りや否やを知り難し。』

大正14年の盗掘をきっかけとした岡田唯吉氏の出張調査の報告である。大内氏が記載した江戸時代末期の発掘の様子や当時の墳丘の状況を伺うことができる。

昭和3年(1928)、香川県史蹟天然記念物調査報告会の『史蹟名勝天然記念物調査報告 第三』に赤山古墳の報告がある。『大川郡誌』の内容とはほとんど同じであるが一部追加が見られる。追加した内容は1、江戸時代末期当時は「此の辺一帯に大木生ひ茂り此の古墳の頂上には桜の大木も数本ありたり」ということ。2、付近より出土した曲矢及び箭、高杯等の土器は現存しないということ。3、開墾時に発見された石棺は『凝灰岩(俗に白粉石といふ)にて

覆める石棺』があって、他に『石棺なくして只石棺のみのもの二個を其の傍に発見』したということ、4、石棺発掘後、臼羽大明神とともに不動明王を祀ったということ、である。

昭和3年の報告で重要な記載は『凝灰岩(俗に白粉石といふ)にて覆める石棺ありて』という点だけは山古墳や岩崎山4号墳と同様に凝灰岩の天井石を使用している可能性がある。なお、墳頂に祀っている祠名は大内氏は白紙大明神と記載しているが、『大川郡誌』『昭和3年報告書』では臼羽大明神とある。

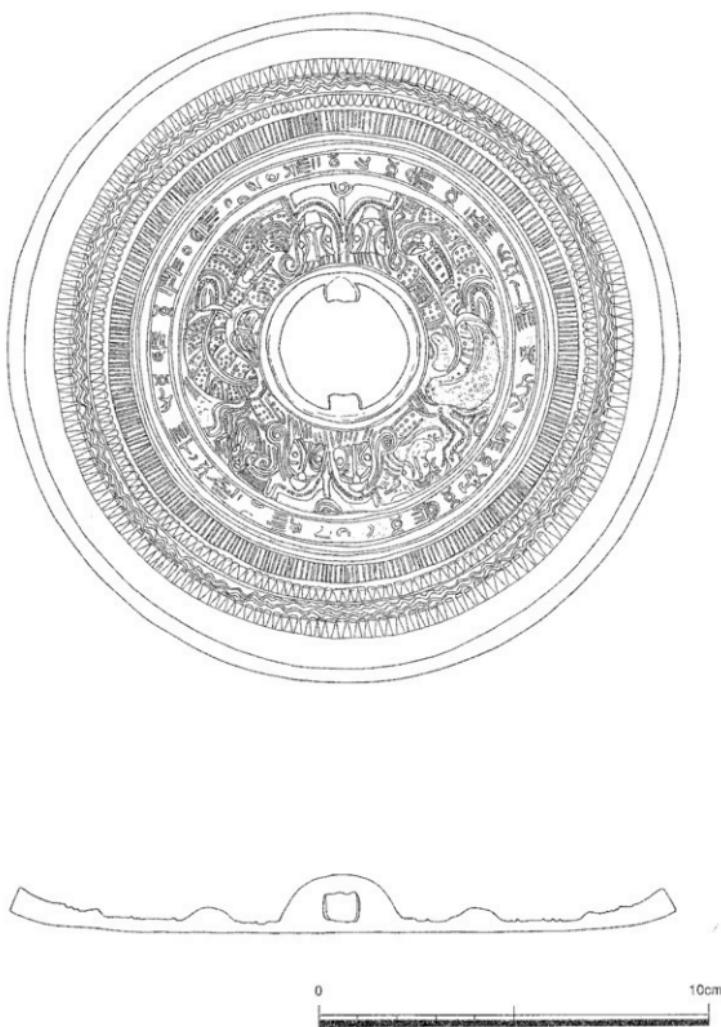
『大川郡誌』『昭和3年報告書』では当時の墳丘形態、法量を記録している(これについては後述する)。また、大正14年10月10日の盗掘後に出土した遺物についての記載がある。1号石棺の棺内に遺物はなかったが、付近から管玉・ガラス玉12個が出土し、盗掘口に線鋸の破片が落ちていたことから鏡を推測している。2号石棺は棺内より頭蓋骨の破片、歯7本、管玉11個、ガラス玉93個が出土している。

昭和10年、梅原末治氏は『考古学6-8』の『讃岐山上の一古鏡』において昭和10年に香川県の好事家から大阪高麗橋の村上民二郎氏に渡った古鏡について紹介している。古鏡の紹介の後、鏡の出土した古墳について検討している。鏡は讃岐国大川郡津田町西南雨滝山山中の中の石棺内で出土し、香川県の好事家が明治の初年同地で入手したものという。梅原氏はこの古鏡が赤山古墳からの出土と判断し、現在に至って伝赤山古墳出土の鏡となっているが、赤山古墳の立地は津田町西南ではなく、また、雨滝山山中ではないことから再検討する必要があろう。津田町西南の雨滝山山中は奥古墳群があり昭和47年(1972)に発掘調査されている。この銅鏡は当地から出土した可能性がある。

昭和34年(1959)『津田町史』はほぼ大内氏の記載、大川郡誌、昭和3年の報告をまとめた文章である。

『盗掘後の調査では、小さい棺は穴をうがっており、棺内は朱で染まり付近から管玉(出雲石製)瑠璃玉1ヶを拾得した。大きい棺は蓋をあけて、遺物を取り出したらしく残留品としては、人骨(頭蓋骨の破片、歯七本(門歯四本、臼歯二本))管玉(出雲石製)11ヶ、瑠璃玉93ヶを発見した。後円部には埴輪円筒をめぐらしていた。』

後円部に埴輪円筒をめぐらしていたというのは新たな記載である。一方、出土遺物は大川郡誌や昭和3年の報告書とそれぞれ出土した石棺の記載が対応になっている。また、1号石棺から出土した管玉・



第12図 伝赤山古墳出土鏡（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）（4／5）

ガラス玉は1個ではなく、12個であり、数が誤っている。

昭和58年の『香川叢書』『香川の前期古墳』では沖田町郷土館と瀬戸内海歴史民俗資料館に遺物が保管されていると記載されている。

現在、遺物は瀬戸内海歴史民俗資料館で盤龍鏡1、石剣5、管玉37が保管され、さぬき市郷土館で勾玉1、管玉6、ガラス玉20が保管されている。これらの遺物の経緯は現在のところ不明であり、今後の課題である。



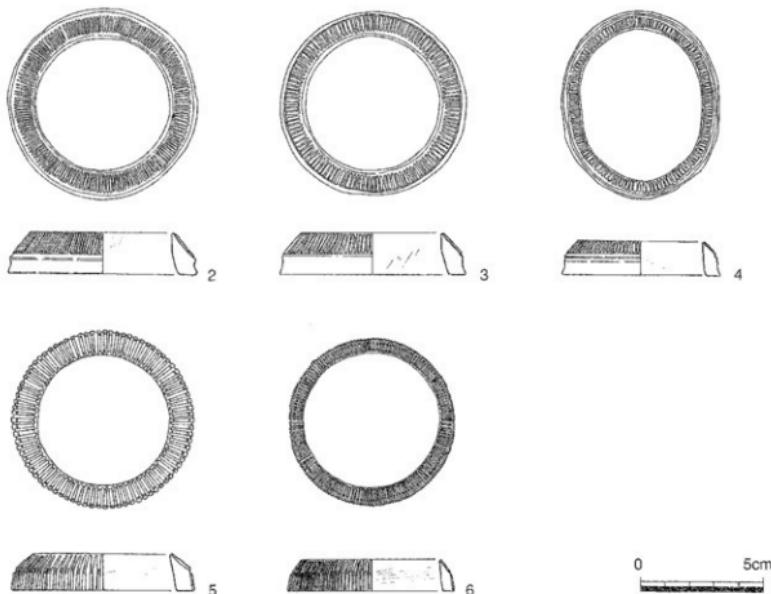
第13図 伝赤山古墳出土鏡 拓影図（1／1）

第3章 出土遺物について

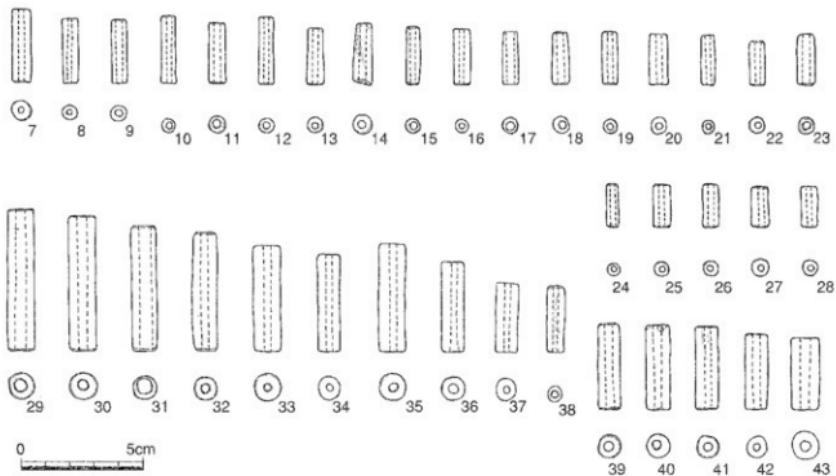
前章で触れてきたように赤山古墳の出土遺物については今に伝わる経緯が明確でないものが多く、また、遺物の記載も誤って伝えられているものが多い。この章ではこれまでに赤山古墳で出土した遺物について、再度整理したい。

まず、大正14年の盗掘をきっかけとして出土した遺物において現在、町史等では小さい石棺が付近か

ら管玉1、ガラス玉1が出土し、大きい石棺から人骨、歯7本、管玉11個、ガラス玉93個が出土したと伝える。しかしながら、大川郡誌、昭和3年の報告では1号石棺は棺内に遺物はなかったが、付近から管玉・ガラス玉12個が出土し、盗掘口に線縞の破片が落ちていたことから鏡が出土した可能性があるとし、2号石棺は棺内より頭蓋骨の破片、歯7本、管玉11個、ガラス玉93個が出土したと記載されており、1号を大なる石棺、2号を小なる石棺としている。



第14図 伝赤山古墳出土石鉄（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）（1／2）



第15図 伝赤山古墳出土管玉（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）（1／2）

赤山古墳

遺物番号	外径	内部内径	下部内径	高さ	下深幅	材質	色調	備考
2	7.8	5.8	6	1.7	0.8	碧玉	淡緑色	
3	7.6	5.8	6.2	1.7	0.7	碧玉	淡緑色	石の縞が見える
4	7.8	5	5.2	1.4	0.7	碧玉	淡緑色	横円形をなす
5	7.4	5.4	5.9	1.5	0.7	碧玉	深緑色	
6	6.8	5.6	5.9	1.3	0.5	碧玉	深緑色	

表1 石鏡観察表(瀬戸内海歴史民俗資料館蔵)

(単位はcm)

遺物番号	種別	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	材質	色調	備考
7	管玉	3.05	0.8	0.2	碧玉	緑色	
8	管玉	3.1	0.7	0.2	碧玉	緑色	石の縞が見える
9	管玉	2.65	0.5	0.25	碧玉	緑色	
10	管玉	2.85	0.6	0.2	碧玉	緑色	
11	管玉	2.55	0.75	0.25	碧玉	緑色	
12	管玉	2.8	0.65	0.25	碧玉	緑色	
13	管玉	2.4	0.75	0.2	碧玉	緑色	
14	管玉	2.55	0.75	0.3	碧玉	緑色	ミガキ少ない
15	管玉	2.4	0.65	0.25	碧玉	緑色	丁寧なミガキ
16	管玉	2.4	0.7	0.2	碧玉	緑色	石の縞あり
17	管玉	2.15	0.65	0.3	碧玉	緑色	丁寧なミガキ
18	管玉	2.2	0.7	0.25	碧玉	緑色	丁寧なミガキ
19	管玉	2.2	0.6	0.25	碧玉	緑色	緑青付着
20	管玉	2.1	0.75	0.2	碧玉	緑色	
21	管玉	2.05	0.6	0.18	碧玉	深緑色	
22	管玉	1.8	0.7	0.25	碧玉	緑色	ミガキ少ない。石の凹見える
23	管玉	2.05	0.7	0.25	碧玉	緑色	
24	管玉	1.8	0.55	0.18	碧玉	緑色	
25	管玉	1.8	0.7	0.2	碧玉	緑色	緑青付着
26	管玉	1.8	0.65	0.2	碧玉	緑青色	
27	管玉	1.65	0.75	0.2	碧玉	緑色	
28	管玉	1.7	0.65	0.2	碧玉	緑色	丁寧なミガキ
29	管玉	5.85	1.1	0.5	碧玉	やや深い緑	29~31同じ色
30	管玉	5.55	1.1	0.35	碧玉	やや深い緑	29~31同じ色
31	管玉	5.15	1.05	0.6	碧玉	やや深い緑	29~31同じ色
32	管玉	4.85	0.95	0.3	碧玉	緑色	唯一の色
33	管玉	4.35	1.1	0.25	碧玉	緑色	33~36同じ色
34	管玉	4.0	0.9	0.2	碧玉	緑色	33~36同じ色
35	管玉	4.5	1.1	0.3	碧玉	緑色	33~36同じ色
36	管玉	3.7	0.9	0.35	碧玉	緑色	33~36同じ色
37	管玉	3.65	0.85	0.4	碧玉	深緑色	
38	管玉	3.5	1.0	0.3	碧玉	緑色	35~38より緑が強い
39	管玉	3.45	0.95	0.3	碧玉	やや深い緑	
40	管玉	3.15	0.9	0.25	碧玉	深緑色	
41	管玉	2.9	1.1	0.4	碧玉	緑色	丁寧なミガキ
42	管玉	2.85	0.95	0.2	碧玉	緑色	丁寧なミガキ
43	管玉	2.75	0.75	0.2	碧玉	緑色	

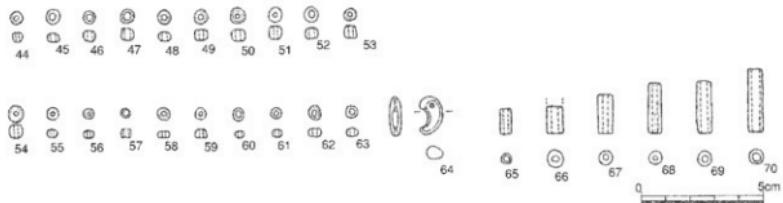
表2 管玉観察表(瀬戸内海歴史民俗資料館蔵)

つまり、両石棺の記述が逆である。正しい出土内容は以下のとおりになる。

- 1号石棺(大きい石棺)=穴を穿って盗掘
出土物 棺内なし(盗掘口に錆跡の痕、鏡か?)
付近から管玉・ガラス玉各12個
- 2号石棺(小さい石棺)=蓋を開けて盗掘
出土物 棺内から頭蓋骨の破片、歯7本、管玉
11個、ガラス玉93個
次に、赤山古墳山上と伝わる鏡が2面伝わるが、

その内大阪に伝わる方格規矩鏡は津田町西南雨滝山山中の石棺内で出土したものが昭和10年に香川県の好事家から大阪の村上民二郎氏の手に渡ったものである。梅原木治氏はこれを赤山古墳出土の鏡と判断したが、赤山古墳は津田町西南雨滝山山中には位置しない。この付近には現在、奥古墳群が確認されており、この鏡は奥古墳群において出土した可能性もある。従って、赤山古墳出土の鏡とするには注意を要する。

赤山古墳出土とするもう1面は瀬戸内海歴史民俗



第16図 伝赤山古墳出土ガラス玉・勾玉・管玉（さぬき市郷土館蔵）（1／2）

遺物番号	種別	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	材質	色調	備考
44	ガラス玉	0.4	0.5	0.15	ガラス	青緑色	
45	ガラス玉	0.3	0.6	0.2	ガラス	青緑色	
46	ガラス玉	0.45	0.5	0.25	ガラス	青緑色	
47	ガラス玉	0.5	0.6	0.3	ガラス	青緑色	付着物顯著
48	ガラス玉	0.35	0.5	0.2	ガラス	青緑色	
49	ガラス玉	0.45	0.6	0.2	ガラス	青緑色	付着物顯著
50	ガラス玉	0.45	0.6	0.2	ガラス	青緑色	
51	ガラス玉	0.55	0.5	0.15	ガラス	青緑色	側面に2箇所窪みあり
52	ガラス玉	0.45	0.6	0.2	ガラス	青緑色	
53	ガラス玉	0.6	0.5	0.2	ガラス	青緑色	側面偏平、各所に面取
54	ガラス玉	0.6	0.6	0.2	ガラス	青緑色	
55	ガラス玉	0.35	0.5	0.15	ガラス	青緑色	
56	ガラス玉	0.3	0.45	0.15	ガラス	青緑色	
57	ガラス玉	0.4	0.4	0.25	ガラス	青緑色	
58	ガラス玉	0.3	0.5	0.2	ガラス	青緑色	
59	ガラス玉	0.35	0.45	0.15	ガラス	青緑色	下平坦
60	ガラス玉	0.3	0.45	0.2	ガラス	青緑色	
61	ガラス玉	0.3	0.45	0.2	ガラス	青緑色	
62	ガラス玉	0.35	0.5	0.15	ガラス	青緑色	
63	ガラス玉	0.35	0.5	0.2	ガラス	青緑色	
64	勾玉	1.6	0.7	0.15	メノウ	赤色	
65	管玉	1.05	0.45	0.3	碧玉	濃緑色	丁寧なミガキ
66	管玉	1.15以上	0.7	0.3	碧玉	暗緑色	割れている
67	管玉	1.6	0.6	0.2	碧玉	暗緑色	
68	管玉	2.05	0.5	0.2	碧玉	淡緑色	ミガキあまい・横方向の工具痕
69	管玉	2.15	0.6	0.25	碧玉	淡緑色	
70	管玉	2.6	0.6	0.3	碧玉	青緑色	

表3 ガラス玉・勾玉・管玉 観察表（さぬき市郷土館蔵）

資料館に所蔵されている。この鏡に関する出土の経緯は十分に把握しておらず今後の課題である。

次に現在確認できる赤山古墳出土と伝わる遺物を確認しよう。遺物は瀬戸内海歴史民俗資料館とさぬき市郷土館にある。瀬戸内海歴史民俗資料館で盤龍鏡1、石劍5、管玉37が、さぬき市郷土館で勾玉1、管玉6、ガラス玉20があるが、昭和61年の『再訂津田町史』には瀬戸内歴史民俗資料館で盤龍鏡1、石劍5、管玉37、津田町郷土館で勾玉3、管玉7、ガラス玉20とあり、若干数が異なる。なお、これらの

遺物の出土した経緯と出土場所は不明である。

今回、瀬戸内海歴史民俗資料館とさぬき市郷土館の伝赤山山上遺物を図面化した。

第12~15図が瀬戸内海歴史民俗資料館の資料である。

盤龍鏡（第12・13図）

径17.2cm、厚さ3mmの仿製鏡である。5.5mmの反りが見られる。縁は斜線で最大厚7mmを測る。

外縁は内部に向って鋸歯文・複波文・鋸歯文・柳歯

赤山古墳

文である。銘帯は擬銘が刻されている。内区は図像が描かれている。獸面化した神像4体と龍2体を左右対称に配置している。紐孔は幅約1cm、高さ7mmの方形を呈し、紐厚1.5cmを測る。鏡面には全体的に緑青が見られる。

石劍（第14図）

碧玉製である。5個全て形態が異なるが、分類すると2・3と4と5・6に区分される。2・3・4は上半分のみに刻細線が見られ、5・6は上下ともに刻細線が見られる。4は下半分だが、形状が梢円形を呈する。梢円形の石劍は全国的にも珍しい。

色調は2・3・4が淡緑色に対して5・6は濃緑色で光沢をもつ。これで色差は成形や仕上げの丁寧さの違いである。特に3はミガキが不十分で石の綱状の層が見られる。刻細線は2・3・4で断面が曲線に対して5・6は底部がやや角張り、箱型に近い。形態は、どの個体も内面が内傾するが、2・3が反りながら立ち上がるのに対して4・5・6は直線的である。厚さは前者か8mmに対して後者が5~7mmで高さも前者がやや高い。

わずか5点のみの比較ではあるがそれぞれ形態が異なり、その中で3分類の区分が可能である。概して2・3は5・6に比して製作の簡略化が指摘できる。4は属性的に2・3と5・6の中間的な位置づけができるが、形態が梢円形である点で独自の形態を展開する。なお、5点すべて赤色顔料の付着が見られる。

菅玉（第15図）

碧玉製である。37点所蔵されている。長さは1.6~5.8cm、厚さは0.6~1.1cmの中でバラエティー豊かであり、同じ大きさは少ない。また、大型品ほど丁寧な仕上げ整形がなされている。概して長さ3cm以上の製品に丁寧な例が多く、長さ2cm以内は光沢がほとんどなく、石の綱状の層が見られる資料（8・16・22）もある。また、3cm以上の光沢をもつ事例においても発色は濃緑色、暗緑色、淡青緑色など様々である。

第16図はさぬき市郷土館の資料である。

ガラス玉（第16図44~63）

青緑色を呈する。20個ある。法量は高さ3~5mm、幅4~6mmを測る。孔径は径2mm以内である。上ド端の不安定な事例もあるが比較的上下は平坦となり丁寧な製作である。

勾玉（第16図64）

メノウ製で赤色を呈する。1点ある。縦1.5cm、厚さ5mmである。孔は小さく径1mm未満である。

管玉（第16図65~70）

碧玉製である。6点ある。法量、色調ともに様々である。68はミガキがあまく、調査痕の細線が見られる。

第4章 墳丘測量調査の成果

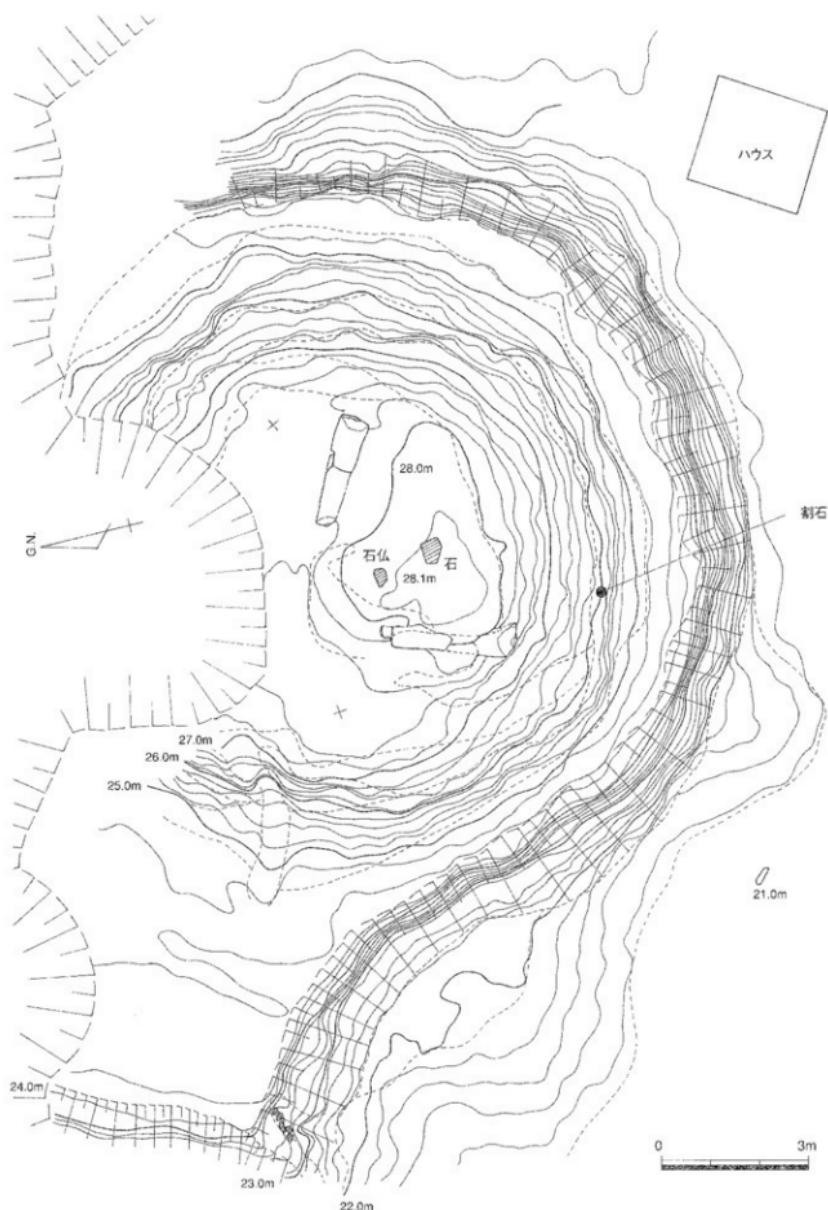
現在墳丘は後円部の一部を残して破壊されているが（墳丘削平の経緯は第6章第1節参照）、外表施設、周辺に残された墳丘、上中に墳丘の一部が残存しているか否かの検討を目的に測量調査を実施した。調査は墳丘残存部と宅地を含む周辺を範囲として、東西、南北約42mの1764m²を20cmセンター、縮尺1/50で行なった。

測量調査中、墳丘西側崖面の西端付近で葺石、円筒埴輪片を断面で確認した。また、現在宅地のかつて前方部が伸びていた付近では段差の法面から円筒埴輪片や葺石の可能性のある石材が確認された。そこで、この二ヶ所の精査、検討を実施した。

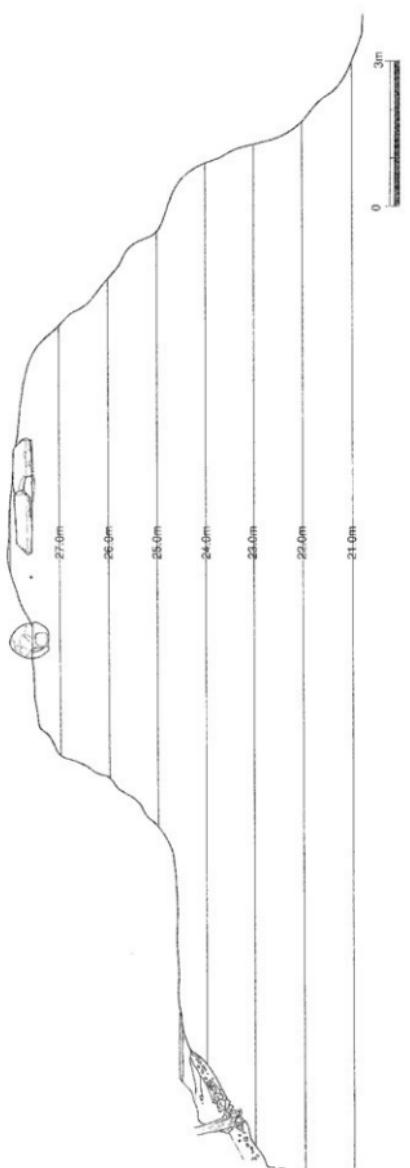
第1節 墳丘の現状

現在、墳丘は開発のため宅地の中にかろうじて残され、宅地との境は高さ約2mの岸になっている。崖は現状墳丘の裾から垂直に切られてはおらず、現状墳丘の裾との間に若干のテラスがみられる。開発以前の墳丘写真を見ると現状墳丘の周囲は畠で、開発は墳丘が崩落しないように若干の余裕をもって行われたようである。東・南面は現状墳丘の裾から約1m幅で旧畠を残し現状墳丘の裾に沿って円形状に削られている。西面は比較的旧畠が残存し、現状墳丘の裾から東西5~6m、南北4~6mの方形状の平坦地をなす。現在も畠の痕跡が地表面で観察できる。北面は墳頂部まで崩落が及んでいる。総じて北面を除いて現状墳丘は1960年代の開発以前の規模を留めているといえる。現状墳丘は東西約14m、南北約12m、高さ約3mの円墳状を呈する。

墳丘の傾斜は西側が東側に比べて急である。また、現状墳丘の裾から上位1m間は墳丘の削平のため企てで傾斜が急である。墳丘斜面から埴輪片は採集できなかったが、西斜面には拳大の礫が複数確認でき、転落した葺石材の可能性がある。現状墳丘南側の裾



第17図 填丘測量図 (1/100)



第18図 墳丘東西エレベーション図 (1/100)

部、標高26m付近には安山岩の割石が4石見られ、埋葬施設に使用された石材の可能性がある。一方、北面の標高26~27m付近には白色凝灰岩片が2ヶ所確認でき石棺片と考えられる。遺物はこの他に近世以降の磁器、瓦片を埴丘斜面で確認している。

埴頂部は現状で東西約7.5m、南北約6.5mの円形を呈するが、1号石棺が南側埴丘傾斜面につき出た状態にあり、本米はさらに広かったと考えられる。最高地点は標高約28.1mを測る。また、2基の石棺は露出しており、本米の埴丘高が現状より高かったことは明白である。

2基の石棺の間には江戸時代の石棺発見の後に置かれたと伝わる石仏があるが、同じ頃に火山から遷したという「羽大明神」の瓦質の祠は現存しない。現在石仏の南に安山岩の塊石が1石見られる。

埴頂部には5~6cmの小礫が散在する。

現状埴丘の外側は宅地による平坦地が広がり、かつて前方部のあった南側も完全に平坦地になっている。一方、東側では若干の高まりを確認した。この地点で北面は北方向に降る傾斜面が東西に直線的に見られるが、フェンスに並行しており後述の改変である。開発直後の写真を見る限り、埴丘東側は完全な平地に削平されており現状の高まりは近年の所産といえる。なお、東面の傾斜は南北に続く尾根傾斜面である。

宅地の標高は約21mで埴頂部との比高差は約7mである。

第2節 旧埴丘傾斜面

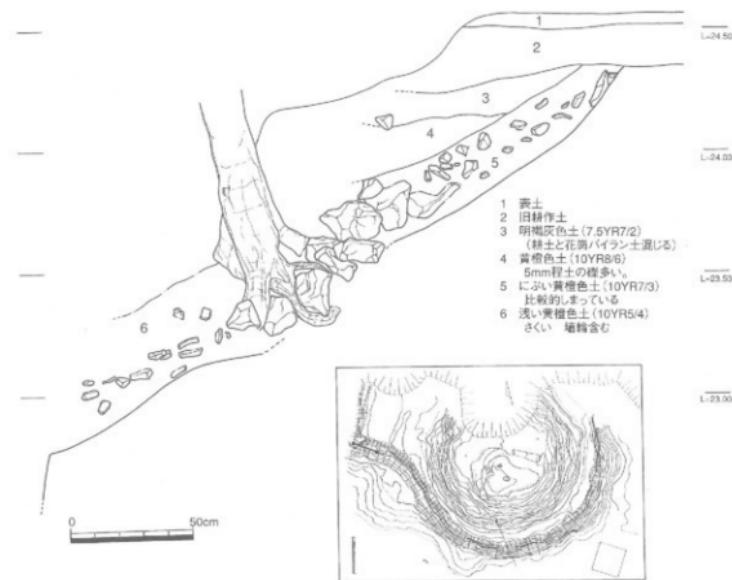
現状埴丘の西側は東西5~6m、南北4~6mの方形形状の平坦地として現状埴丘とともに宅地の中に見られるが、その南側崖面の西端は古墳への上がり口として傾斜面に足場が作られている。今回、この付近の崖面に露出した石材を7点確認した。石材は一列になって斜めに露出している。この石材を含む周囲を東西約2.6m、高さ3mで精査し、石材は葺石であることを確認した。崖面で見られる葺石は原位置を保っている可能性が強い。

断面観察によると上端から5cm下で耕土が約20cmの厚さで堆積している。旧埴丘傾斜面はこの耕上の下層から見られる。ベースは岩盤か花崗岩バイラン土である。

標高24.35~23.8m間は35°で傾斜する。傾斜は上位ほど急になり、上位にテラスのあった可能性がある。ベース上には10cm未満の小礫を含むにぶい黄橙色土が堆積しているが、この小礫はテラスに敷か



第19図 墓丘周辺図 (1/300)



第20図 旧墳丘傾斜面立面図（1/20）及び出土遺物（1/4）



第21図 宅地法面の断面図（1/40）

れたバラスの可能性がある。なお、小礫を含む堆積土の上には花崗バイラン十や岩盤塊の混ざった土が耕土直下で水平気味に堆積しているが、これらは埴丘周囲を畑にするため、埴丘を削りとて整地したものと推察される。

標高23.8mから下位は人頭大の石材が7~9石見られる。石材は安山岩である。葺石は35°の傾斜で上位の埴丘傾斜よりも急である。石積は6段が想定され、一部露出している石材から崖面から奥にも続いていることがわかる。埴頂部の2基の石棺の中間付近を円の中心として埴丘を復原すると葺石はこの方形状の平坦地内を巡る。今後、この場所を調査することによってさらに精度の高い埴丘規模や葺石の様子を明らかにできるだろう。最下段の葺石から外側は標高約23.1mで幅25~30cmのテラスになっている。テラスの外側は再び35°で傾斜がきつくなり、60cm程傾斜した後、崖となり、直下には県道津田・川島線が走っている。テラスの上位は浅黄橙色上が堆積し、割石、小礫とともに円筒埴輪片4点が出土している。

円筒埴輪片はぶい黄橙色を呈し、石英を多く含む。71は底部片である。外面に12条/cmの縦ハケ、内面に右上へのケズリ調整を施す。ケズリ幅は約1.5cmである。底面は丁寧なナデによって面をもつ。また、ナデ或は加重のため内外面は若干外側に広がっている。底径は約35cmに復原された。72は胴部片である。外面に赤色顔料が付着している。調整は外面が12条/cmの縦ハケ、内面に右上へのケズリが見られる。器壁は約1cmである。図化していない2点も胴部片である。調整方法は不明である。

このように葺石裾はテラスが見られること、円筒埴輪が確認できること等からこの地点が本來の埴丘裾部になる可能性を指摘しておきたい。

第3節 宅地法面の精査

現状埴丘の南側は宅地になっている。古墳のすぐ南側は建物が建っているが、さらに一筆南は建物を取り壊され草木が繁茂している。この区画の北端のブロック塀までかつて前方部が伸びていたと考えられる。この区画の東側は一段低い平坦地となり、北側の宅地とはスロープ状に通路を構え、西側は段差のまま南北方向に続く法面が見られる。今回この法面で円筒埴輪片（標高約20.6m）と葺石の可能性ある礫（標高21~21.2m）が数点確認できた。そこでこの法面を精査して出土地点の層位を確認した。上層は法面の北端から長さ約6m間を調査した。

精査の結果、葺石は廻葉土中にあり原位置は留めていなかった。一方、円筒埴輪片は2層（明黄褐色土）中にあるが、北側でその下層に3層（旧耕作土）が堆積しており、この層中に近世以降の上器片が混入していた。つまり、円筒埴輪片を含む層は古墳時代当時の堆積層ではなく、近年の堆積といえる。前方部削平時或は周辺の開墾時に混入した可能性が強い。

埴輪片を包含する堆積層とその下位の近世以降の層の下位は花崗バイラン上の地山か見られる。ラインはやや凹凸が見られるが、北端から4m南までは標高20.4~20.6m、北端から4m南から南端までは標高約20.8mを測る。埴頂部からの比高差7.3mを測る。

第5章 剥抜式石棺の観察

第1節 石棺の位置

埴頂部には2基の剥抜式石棺が露出している。2基はL字状に位置しており、南北方向の石棺を1号棺、東西方向の石棺を2号棺と呼称する。両者は厳密にはL字状ではなく（角度81°）、正確に主軸を直交して配置はしていない。方角は石棺長軸において1号石棺がN-27°-E、2号石棺がN-124°-Eで厳密な東西、南北方向ではない。航空写真や周辺地形の検討からは埴丘主軸に対して直交、平行関係にあると思われる。

互いの距離は2号棺西小口縄掛突起痕から西へ約2.1m、南へ約0.4mに1号棺北小口縄掛突起が位置する。両石棺の最高地点の標高は1号棺が約28.03m、2号棺が約27.96mではほぼ同レベルといえる。

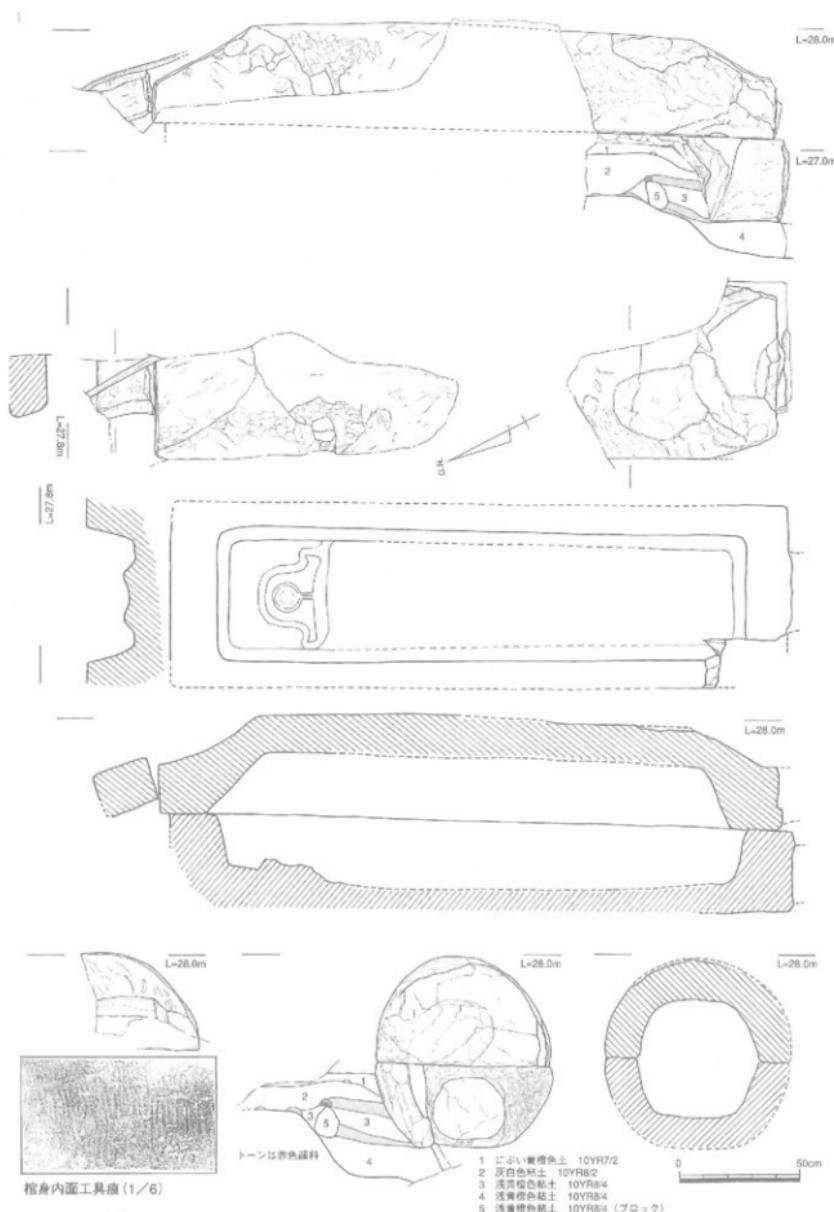
江戸時代末期の記録ではこの2つの石棺の間に堅穴式石室に安置された3基目の石棺があると伝える。また、昭和3年の報告では石室推定地を略図にて示している。現在、この地点は2基の石棺の最高点より約10cm高い高まりになっているが、埋葬施設の存在を示す痕跡は認められない。

次に石棺の現状を個別に記述する。

第2節 1号石棺

(1) 現状

南側小口の一部と北西側面から北側小口の一部にかけて石棺は露出していた。また、南側小口付近は埴丘から石棺が突き出た状態にあるが、この付近は埴丘が改変によって急傾斜となり、盛土の可能性の



第22図 1号石棺平面・立面・断面図 (1/20)

ある上が露出していた。今回、石棺の形態的特徴を把握し得る範囲において腐蝕土を除去し表面監察を行なった。

棺身と棺蓋は合わさっているが若干ずれており、南北長軸で棺蓋が棺身より約4cm北である。津田町史(1959年刊行)には1号棺は蓋を開けて盗掘されたと記述されているが、第2章で指摘したとおり、記述は2号棺と対反になっている可能性が強く、1号棺は盗掘孔から盗掘されたことになる。現状の観察においても棺蓋北西隅に接した埴丘部分には赤色顔料の混ざった灰白色粘土が見られることから棺蓋の開けられた形跡は認められない。石棺が開けられていないとすれば、石棺の埋納状況が今後確認できる可能性がある。

棺蓋下端、棺身上端の半坦面は北側が南側に比べて約7cm高く棺はわずかながら傾斜している。

(2) 石棺の設置状況

南側小口周辺の精査によって墓壙を確認した。墓壙は岩盤を掘り込んでおり、棺身西端から35~40cm外側で立ち上がりが見られる。この立ち上がり付近から外側は水平となる。この地点で標高約27.35mを測る。現状の立ち上がり上端で石棺中軸から墓壙幅は約140cmが想定される。深さは現状で約30cmを測り棺身高に等しい。ただし、棺身は墓壙底から厚さ15cm粘土を敷いた上に置いているため、墓壙上端よりも棺身は上となる。墓壙底は立ち上がり付近から墓壙中心に向って約20cm半坦となりそこから中心に向って再び傾斜して下る。今回の観察では墓壙の最底部までは確認できなかった。

棺の設置方法は、まず墓壙に最深部付近で厚さ15cm程度の浅黄褐色粘土を敷く。粘土上面はほぼ水平であるが、墓壙端に向って若干高くなる。こうして設置した粘土上に、次に赤色顔料を墓壙内全体に散布する。赤色顔料は棺身付近で約1cmと薄く、墓壙端付近で約5cmと厚く堆積している。赤色顔料を散布した後石棺を設置する。石棺縦断面からは頭側が足側より7cm高く、横断面からは西側が東側より約2cm高くなっている。高低差は小さいことから、頭位側を意識して高く設置したかどうかは不明である。石棺を設置した後、棺身と墓壙の隙間を埋めるように5~10cmの厚さで再び浅黄褐色粘土を入れる。粘土上面はほぼ墓壙上面に等しく、現状で確認した墓壙上端が削平を受けていないとすれば、この段階で墓壙は完全に埋まった状態になる。なお、この粘土中からは鉄剣などの副葬品が出土することもあり、

赤山古墳も副葬品が残されている可能性は十分にある。また、観察した断面では墓壙の肩部付近に約10cm幅のブロック状の粘土を確認したが、この粘土の意味は不明である。こうした粘土が他所でも普遍的に認められるどうか課題である。

粘土を敷いた後、再び赤色顔料を散布する。厚さは約5cmで下層の赤色顔料の散布状況とほぼ一致する。層状に赤色顔料が確認できるのは墓壙内だけであるが、墓壙外も部分的に赤色顔料が認められる。これが周囲に飛散したものか、さらに外側に墓壙の立ち上がりのある二段墓壙になるのかは今後の課題である。赤色顔料の上位は灰白色粘土が約10cm堆積している。下位の粘土に比べて柔らかく埋葬時の堆積か判断は困難である。この層からさらに上層は腐蝕土が堆積している。周辺には割石等の石材は確認できず、現在のところ堅穴式石室の可能性は低い。

(3) 石棺の法量

石棺の長軸はN-27°-Eで北側に石枕がある。表面精査により棺蓋の両小口の様子が明らかとなつた。棺身は、南側小口は露出しているが、北側は上中にあり詳細は不明である。棺蓋の法量は繩掛突起を除いて長さ約254cmである。北側で確認した繩掛突起の長さが約23cmであり現状長277cmである。仮に欠損している南側の繩掛突起の長さも北側と同じとするならば全長は約300cmに復元できる。棺身は両小口とも繩掛突起の長さは不明で、繩掛突起を除いた長さは約254cmで棺蓋と同じである。幅は南側小口部付近で棺身、棺蓋とともに約75cmを測る。

(4) 棺蓋の形態

棺蓋上面は長軸辺の中間から両小口部にかけて弓なりにゆるく下っており、両小口上端と長軸辺の中間とは約4cmの比高差がある。棺蓋高は長軸中間地点で約43cmである。

小口は下端から約25cm(繩掛突起付近では約30cm)垂直に立ち上がり、そこから上位は上端に向かって30°の傾斜でほぼ直線的に斜めに切っている。小口端から斜めに切った上端までの水平距離は両小口ともに約40cmである。

繩掛突起は北側が隅丸形、南側が楕円形で形状が異なる。北側は棺蓋本体から切り離され、若干ずれた状態で確認した。北側小口の西端部から小口中央の約25cm間は垂直面の高さは中心に向って高くなり、以東で繩掛突起の切断痕がある。繩掛突起は現状で長さ約23cm、幅24cm以上、高さ約16cmで、側面

赤山古墳

は上端から下端にかけて広がり、断面は台形状をなす。繩掛突起の上端はほぼ平坦で上端部は小口部の斜めに切っている面に一部かかっている。

南側小口は繩掛突起を欠損しているが、剥離痕から形態が推察できる。繩掛突起は小口幅の中心付近に位置し、小口下端付近から梢円形状に削り出している。西侧がやや不鮮明ながら高さ約25cm、幅約30cmの梢円形である。小口部東端から約20cm西が繩掛け突起の東端となり、上端は小口から棺蓋上端に斜めに切っている部分に大きくかかっている。

棺蓋外側の側面は下端から若干外側に膨らみながら立ち上がりそのまま曲線をもって上端に向っている。上端には北側で若干稜線が見えるが明瞭な平坦は確認できず、断面は半円を呈する。内面は盗掘孔からの観察のため詳細な情報は得られないが、長さ約214cm、幅約50cm、深さ約25cmに削り抜かれている。平面形は隅丸方形で、断面は上端がやや平坦気味ではあるが、明確な稜線ではなく曲線的な掘り込みである。上端の棺蓋厚は約15cmを測る。棺蓋下端の平坦面は長軸辺で幅約12cm、小口辺で幅18cmを測る。

(5) 棺身の形態

棺身はほとんどが上中のため北側小口の様子など不明な点も多いが、比較的露出した南側小口を中心として検討していく。

棺身長は繩掛け突起を除き約254cmを測る。幅は南側小口部付近で約72cmである。上端には長さ約217cm、深さ約27cmの隅丸方形の削り込みが見られる。幅は南側小口部で約52cm、石枕の南付近で約55cmを測る。

短軸部の上端面は幅約19cm、長軸部の上端面は幅約11cmを測る。

削り込み部の北側短軸辺から南に約10cmに石枕が長さ約30cm、幅約45cmで見られる。頭部を安置する箇所を径約12cm、深さ約3cmの円形に削り抜き、その周囲に幅約3.5cmの台形状の帯を配している。この帯はそのまま肩の位置する箇所で左右に広がり棺身側面に至り、北端側にはねあげている。全体的に帯は左右非対称で西側側面の方が細長く成形されている。頭部安置箇所から肩部にかけては長さ約4cm、幅約3cmの溝が伸びている。石枕から北と南の削り込み底面は約5cmの段差になっている。

棺身削り込みの底面は棺中央部が最も低く両端に向ってやや高くなる。

南側小口は棺身上端から垂直に面をなす。中央部に縦約2.5cm、横約3cmの梢円形の繩掛け突起の剥離

跡が見られる。下辺は水平気味で隅丸方形に近い形態である。繩掛け突起の周囲はあばた状の細かな凹凸が多く見られ、石棺製作時の工具痕と考えられる。

南側小口から見た棺身の形態は、上端から底部にかけてやや膨らみをもって曲線的に傾斜する。そして、底部付近は平底気味になる。南側小口の上端幅約72cm、高さ約33cmを測り、底部は約30cm幅が平底気味である。

(6) 工具痕

石棺製作時の工具痕は前述したように棺身の南側小口部で細かな凹凸の痕跡が無数に見られる。また、棺蓋の南東隅付近の東側面にショーナ痕の可能性がある細線が認められる。さらに棺身削り抜き部の側面には斜め方向の無数の細線が同方向に認められる。これもショーナ痕の可能性が強い（第22図）。

(7) 石材

使用された石材は古墳から西に聳える火山の凝灰岩である。火山の凝灰岩は白色の火山灰に1cm未満の黒色ガラス、安山岩の挟雜物が入るのが特徴である。凝灰岩の露頭に行くと局所的に挟雜物の大きさ、量において層状になっている箇所が見られる。多くは斜め方向に傾斜した層が多いが、1号石棺の棺身では縱方向に複数の層が確認できる。右壁から直接採石したのであれば石壁に対してどのように採石したか明らかにできるが、石棺製作には転石を使用した可能性も強いので検討は難しい。ただ、層に沿って石は割れやすく、耐久性を高めるには層が横になるのが良く、また、製作も容易であると推測される。しかし、1号石棺の棺身からはそのような意識は特に見られない。なお、棺蓋には挟雜物の層は認められない。

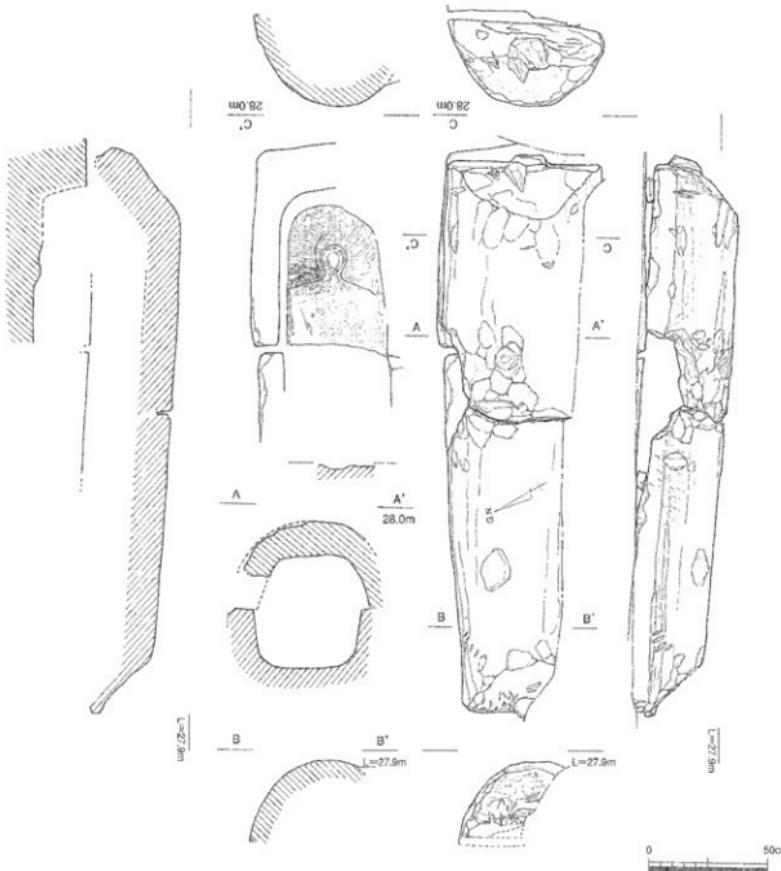
(8) 赤色顔料

棺身削り抜き内部に赤色顔料が認められる。また、棺蓋外側の東側面に若干赤色顔料の付着が確認できる。

第3節 2号石棺

(1) 現状

1号石棺に比べて露出部分が多く、棺蓋は南側側面と西側小口の一部以外はおおよその形態は確認できる。棺身はほとんどが上中で外観の詳細は不明である。北側面の石枕から少し西側は幅約60cm、高さ約15cmの盗掘孔が穿たれており、その時の工具痕が



第23図 2号石棺 平面・立面・断面図 (1/20)

顯著に認められる。また、現状埴丘の北側斜面でこの右棺材と思われる石材が数点転落している。棺身と棺蓋は棺蓋が約7cm西にずれている。棺蓋は盗掘孔付近で横に割れ、そこからやや東側で棺身も横に割れが見られる。2号棺は石棺の埋設状況が確認できず、一度蓋が開けられたか検討できないが、過去の記録からは開けられたことが指摘されている。

(2) 右棺の法量

棺蓋は繩掛穴を除いた長さ226cmを測る。欠損した繩掛突起の一部を含む現存長は約231cmであ

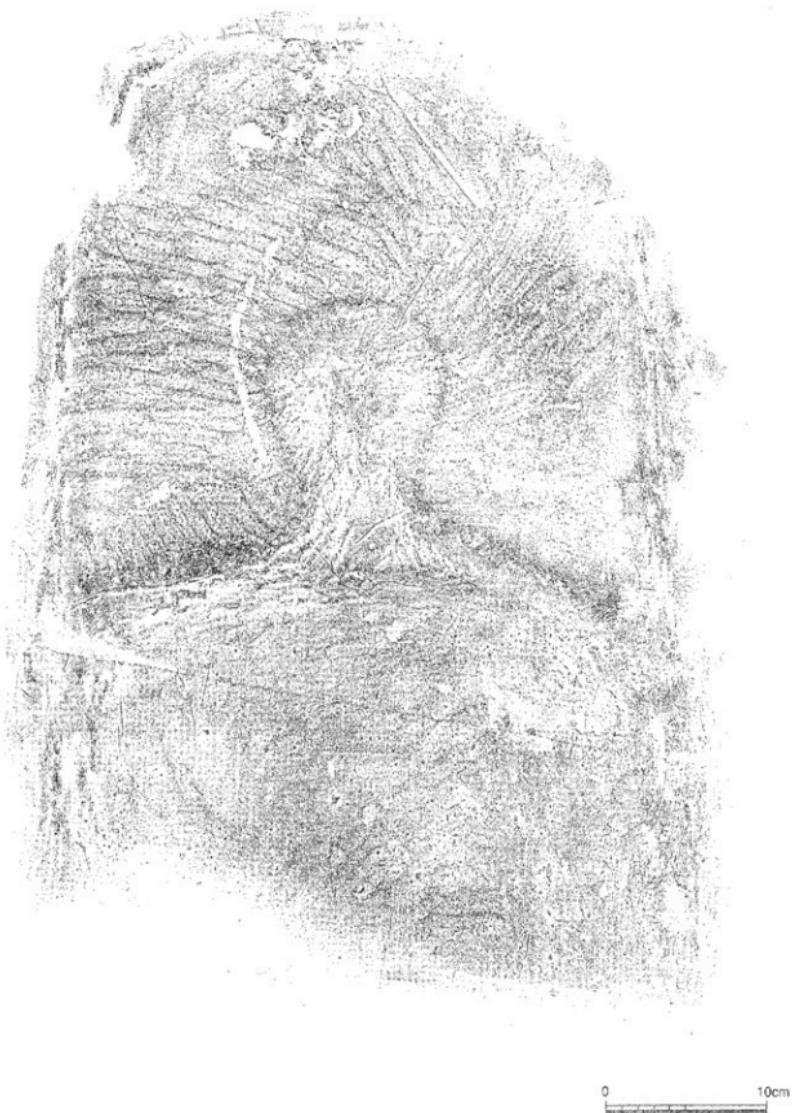
る。棺蓋幅は東側小口部のみ観察でき、約64cmを測る。高さは東端で最大となり約37cm、西端で最小となり約30cmを測り、東から西へ傾斜している。棺身は土中のため形態は不明である。

(3) 棺蓋の形態

平面形は東端の頭部側から西端の足部側に向かって狭くなり、高さは東端の頭部側から西端の足部側にかけて低くなっている（比高差約7cm）。小口部は端部から高さ約1cmは垂直に立ち上がり、そこから上位は上端に向って45°の角度で斜めに切ってい



第24図 1号石棺石枕（上）・棺身南側小口（下）拓影図（1／3）



第25図 2号石棺石枕拓影図 (1/3)

赤山古墳

る。小口端から斜めに切った上端までの水平距離は20~22cmである。

繩掛突起は向小口共に欠損しているが、剥離面の観察から西側小口部が径約16cmの凸形を呈する。西側小口部の繩掛突起の位置は小口部ほぼ中央で、上部は一部小口の斜めに切っている箇所にまで及んでいる。

西側小口部は下部が上中のため全体の把握は困難であるが、中央付近に径1cm程度の円形の繩掛け突起の剥離痕が確認できる。東側と同様に上部は一部斜めに切っている箇所にまで及んでいる。

棺蓋外面の側面は下端から若干内側に傾斜して直線的に約10cm立ち上がる。そこから上位は曲線的に上端に至っており、側面下半には明瞭な面が見られる。上端は曲線的で平坦面は見られない。

内面の割り込みは4隅が隅丸で稜線が認められない。断面も台形気味ではあるが角がそれ丸く削り込まれている。

(4) 棺身の形態

大部分が土中のため形態の把握はできない。内側割り込み部の東端から23cm軒に石枕が見られる。

石枕は人間の頭から肩のラインに似せて割り込み部を彫りこんでいる。頭部安置地点は最大幅約11cm、長さ13cmで1号棺のような円形にはならない。肩部への接続は南側が北側に比べて直線的で左右対称ではない。一方、頭部安置地点の周囲は1号石棺で見られたような台形の帶は認められない。一部北側に曲線上の掘り込み線が頭部の掘り込みを示しているが、全周はせず工具痕か傷の可能性が強い。肩部はなで肩に掘り込み、ここを境に東と西は段差になり約3cm西側が低くなっている。頭部安置箇所の周囲は幅1cmの工具痕が頭部安置箇所を取巻くように密に施されている。頭部安置箇所の底面は円形に埋めているが、そこにも細線の工具痕が見られる。また、肩部から下も幅約1cmの工具痕が確認できる。

棺身内面の割り抜きは1号石棺と同じ隅丸方形であるが、2号石棺の方が東側小口の短辺ラインが曲線的である。なお、各隅の下半には直線的な稜線が確認できる。

(5) 石材

1号石棺と同様の火山産の凝灰岩である。棺蓋、棺身ともに表面監査すると黒色ガラス、安山岩の挟雜物が大きさ、量によって層となっている。1号石棺の棺身では同様の層が縦方向見られたが、2号石

棺の場合は縮薬、棺身ともに横方向に確認できる。棺蓋外面は横方向に稜線をもつ凹凸が側面に確認できるが、この稜線は石材の層に一致する。石棺の耐久性を考えた場合、石材の層は横方向が良く、一見2号石棺の方が合理的な作りである。ただ、棺蓋下端を見ると下端面は石の層と必ずしも平行でないことから、やはり成形に際して石の層の意識は殆んどしていなかったと推測される。

(6) 赤色顔料

赤色顔料は棺身内面割り込み部内部の全面に認められる。

第6章 まとめ

第1節 墳丘削平の経過と墳丘の復元

(1) 墳丘削平の経過

赤山古墳は開墾、宅地造成により墳丘は縮小の一途を辿り、かつて全長50mだったという前方後円墳の面影は現在全く伺うことができない。そこで、写真、地籍図や現状の観察から赤山古墳本体の形態を検討する必要がある。この節ではまず、過去の墳丘に関する記録、記載とその変質の経過を記述する。

安政2年(1855)の赤山古墳の発掘が伝えられているが、遺物の発見は古墳の開拓中の出来事であり、江戸時代末には古墳の削平ははじまっていたと考えられる。明治23年(1890)の地籍図(第26図)では現存する墳丘の位置に墓の記載が認められるが、前方部の地割は全く確認できず、前方部の削平は進行していたと考えられる。ただ、古墳西側を通る道は前方後円形に曲がっている。大正11年(1922)の大内里谷の記録では日々開発が進み、墳丘周りは14~15間=25~27m、高さ3間=約5.4mになり、墳頂部も削りとられて平地が出来ているとある。氏は前方後円墳の存在を知りながら赤山古墳を円墳と評しており、それだけ前方部の削平が顕著であったのだろう。大正15年(1926)の『大川郡誌』、昭和3年(1928)の赤山古墳の報告書では前方後円墳と評価し、墳丘の略平面、側面図が記載されている(第27図)。墳丘は現在残る後円部の一部以外は畑地化されているが、上端の畠が前方後円墳形をしており、その畠の全長から30.5間=約55mの前方後円墳としている。この前方後円墳形の畠の上に墳頂部が南北26尺(約7.8m)、東西24尺(約7.2m)、墳丘周り126尺(38m)の土饅頭がある。また、上端の畠か



写真 1 昭和22年航空写真



写真 2 昭和39年航空写真

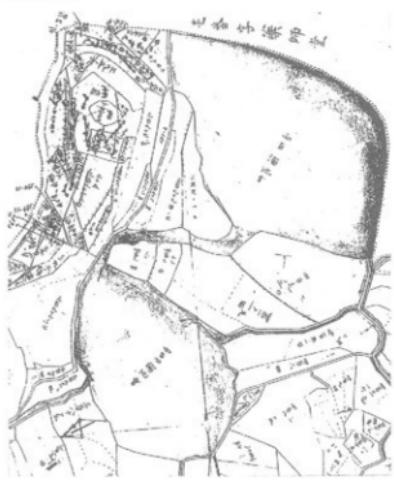


写真 3 昭和42年航空写真



写真 4 昭和45年航空写真

赤山古墳

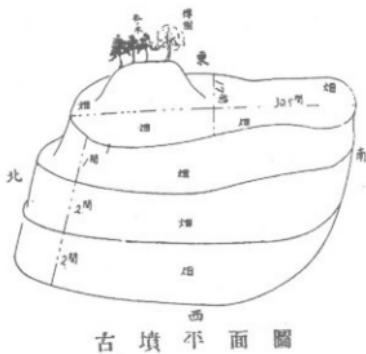


第26図 明治23年地籍図
(赤山古墳は左上の墓と記載のある所)

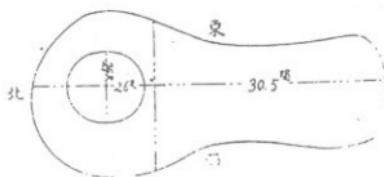


写真5 開発前の赤山古墳 (南から)

古 墳 側 面 圖



古 墳 平 面 圖



第27図
昭和3年赤山古墳
報告書に記載された図面



置位ノ棺石



写真6 開発直後の赤山古墳 (南から)



写真7 開発直後の赤山古墳遠景 (南から)

らドは2段のテラスが前方後円形の畠を蹴っており、基部からの高さ5・6間（約9.1m）を測る。

昭和10年（1935）、梅原末治氏は赤山古墳を査定し、「いまは著しく陵夷しているが、もと南面した前方後円墳と覺しく、僅かに封土の形をとどめている」としている。同年、寺田貞次氏は赤山古墳を前方後円墳と思考するものとして指摘している。

戦後、昭和22年に撮影された航空写真（写真1・以下では22年航空写真と呼称する）には前方部が確認できる。昭和3年の記録では前方後円形の畠の下に段が2段あると指摘されているが、航空写真にも3段の畠が確認できる。前方後円形になっているのは最上段の畠のみで下位は直線的である。西側は昭和3年の略図で前方後円形に描かれているが、22年航空写真では西側は道路で削平され直線的なラインに変化している。

昭和39年の航空写真（写真2・以下では39年航空写真と呼称する）は、22年航空写真で見られた前方部先端を境として南側の上段の畠が削られている。また、前方部は畠となっている様子が伺える。（昭和29年刊行の津田町史には埴丘南面が畠となった赤山古墳の写真が掲載されている）。上段下の2段のテラスは残存している。

昭和42年航空写真（写真3・以下では42年航空写真と呼称する）は県道津田・川島線の拡幅工事の様子が伺える。時を同じくして古墳は後円部の一部を残して完全に削平されている。六車忠一氏によって撮影された削平直後の写真があるが（写真5～7）、上段の畠は内部の埴丘の一部を残して削られ上端から1段下の畠地の高さで平坦地にしている。ただ、後円部東西の延長上は帶状に残こしており、後円部東側の露出した崖の断面に葺石と思われる石材の傾斜が東西両方に確認できる。後円部を南から見た写真では後円部は西にくらべて東側がゆるやかに傾斜している。そして、葺石を確認できる位置は西側よりも東側の方が現状の埴丘標から近く、東側は西側に比べて比較的本來の埴丘傾斜を留めていることが推察される。同様の指摘は南北面でも同様で、北側が南にくらべて傾斜がゆるやかで、南側は大きく削平されている。これは南側の傾斜面に1号石棺が露出して突き出している現状からも伺える。

昭和45年航空写真（写真4・以下では45年航空写真と呼称する）は県道津田・川島線が完成し、古墳周辺が宅地化している。後円部東側に残された畠の上段も削平され、後円部北側も大きく抉られ現状に近い状態である。後円部北側は削平によって崖を呈

していたが、昭和53年に応急対策としてモルタル吹き付けにより土砂の流失防止を行なっている。

現状は、後円部北側も建物が建ち、建物間に後円部の一部が残された状態にある。また、上段畠から2段下のテラスは古墳の東南において一部残存している。

(2) 墓丘の復元

後円部は現状墳丘の西側平坦地の南崖面で葺石の傾斜が確認できた。葺石は標高約23.3mまで見られ、その地点で岩盤は傾斜から一旦平坦となり、幅20～30cmでテラスが続いた西で再び傾斜する。このテラス直上には浅黄橙色十が堆積しており、小礫と円筒埴輪片を含み、この地点が後円部の西側埴丘裾部と推察する。標高は岩盤直上で約23.1mを測る。

墳頂部は南北方向に1号棺、東西方向に2号棺がL字状に配置されている。後円部の中心点は現状からは判断できないが、仮にこの2つの石棺の間とすると、おおよそ石棺付近となる。ここから上述した後円部西側の埴丘裾までの距離は約11.5mを測り、導き出された後円部径は約23mに復元される。中心点の誤差を考慮して22～26mと推察する。これは從来指摘されていた径30mからは少し小さい。

前方部は22年航空写真で確認できる。39年航空写真では前方部先端から南が削平され、42年航空写真は後円部の一部を残して完全に削平されている。45年航空写真にはかつての前方部先端付近に宅地の境界線であるブロック塀が築かれている。このブロック塀は現在も見られ、かつての前方部先端付近を示す。よって、ブロック塀付近を前方部の先端として、前方部長さを復元すると約20mになる。後円部の径によって前方部長は変わるもの、おおよそ後円部に近似した法量が指摘できる。

以上から前方後円墳の全長はおおよそ42～45mと推測する。従来、後円部径30m、前方部径20mの全長50mの前方後円墳と指摘されてきたが、今回の検討において墳丘はやや小さくなつた。ただし、後円部西側の崖面で確認した裾部からさらに一段下に墳丘が周る可能性もあり上述の規模を断定することはできず、現状ではそれを確認することも困難である。

資料的な制約はあるが、前方部の形態は22年航空写真からはくびれ部から先端に向かって広がっており、やや発達した前方部が推測できる。

赤山古墳



第28図 赤山古墳 墓丘復元図 (1/1000)

第2節 剣拔式石棺について

火山産の剣拔式石棺に初めて注目したのは六車恵・氏である。昭和13年(1938)、「讃岐の古式古墳」において、高松市から西の三豊郡までの剣拔式石棺が鷺の山産の角閃安山岩であるのに対して東の大川郡のそれが相地産の凝灰岩製であると指摘している(六車 1968)。県内における2ヶ所の石棺採石地に対して藤田憲司氏は鷺の山産石棺と火山産石棺の形態的な差異を示し、赤山古墳に関して阿蘇の舟形石棺との共通性を指摘している(藤田 1976)。

渡部明夫氏は讃岐における鷺ノ山石剣拔式石棺の変遷として円柱形をした剣拔式石棺から足部の幅が狭まり、棺蓋が高くなって屋根形をなすとともに、棺身の底部が平底化し、側縁部が高く直立するという変化を指摘し、快天山古墳1号・2号石棺から3号石棺へ、そしてその延長に安福寺石棺や三谷石舟古墳石棺への変化を指摘している。一方、火山石剣拔式石棺も鷺の山産と類似した変遷を辿るとし、火山石棺群の最古式を赤山古墳石棺とし、鷺の山産の最古式である快天山古墳石棺との共通性を指摘している。

大野宏和氏はこのような2つの石棺群に対して石棺の搬出先が互いに異なることを指摘している。(大野 2001)。

一方、北山峰生氏、横田明仁香氏は石材による分布の差異をそのまま石棺製作集団の差とする考えに反対し、石棺の再検討を実践している(北山2005・2006)、(横田 2006)。

本節ではこうした石工集団の問題を検討する材料として赤山古墳石棺の形態的な検討を行っていく。

渡部明夫氏は赤山古墳石棺の評価として、1、全体として快天山古墳との類似点が大きいが、棺蓋短辺部の形態が大きな相違点である、2、時期的には足部をわずかに狭く作ること、掘り込みの短辺部が矩形であることから、快天山1・2号石棺よりは後出する、と指摘している。また、3、1号と2号の時期的な関係は1号棺身の掘り込みの横断面が半円形であるのに対して2号石棺が矩形になることから1号⇒2号を指摘している。以上のような指摘を俎上にのせ、2基の赤山古墳石棺の特徴と時期的な関係、鷺ノ山石棺との関係について検討していく。

まず右棺の形態であるが、1号棺は円柱形に近いのに対して、2号棺は足に向って大きくすぼまり、1号⇒2号が指摘できる。この要素と関わる特徴として、棺蓋の最高地は1号棺が石棺中央にあり向小口に向かって傾斜するのに対して2号棺は頭位が高

く、足位にかけて傾斜している。

棺蓋は2号棺の方が相対的に1号棺より高く1号⇒2号が指摘できる。側面は1号棺が曲線的に膨みながら傾斜するのに対して、2号棺では長軸辺に側面が認められ、その部分には丁寧な調整が認められる。これも1号⇒2号への変遷が指摘できよう。このように赤山1号棺から2号棺への形態変遷が指摘でき、それが快天山1・2号から3号墳への変遷とほぼ共通することからは火山石の剣拔式石棺と鷺ノ山の剣拔式石棺の密接な関わりが指摘できる。渡部氏の指摘は正鶴を得ている。

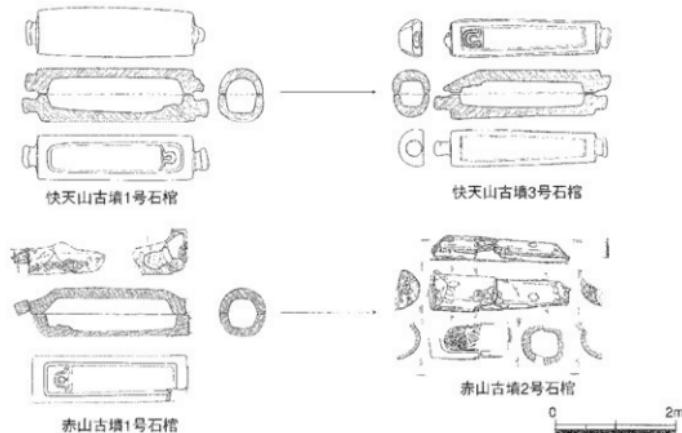
一方、割り込みの状況は上記の変遷とは反対の展開をみる。つまり、1号棺が矩形であるのに対して2号棺は丸みをもっている。快天山古墳の変遷を援用すれば2号棺から1号棺への変遷が指摘され、他の要素と矛盾する。1号棺が快天山古墳1・2号棺よりも新しいと考える唯一の要素がこの矩形の割り込みであり、1号棺よりも新しいと想定される2号棺で快天山古墳1・2号棺にはほぼ共通する割り込みをもつことからは、幾多もの解釈が想定される。剣拔を優先させれば1号棺と2号棺の変遷は逆転することになり、かえって他の要素が快天山古墳石棺の変遷と矛盾することになる。現段階では新しい2号棺の要素に古い属性が採用されていると解釈することが合理的である。2号棺に古い属性が使用されている点からは1号棺と2号棺には大きな時間差がないと考えることができる。それは同時に快天山古墳との時期的な差異もほとんどないと理解することになる。

それを示す資料として赤山古墳1号石棺と快天山古墳1号石棺の類似性がある。快天山古墳1号石棺は現在実見することができず、写真・図面からの比較となり限界はあるが、以下に類似点を見していく。

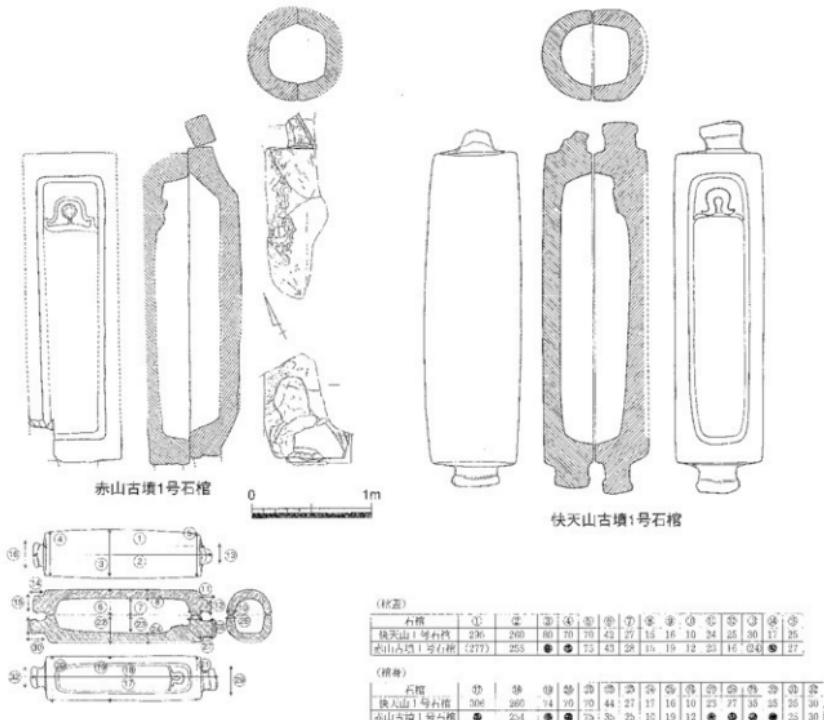
まず、形態であるが、両者ともに頭部と足部の幅がほぼ同じで中央が広くなる形態を有する。また、棺蓋の最高地点は右棺中央部にあり、向小口に向かって若干低くなる形態も共通する。棺蓋側面の立ち上がりは下端からやや膨らみながら立ち上がりそのまま曲線をもって上端にいたっている。内面の断面形にやや相違はあるが、棺蓋の断面形も類似している。繩掛突起は赤山古墳1号石室の北小口は隅丸方形であるが南小口は梢円形を呈し快天山1号石棺と共通する。

次に法量であるが、これが何よりも両者の類似点が指摘できる要素である。第30図は両石棺の各部の法量を比較したものである。非常に近い数値ではば

赤山古墳



第29図 快天山古墳と赤山古墳の石棺の変遷 (1/80)



第30図 快天山古墳1号石棺と赤山古墳1号石棺の比較 (1/40)

5cmの誤差に収まる。まさに同一の設計図を推測させるが、棺身高に関しては10cmと誤差が大きい。

棺身高は赤山古墳石棺が10cm低いがこれは底部を平坦気味に整形したためと考えられる。赤山古墳の棺蓋高は42cmあり、外形のラインもおおよそ共通することから棺蓋と棺身は同規格で採石したもの、成形段階において底部を水平にした分棺身高が低くなつたものと推察する。快天山古墳1号石棺は棺身と棺蓋の高さはほぼ共通しているが、側面の整形に棺蓋との差異が指摘できる。両古墳の棺蓋は断面形を見るに似通っていることから、同規格、同形態で採石されたものが整形段階で互いに異なる棺身として完成したのではないだろうか。

最後に相違点も指摘しておきたい。相違点は刎り抜きの隅部、石枕、縄掛突起の形状である。特に刎り抜きの隅部は快天山古墳1号石棺が曲線的であるのに対して赤山古墳1号石棺は隅丸方形であり、この属性が両者の時期を分かつ根拠にもなっている。もちろん型式組列からは時間差が想定されるものの、その他の共通点、何よりも法量の類似点からみれば互いの時期差はほとんどないと結論づけることができよう。

以上、赤山古墳刎抜式石棺の検討からは火山座刎抜式石棺である赤山古墳石棺の形態変遷が鷲の山座刎抜式石棺である快天山古墳石棺の形態変遷と極めて類似していることが解り、波部氏の指摘を検証する結果となった。特に快天山古墳1号石棺と赤山古墳1号石棺は形態のみならず、各部の法量においても極めて類似していることが判明し、のことから両古墳の右棺に時期差はほとんどなかったと結論に至った。両石棺は特に緊密な関係にあることが指摘できる。火山と鷲の山を使用した石工集団が別の集団になるのか、おなじ石工集団と考えられるのかは今回の検討のみで結論の出る問題ではない。今回の検討では両者の右棺が赤山古墳と快天山古墳という両古墳を介して非常に密接な関係にあることを指摘するものである。

第3節 円筒埴輪の検討

現墳丘の西側平坦地の南側岸面で本来の墳丘の立ち上がりが断面で確認でき、葺石の残存していたことは上述した。その葺石の下端付近はテラス状を呈し、その上には浅黄褐色土が堆積し小礫と埴輪片を含んでいた。埴輪はすべてにぶい黄褐色を呈し、胎上も類似している。この中で図示できたのは2点ある。

外面に縦ハケ、内面にケズリが確認できること。底径が30cm台であることからは、快天山古墳や岩崎山4号墳の円筒埴輪との共通点が指摘できる。さらに細かな時期区分は資料の増加を待つ他はないが、これまでの指摘どおり、4世紀半ばから後半が想定される。

第4節 赤山古墳の評価

今回の調査で現状墳丘の外側で埴丘が残存している可能性は西側の取り残された上段の畠のみであることが想定された。この部分の葺石を検出することによって後部門径の判明する可能性は残されているが、西・北・南面の3方が崖状になっており困難な状況にある。今回検討した過去の記録や航空写真による埴丘復元は推測の域を出るものではないが、一応の目安として検討した。

埴丘測量調査ではこれまで不明であった具体的な石棺の方位、現状の埴丘規模が判明した。また、葺石や円筒埴輪片の採集、1号石棺下の墓壙の確認から赤山古墳を検討する資料は若干ながらも増加した。今回判明した資料から現段階で赤山古墳を位置づけるならば、まず、刎抜式石棺の方位は厳密な東西、南北の指向ではないことが判明した。方位の意識よりは前方後方墳の主軸を意識して、主軸に対して直交、平行関係になることを意識しており、その中に北頭位、東頭位を指向しているといえる。このことから、赤山古墳は東西方向を指向する讃岐の古墳の特徴は有していないといえる。

円筒埴輪が数点採集されたが、内面にケズリ、外面に縦ハケが見られるのは岩崎山4号墳と共に通する要素であり、おおよそ4世紀中頃から後半に位置付けられることは確認できた。

刎抜式石棺の検討からは、快天山古墳の3基の石棺に見られた同様の形態変化を赤山古墳でも看守でき、快天山古墳との時期的な近さと石棺を介した近しい関係が推測された。特に快天山古墳1号石棺と赤山古墳1号石棺は一部形態に違いはある、各部の法量差は5cm内に収まる非常に似た石棺であることが判明した。鷲の山石石工集団と火山石石工集団の存在の是非、両石棺の関係についてこれからの課題とする点が多いが、両者の密接な関わりの一端はより強くなったといえる。津田湾古墳群内の石棺を比較すると、先学者が指摘するように岩崎山4号墳と赤山古墳の石棺では形態的なへだたりが大きくそのことが火山座石棺の石工集団の存在を不明瞭にしているのが現状である。こうした中で昨年度確認

赤山古墳

された一つ山古墳の剝抜式石棺棺蓋は明瞭な側面を有するが岩崎山4号墳石棺のような古帶は見られず、形態的には赤山古墳2号石棺との時期的な近さが推測される。藤田氏が指摘した棺蓋短辺部上面を斜めにきる特徴が一つ山古墳に同じように認められるが否かで火山石工集団の存在を解決する糸口にもなる。

＜参考文献＞

- 梅原末治1935「讃岐出土の一古鏡」『考古学6-8』
人内盈谷1922『津田と鶴羽との遺跡及遺物』
大野宏和 2001「香川における剝抜式石棺について
～赤山1・2号石棺を中心にして」
『花園大学考古学研究論叢』
岡田唯吉1926「鶴羽相地古墳」『大川郡誌』
秋山忠 1983「赤山古墳」『香川の前期古墳』
香川県史跡名勝天然記念物会1928「赤山古墳」
『史蹟名勝天然記念物調査報告 第3』
香川県教育委員会 1983『新編香川叢書 考古編』
北山峰生 2005「舟形石棺小考」
『玉手山古墳群の研究V』柏原市教育委員会
北山峰生 2006「磨臼山古墳石棺をめぐる一試考」
『香川考古 第10号特別号』
津田町教育委員会 1973『ふる里津田の文化財』
津田町教育委員会 1959『津田町史』
津田町史編纂委員会1969『改訂津田町史』
津田町教育委員会 1986『再訂 津田町史』
津田町教育委員会 1986『津田町外史』
寺田貞次 1935「讃岐に於ける前方後円墳」
『考古学雑誌25-5』
長町與彦 1926『津田町史』
藤田憲司 1976「讃岐の石棺」
『倉敷考古学研究集報 第12号』
六車忠一 1965「讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ご
ろの謎」『文化財協会報7』
六車恵 1968「讃岐における古式古墳」
『古代学研究52』
横田明日香2006「讃岐における角形石棺の一様相」
『香川考古 第10号特別号』
和田晴吾 1983「古墳時代の石工とその技術」
『北陸の考古学』
渡部明夫 1990「讃岐の剝抜式石棺について」
『香川史学 第19号』香川歴史学会
渡部明夫 1994「四国の剝抜式石棺」
『古代文化46-5』

渡部明夫 2002「快天山古墳石棺の再検討及び最近
の剝抜式石棺の調査例について」
『快天山古墳発掘調査報告書』綾歌
町教育委員会

蓑神塚古墳

第1章 調査に至る経緯と経過

田寒川町教育委員会では、寒川町石田東甲1750-4に所在する蓑神塚古墳の復元について以前から検討をしていたが、実施するには至らずにいた。平成13年度になり、古墳の復元方法を検討するための遺跡内容確認調査を計画した。調査内容は、石室の現状調査を行なうこととし、平成14年3月14日～4月3日に調査を実施した。統いて平成18年、古墳の埴丘範囲の把握を目的としてトレンチ確認調査を行なうこととなった。蓑神塚古墳の周囲は西側が宅地となり、北側は地面がコンクリートで固められ、東側は傾斜面を切って南北に舗装道路が通っており埴丘範囲の確認可能な場所は南側の畑であった。調査は平成18年11月20日～12月22日の期間で実施した。12月1日に前部の石積を確認し、12月18日に埴丘と周溝を確認した。

平成18年度の調査体制は以下のとおりである。

(調査体制)

さぬき市教育委員会生涯学習課

課長 六車 均

課長補佐 佐伯 宗澄

係長 山本 一伸

主事 鶴身 昌大

大川広域行政組合埋蔵文化財係

主査 阿河 銳二

主事 松田 朝由

技術員 多田 歩

技術員 武井 美和

第2章 蓑神塚古墳の立地と歴史的経過

蓑神塚古墳の位置するさぬき市寒川町石田は南部が阿讃山脈から派生する丘陵で、北の平野部に向っていくつもの尾根が伸びている。古墳は谷部に造成された明神池、御田神辺池に挟まれて北に伸びる丘陵の東側山腹傾斜面の裾近くに立地する。

これまでさぬき市寒川町石田において旧石器時代の遺跡は確認していない。

縄文時代は後期の土器、石器が加藤遺跡、石田高校校庭内遺跡で、晩期の土器が森広遺跡、石田高校校庭内遺跡で出土している。

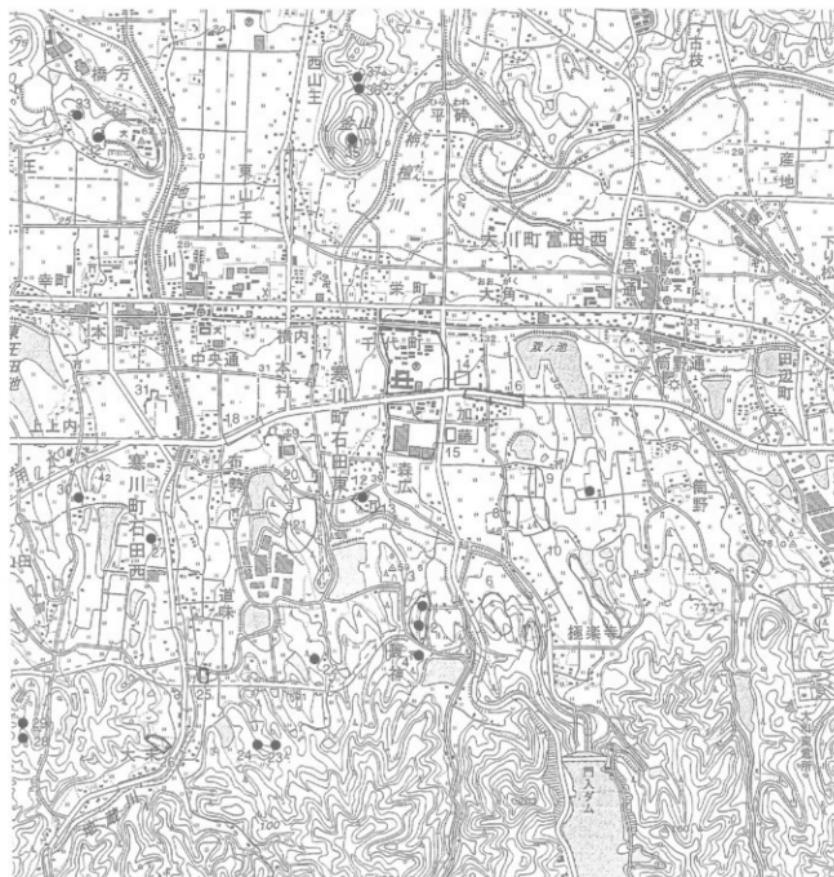
弥生時代前期は石田高校校庭内遺跡で縄文時代晩期の土器とともに甕が出土している。中期は蓑神塚古墳跡で環濠らしき3条の溝とともに中期末の甕が出土し、極楽寺墳墓群で消失家屋から土器片、石器、鉄製品が出土している。布勢遺跡では包含層から中期末の土器が多量に出土している。天王山遺跡では堅穴式住居が見られ、多数の石鎚、打製石包丁が採集



(s=1/10,000)

第31図 遺跡位置図

蓑神塚古墳



- | | | | |
|-----------|--------------|---------------|-----------|
| 1 蓑神塚古墳 | 11 中尾古墳 | 21 石田神社遺跡 | 31 国弘城跡 |
| 2 白磁出土地 | 12 森広天神山古墳 | 22 野崎古墳 | 32 天王山1号墳 |
| 3 蓑神古墳群 | 13 森広天神遺跡 | 23 道味1号墳 | 33 天王山2号墳 |
| 4 大蓑彦神社 | 14 石田高校校庭内遺跡 | 24 道味2号墳 | 34 天王山遺跡 |
| 5 蓑神遺跡 | 15 森広遺跡 | 25 道味遺跡 | 35 金山1号墳 |
| 6 蓑神東古墳群 | 16 加藤遺跡 | 26 大末古墳群 | 36 金山2号墳 |
| 7 極楽寺墳墓群 | 17 本村・横内遺跡 | 27 山田地区の横穴式石室 | 37 金山3号墳 |
| 8 極楽寺廃寺 | 18 布勢遺跡 | 28 山田1号墳 | |
| 9 相ノ山古墳群 | 19 石田城跡 | 29 山田2号墳 | |
| 10 極楽寺古墳群 | 20 石田神社境内古墳 | 30 赤山古墳 | |

第32図 周辺主要遺跡位置図（1／20000）

されている。この他、布勢神社周辺から東の御田神辺池周辺にかけて石器を採集できる石田神社遺跡では磨製石包丁が採集され、極楽寺地区集落東側の極楽寺遺跡では土器片、石鎌、扁平片刃石斧、鑿形石器が採集されている。中期の遺跡は丘陵上に多く、丘陵上に集落を営み、その下の谷平地で稲作を行なっていたと推測される。

弥生時代後期は半野部の南端に当る砂礫台地上に遺跡が多く営まれるようになる。1911年に8点以上の巴形銅器が出土した森広天神遺跡、半形銅劍3点が出土したといわれる石田神社遺跡、周辺住居跡とともに扁平純式袈裟襟文銅鐸片7点の出土した加藤遺跡、数次にわたる調査で弥生時代後期・古墳時代末・平安～室町時代の集落跡が確認された石田高校校庭内遺跡、溝とともに多量の土器の出土した布勢遺跡、弥生時代後期前半～終末期の集落及び円形周溝墓、土器棺墓等の墓域を検出した森広遺跡があり、これら東西約400m、南北約800mの遺跡群を森広遺跡群として捉え、多彩な青銅器を保有する弥生時代後期・終末期の大型化した集落と評価されている。その他、森広遺跡群から約1.5km南西の地蔵川東岸の河岸段丘に位置する道味遺跡では後期の竪穴式住居、集積造構、土抗を検出しており森広遺跡群との関連性が興味深い。

古墳時代前期は現在のところ石田地区では集落、墓地ともに希薄であるが、列石をもった墳墓、箱式石棺、木棺墓、十塘墓等を検出した極楽寺墳墓群が確認されている。布勢遺跡では前期から中期にかけての土器器類が多量に出土し、性格不明の小穴群を確認している。周辺に集落跡のある可能性が強い。布勢遺跡では他に勾玉3個が伝わる。碧玉製の1例は頭部に三条の沈線を施した丁字頭となっている。

古墳時代中期は石田神社境内古墳群において須恵器大甕が出土している。5基の古墳があり、古式群集墳として評価されている。赤山古墳は埴丘に円筒埴輪が見られ、中期から後期にかけての特徴が指摘されている。この他、山田古墳、道味古墳に中期古墳の可能性が指摘されているが、遺物等は現存せず詳細は不明である。

後期は初頭の須恵器が極楽寺古墳群の採集資料の中に含まれているが6世紀初頭の古墳は未見である。後期中頃（6世紀中頃）の大干山古墳の後、後期後半に入ると石田地区で多くの古墳が確認できる。山田地区の横穴式石室、大木古墳群、野崎古墳、蓑神古墳群、蓑神東古墳群、極楽寺古墳群、柏ノ山古墳群、中尾古墳等があり、阿瀬山脈から伸びる尾根上、

山腹傾斜面に立地している。一方、石田地区平野部の独立丘陵には天干山2号墳、金山古墳がある。

後期古墳は7世紀以降も追葬されるが、7世紀後半以降の須恵器はほとんど認められず、7世紀後半は古墳への埋葬が行なわれなくなったといえる。この頃（7世紀）の集落遺跡として森広遺跡の竪穴式住居跡群があり、古墳との関連が注目される。また、7世紀中頃の掘立柱建物跡は8世紀代の条里の方位に合った建物とは異なる方角を指向する。なお、森広遺跡の北約200mは南海道の存在が指摘されている。

律令制下の石田地区には寒川郡石田里が定められ、四天王寺伽藍配置が想定される極楽寺廃寺が建造されている。白鳳期から平安時代までの短弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、偏行唐草文軒平瓦、翫尾が出土した他、經筒（明治18年発見、平安時代）、鉄錫杖、奈良興福寺金堂鎮壇貝であった唐草双鸞八花鏡の踏み返し鏡（明治18年発見）が出土している。昭和6年刊行の『石田村誌』には極楽寺廃寺の南西2町（約200m）に窯跡のあったことが指摘されており、極楽寺廃寺の瓦を焼いていた窯跡との云い伝えを記載している。

極楽寺廃寺の南西700mの丘陵傾斜面に大賀彦神社がある。この神社は延喜5年（905）から延長5年（927）にわたって編集された『延喜式』のうちの『神名帳』に記されたいわゆる延喜式内社である。現在の大賀彦神社から北側の丘陵裾部から12世紀の白磁四耳壺が出土（昭和32年頃発見）しており、神社との関わりが推測される。また、中世（1245～1254年）には讃岐国寒川郡司讐岐光が人般若経600巻を寄進している。

地蔵川を南に通った山間部の小倉には小倉廃寺があり、山岳の峰の薬師と呼ばれる尾根上や谷部には礎石や布団瓦が確認されている。

集落は石田高校校庭内遺跡、森広遺跡、本村・横内遺跡で条里の方角にあう掘立柱建物跡や清跡を検出しており、森広遺跡の8世紀前半の溝からは、土師器、須恵器に混じって回転土師器や東北系黒色土器、北関東系の盤が出土している。

文献では康治2年（1143）の太政官牒案に「石田郷」の記載が見られる。

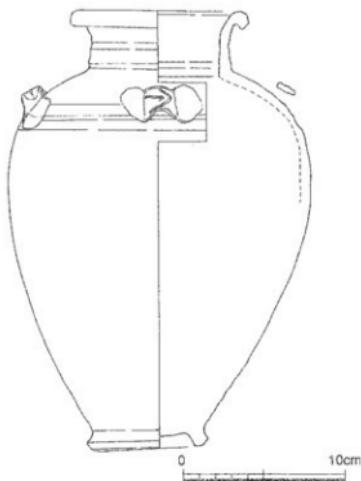
中世は嘉元4年（1306）の御領目録によって昭慶門院領になっていたことがわかる。

石田高校校庭内遺跡や本村横内遺跡において鎌倉時代から室町時代にかけての集落跡が検出され、布勢遺跡からは同時期の遺物を多く含む溝を検出てい

蓑神塚古墳

る。五輪塔等の石造物は各地に点在するが、石田城跡の光明寺境内には永徳年間の五輪塔地輪が確認できる。

城跡は石田城跡、国弘城跡が認められる。



第33図 蓑神地区出土白磁四耳壺（1／3）

第3章 蓑神塚古墳に関する過去の記載について

蓑神塚古墳周辺に多くの横穴式石室が開口していたことは『讃岐國名勝圖会』の「門入……仏の穴といふ地名あり……塚穴所々に多し」や『新撰讃岐國風土記』の「門入の所々に在。穴居の跡なり」の記載から伺うことができる。蓑神塚古墳について詳細な記載をしたのは大内豊谷である。『石田村古蹟考』において墳丘は大部分が残り（墳丘裾は左右から掘り付けられ改変している）円墳であること、2個の玄室をもつこと、南北両端が開口していること、墳頂には祠と2尺5寸の柏があり、付近に陶器、土師器片、葺石が見られることが指摘されている。また、古墳の法量が具体的に記載されており、古墳の封土は高さ2間（3.6m）、周囲3間ばかり（約5.4m）、羨道（大内氏は玄室の前室と記載している）は高さ7尺5寸（約2.3m）、奥行7尺（約2.1m）、闊さ6尺（約1.8m）、後室は高さ5尺3寸（約1.6m）、横幅6尺（約1.8m）、奥行5尺5寸（約1.65m）と記載されている。天井には各3枚の石があると記載されているが、現在、玄室奥の1石は崩落し石室の北側に置いている。

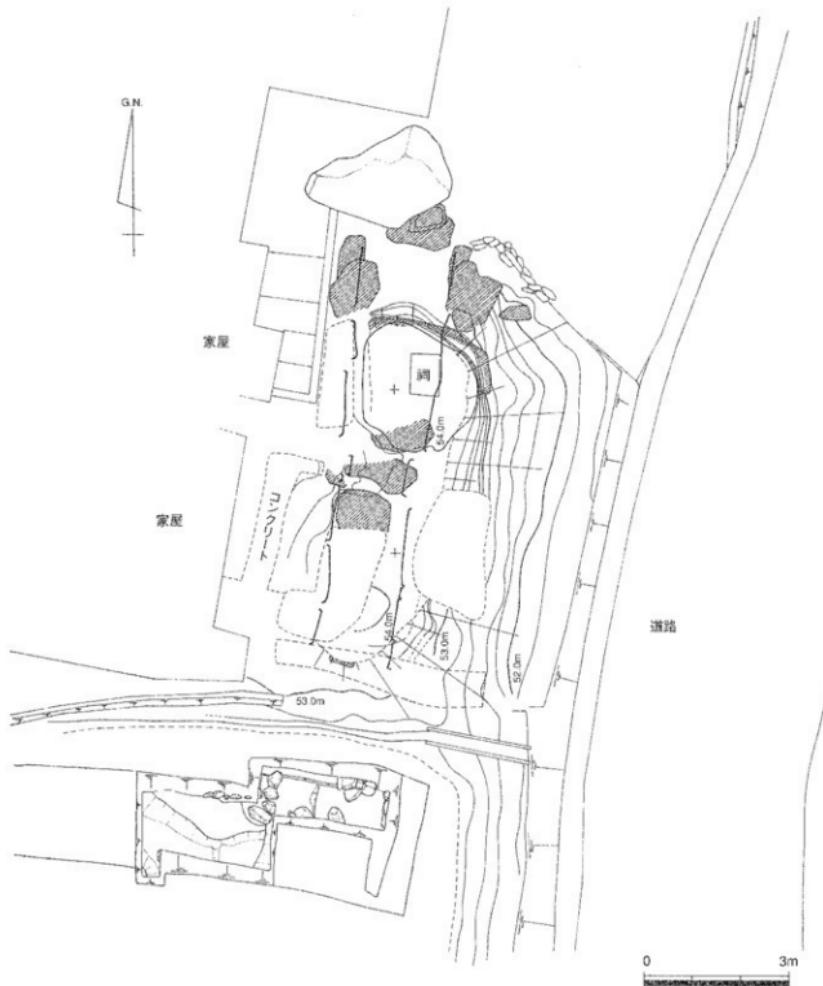
有馬清平氏は『石田村誌』で蓑神塚古墳を記載している。記載内容は大内豊谷氏とおおよそ符合することから大内氏の文を参照に執筆したものと思われる。ただ、一部、記載の異なるところがあり、大内氏の墳頂部で記載していた祠付近の陶器、土師器片、葺石に関して今はなしと記載している。石室の評価は大内氏の記載を継承して玄室2室の特異な形態で合葬もしくは重葬としている。両氏の以上のような評価は奥壁の石材が抜き取られて羨道と両方に入口があったこと、玄室の天井の高さと羨道の天井の高さがほぼ同じであったことに起因する。1985年古瀬清秀氏は『寒川町史』において北端の奥壁及び蓋石の一部が崩落して玄室奥壁側から羨道が見通せるようになっていると正當な評価を行なっている。

第4章 墳丘と横穴式石室の現状

平成14年の調査では玄室と羨道の床面の一部の発掘と横穴式石室の実測を実施している。また、今年度は墳丘測量図を20cmセンターの縮尺1/50で実施している。本節ではまず、墳丘と横穴式石室の現状と平成14年の調査で出土した遺物について記載する。

第1節 墳丘の現状

人正11年の大内氏の指摘には墳丘の大部分が存在し円墳であると記載しているが、平成19年の現状では墳丘の削平が著しく墳丘は方形状となり、本来の形を伺うことはできない。墳丘東側は墳頂部から1m下位まで急傾斜となり、封土の流出を防ぐため土囊が傾斜面につまれている。そこから下位は比較的ゆるやかとなるが1.5m下った標高51.5m付近でコンクリートの用壁となり、約1m下位は南北方向の道路となる。今回のトレンチ調査で標高51.5mに墳丘裾が位置することが確認でき、古墳の立地面を一旦平坦にしてから盛土を行なったとすれば墳丘東側の用壁上面はおおよそ墳丘の基底部になる可能性がある。墳丘の北側は石室の奥壁が崩壊している状態で、本来奥壁が想定される箇所に石室材の巨石が散乱している。その下場は現在コンクリートで固められている。墳丘の西側は宅地が隣接している。墳頂部から若干傾斜した西に宅地があり、地面はコンクリートで固められている。墳丘の南側は畠と隣接し



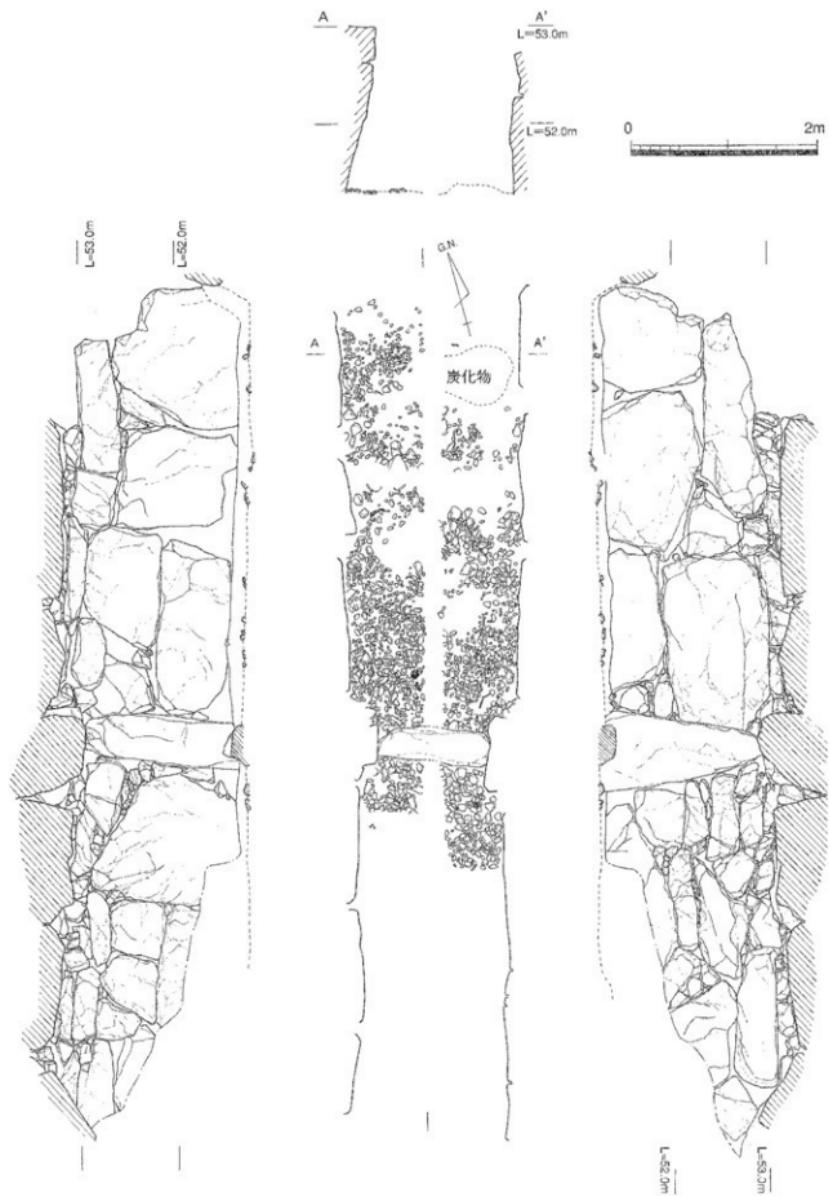
第34図 墓丘測量図 (1/100)

ている。境界は西側の宅地はコンクリート堀で区切られているが墳丘の南は墳丘が傾斜してそのまま畑になっている。墳丘斜面は一部開口して石室内部を伺うことができる。西側には花崗岩の巨石が斜めに置かれており、はずされた羨道部の大井石と考えられる。

墳頂部は封土が流出して天井石3石が露出している。

る。露出した天井石の北側に木製の刹があり、その下部には五輪塔片を集積している。

現状の墳丘は墳頂部標高約54mで、墳丘高は約2.5mを測る。墳丘は周囲のほとんどがコンクリートで固められており、南北9m、東西7mの方形状に封土が残る。



第35図 横穴式石室 (1/50)

第2節 横穴式石室

現状の全長約8.3mの両袖式の横穴式石室である。石室の主軸は北から7° 東に傾いている。石室は奥壁と奥壁部の天井石と側石が崩落しており、羨道側は南端の天井石が崩れて斜めに落ち込んでいる。さらに南にも天井石は続いていると推察されるが、その石材は現在古墳南西部に置いてある。石室に使用している石材は全体的に巨石である。

玄室は現状で長さ約4.6m、幅1.8m、高さ約2.0mを測る。平面形は長方形で胴張り等は認められない。玄室の石積は長さ1~1.8m、幅0.8~1.5mの巨石を多用する。両側壁とも玄門の袖石まで3石を配する。袖石高は約1.6mを測るが、袖石の上端にレベルを合わせるように基本的にはこの高さまで2石を積んでいる。多くの石材は横長に積んでいるが、一部縦長に積んだ石も見受けられる。2石を積んださらには上位は長さ15~20cm、高さ10cm以下の小疊、中疊を積み、その上に天井石をかける。従ってこれらの小・中疊は天井石の高さを調整するための疊であり、従って玄門部の天井石の下面と玄室の天井石の下面の高低差は15~20cmと小さいのが特徴である。天井石は長さ40~70cmの巨石が2石架けている。古い記録では3石が懸けられていたようで、現在奥壁部にある巨石がかつての最奥の天井石である。石材間は側面の石積、天井石とともに20cm程度の塊石の充填が顕著に認められる。石積のもち送りは東側壁では全く見られず、垂直に積まれている。一方、西側壁は基底石から傾斜し東側との差は歴然としている。両側壁で傾斜を意図的に変えた可能性もあるが、上庄等で二次的に変動したのであろう。玄室基底石の標高

は約51.2m、天井石下面の標高は53.2mである。

玄門は幅約1.2cmを測る。玄門の袖石は玄室からは内側に約30cm、羨道からは10~20cm張り出している。西壁は幅50cmの長方形の石材を縦に置き、東壁は下端80cm、上端20cmの上位にすばまた石材を縦に置いている。袖石の水平断面は整った方形ではなく、若干側壁に向ってすぼまる。その分玄室の石積との間に隙間ができるが、その隙間は塊石を十分に充填している。

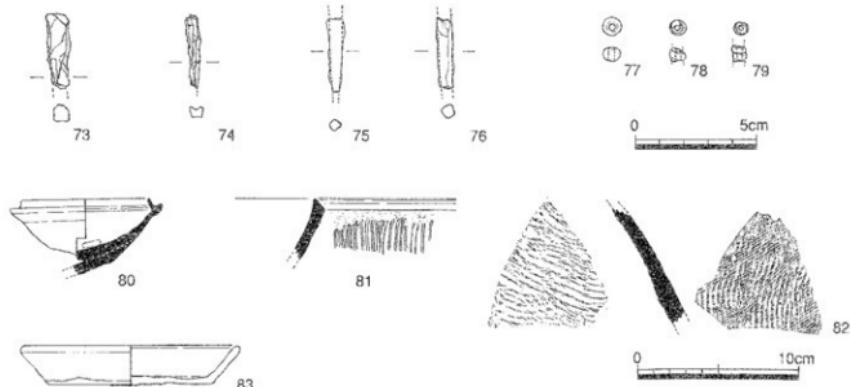
玄門部の天井石は1石で玄室、羨道の天井石からは15~20cm低くなっている。

羨道は現状長約3.9m、幅1.5m、高さ約1.9mを測る。高さ、幅において玄室との法量差は小さい。天井石は現状で3石架けられているが、南端は崩落し斜めになっている。石積は玄室の石材より小さく長さ50cmの石材を多用する。羨道床面のほとんどは堆積土で南にかけて厚く堆積しているため床面の状況は十分に観察できないが現状から推察するに羨道部は天井石までに4~5石を石積している。側壁の基底石は観察できないが、基底石は比較的大型の石材を使用している。羨道の石積間は玄室と同様に小塊疊を充填しており、天井石間の隙間にも充填は顕著に認められる。

石材は全て花崗岩である。

平成14年の調査では玄室床面と羨道床面の一部の検出を行なった。結果として玄室から羨道にかけて拳人の川原石が疊床として広く確認できた。また、玄門には横1.2、奥行約35cm、高さ20cm以上の仕切り石が玄門幅いっぱいに玄門中央に設置されている。

床面からの出土遺物の多くが近世以降の陶器、



第36図 横穴式石室内出土遺物 (73~79=1/2, 80~83=1/3)

瓦等であるが、少数古墳時代の遺物も確認できた。須恵器、ガラス玉、鉄製品が出土し、やや時期が下って古代の土師器皿がある。

73~76は鉄釘である。断面は方形を呈する。77~79はガラス玉である。77は径7.8mm、孔径2.5mmを測る。78・79は上下端が欠損しており、形態もいびつで、79は胴部にえぐりが見られる。

80は玄室から出土した須恵器装飾器台の子杯である。口径約7.8cm、器高約3.8cmを測る。外面は局的に自然釉が付着して黒色を呈する。外面底付近にヘラ削り調整が見える。81は羨道から出土した。須恵器壺の可能性が高い。口縁端部はナデによってやや凹み、端部は上方に若干摘み上げている。外面はカキ目調整の後、縱方向に直線の文様を施している。直線の長さは約3cmである。82は須恵器壺の体部で外面タタキの後にカキ目調整、内面は青海波の当真痕が残る。83は古代の土師器杯である。口径13.5cm、底径10.1cm、器高2.5cmを測る。底面外面に回転ヘラ切りが見られる。

第5章 調査の成果

第1節 レンチ設定地点

調査は古墳の南側で現在畠になっている箇所を対象とした。この地点は標高52.8mの平地で北側の古墳との間に区画はなく、墳丘からそのまま平地に至る。墳頂部は標高約54mを測ることから約1mの比高差がある。この区画はかつて宅地であった。東側は約1m下位に道路が南北に走り、西側は山の傾斜面が削られ崖状になっている。この区画は本来山の傾斜面であったのをテラス状に削り出したと考えられる。

今回の調査では古墳の規模の把握を主たる目的とし、レンチは石室前庭部の想定箇所に東西方向に設定した。最初横穴式石室の前庭部の想定される箇所に幅1.5m、長さ3mで設定したが、レンチ西端において石積が検出されに至り、南側にレンチを拡張して石積の南端を確認した。また、石積付近は墳丘状の高まりを呈しており、墳丘の広がりを確認するため、さらに西側に長さ3m、幅約2mで拡張した。

第2節 レンチ調査の成果

(1) 古墳上位の堆積状況・近世石列の様子

地表面から10~15cm下で山の崖面に自然堆積して

いるのと同様の礫を含んだ浅黄色土が一面に見られ、上面で砂糖竈など近世以降の遺構を確認した。上面の標高は52.5~52.6mでやや西側が高いもののほぼ水平である。浅黄色土は約60cm堆積しており、人為的に入れられた土と理解する。

浅黄色土を取り除くと黄褐色土が確認でき、標高52.5~52.8mで東西方向の石列を確認した。石列は長さ30~40cmの花崗岩を主とする。トレンチ内に4m間に約16石が見られ若干西にかけて高い傾向がある。トレンチ内で石列は東西ともに途切れている。石列の両端に傾斜変換や堆積層の変化は見られず、後世に抜き取られた可能性も考えられる。石列を挟んだ南北も地形や上層の変化はなく、区画のために設けられた石列の可能性が推察される。なお、石列の南側では焼土が2ヶ所で見られ、また、局的に5~20cmの礫の集中地点があるが、性格は不明である。

石列東端から4石目は五輪塔火輪の転用であり、形態、法量から16世紀が想定される。また、石列を設置しているベースや石列周囲の堆積土は羽釜片、近世陶器・陶磁器、土師器足釜の脚部等が出土しており、石列の年代は近世が想定される。

(2) 古墳前庭部の破壊状況

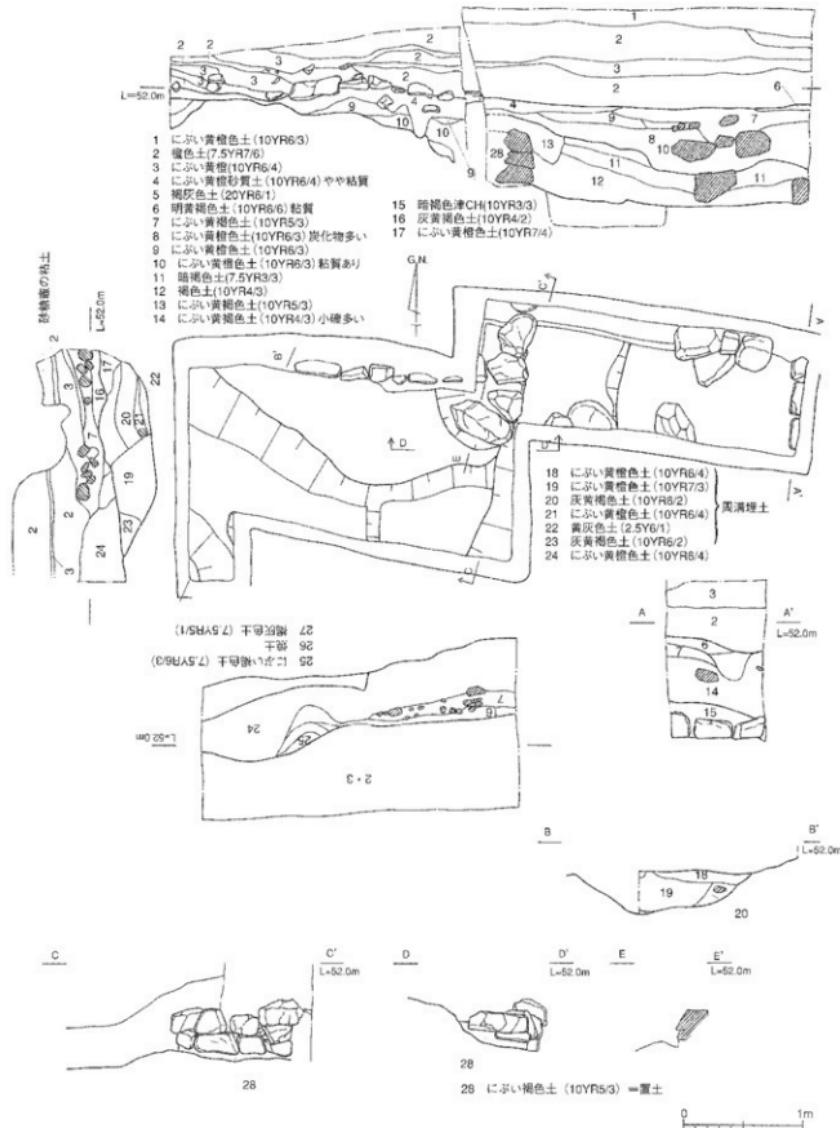
右列から15~30cm土を除去すると黒褐色土がレンチ東半において西から東に傾斜して確認された。

黒褐色土内からは長さ20~50cmの花崗岩を主とする礫が10石以上散乱している。出土遺物は土師質上器片が多く、中に弥生土器片やサヌカイトの剥片が確認でき、周間に弥生時代の遺跡が推察される。一方、擂鉢片、鍋片など中世以降の遺物も多く、近世陶磁器もある。以上から近世初頭に古墳の前庭部の上位石積を崩し整地し、石列を設置したと考えられる。なお、遺物は他に布目瓦1点や須恵器片が確認できる。

(3) 古墳前庭部・石積の様子

レンチ東半では黒褐色土上の30~40cm下で地山が確認できた。また、レンチ中央付近及びレンチ西端には南北に伸びる石積を確認した。石材は全て花崗岩である。

レンチ中央付近の石積は北端で3段、南、中央で2段認められる。基底石は標高51.25mを測り、ほぼ水平である。南端は長さ約55cm、高さ約15cmのトレンチ内では大きな礫を石室入口に直行して横長に配している。また、南端の礫の南側は地山が若干



第37図 トレンチ内 平面・立面・断面図 (1/40)

立ち上り石材の崩落を防ぐ意図が見られるなど、各所に石積南端とする意図が伺える。

トレンチ内で確認した石積はトレンチ北壁までの約1m間であるが、北壁付近で一部露出した石材があり、石積は横穴式石室に向って続いている。

石積の下や西側にはにぶい褐色を呈する裏込め土が認められ、幅は南端の石積で約10cmである。

石積の下場は3~4cmの厚さで置上がりが見られ、その下部に標高約51.2mの地山ラインが確認できる。裏込め土中は裏込め石は見られない。なお、土器片を2点確認したが幅2.5cm程度の小片で時期は不明であるが、2点ともに器壁内は焼成不良で黒褐色を呈する。

石積の東は石積から約80cmまで地山が約15cm緩やかに傾斜して下り、さらに東は2~3cm立ち上がりがて以東は約140cm東まで平坦地である。この地点は北に行くと横穴式石室内に至ることから、石室内に至る通路といえる。ただし、石積から東に約80cm緩やかに傾斜してから平坦地となるような構造は例がなく、床面は後世の改変の可能性がある。

トレンチ東端は西側と向かい合うように石列が南北に見られる。基底石下面の標高はトレンチ中央の石積の基底石よりも約15cm下位の標高約51.05mである。石材は東半がトレンチ外となり具体的な状況は不明であるが、観察できる範囲では石列の上に石積は見られず、トレンチ東壁からビンボールを刺しても石材の存在は確認できない。また、トレンチ北と南にはビンボールによって右列の続きが確認でき、トレンチ東端は現状で石列が南北に続くことが指摘できる。トレンチ中央の石積との距離は約2.2mである。石積の石列の基底石の比高差が約15cmもあることから、トレンチ東端の石列は北側の横穴式石室東壁の延長上には位置するものの、古墳築造時の施設の可能性は低い。

(4) 墳丘の様子

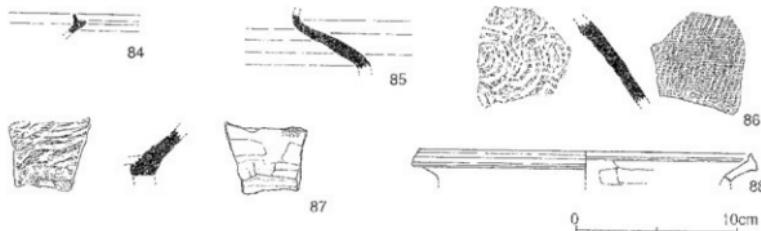
石積から西は墳丘状の高まりを検出し、墳丘裾が円を描いてトレンチ北壁に入り込んでいる。現状で確認された墳丘は断ち割りを入れていないものの、表面観察からは地山の可能性が高く盛土は見られない。墳丘は基底部が平面的に円を描くが、トレンチ北壁の西側で観察される墳丘上面は東にかけて傾斜して下っている。確認される墳丘の最高点が標高51.9m、石積南端付近では標高51.4mを測る。地山上には近世以降の堆積土が見られることから墳丘は後世の改変を受けていると考えられる。

墳丘裾は標高約51.5mを測り、トレンチ中央の右積の基底石よりも約25cm高い。墳丘裾の外側は幅約60cmの平坦地となり、さらに外側は再び外方に立ち上がりが見られることから、古墳の周溝と考えられる。周溝幅は約1.5m、現状の深さは最大で約30cmである。

周溝には黄褐色上の堆積が見られるが、墓道（前庭部）付近は近世の堆積層が周溝の堆積土を切っている。この地点から墓道にかけては周溝の床面が傾斜しているため後世の改変が想定され、本米周溝底は標高約51.5mで水平と推察する。なお、周溝外側の肩の状況は周溝外肩の立ち上がりは見られるが、一方で西から東への地山の傾斜も確認でき、攪乱と思われるが詳細は不明である。

トレンチ中央の右積の南はトレンチ内の80cm間ににおいて石積から南に延長したラインを西の起点として東にかけて緩やかに傾斜しており、墓道の可能性もあった。ただし、ベース直上の堆積土から中近世の遺物が確認されていることから、石積の東側と同様に後世に改変された可能性が強い。

墳丘ラインから想定される墳丘は径約16mの円墳に復元でき、幅約1.5mの周溝が巡る。ただし、正円形で復元した場合、墳丘北端と石室奥壁との距離は狭く、本米周溝は正円でない可能性もある。



第38図 トレンチ内出土遺物 (1/3)

第3節 出土遺物の検討

トレンチ調査では近世以降の遺物が主であったが、古墳時代の遺物も若干はあるが出土した。84は須恵器杯身の口縁部である。地山上層の黒褐色土から出土した。立ち上がりが小さい。85は長颈壺の胴部から頸部付近である。近世の石列の下層で出土した。外外面に回転ナデが見られるが頸部との接合付近は粘土を貼り付けて接合した様子が伺える。86も近世の石列の下層で出土した。須恵器蓋の胴部である。外面に叩きとカキ目、内面に当貝痕が見られる。87は地山直上の黒色土から出土した。装飾須恵器の脚部付近と思われる。内面は当貝痕がみられ、下端には接合の剥離面が見られる。外面は上位にタタキがみられ下端は脚部との接合面で凸状にして脚部が接合しやすいように工夫されている。この接合面の上の外表面下位には接合のために貼り付けた粘土が観察できる。88は弥生土器である。調査では弥生土器の小片やサヌカイトが比較的多く見られ、付近に弥生時代の遺跡の存在が伺える。

第4節 砂糖甕の調査

今回設定した薺神塚古墳前庭部のトレンチでは表土除去時に砂糖甕を検出した。当初は砂糖甕を残してその東側を掘削し古墳の状況を確認していたが、前庭部の石積を検出し墳丘の広がりを確認することが必要となった。そこで砂糖甕の一部を掘削せざるを得ない状況になり、砂糖甕の部分調査を実施した。

砂糖甕は薺神塚古墳の南の平地の北西部、標高約52.65mで検出した。円形の甕部に隅丸方形の作業場が付く平面形態である。

砂糖甕は甕を2つ並列させ、焚き口部からそのまま作業場へと繋がる構造である。作業場から向って右を右甕、左を左甕とする。調査では古墳前庭部に設定したトレンチ北壁が右甕のほぼ中軸ラインを通過することから、左甕は全掘、右甕は南半分を掘削した。

甕の平面形態は円形をなし、両甕ともに直径約9.5m、深さ約30cmを測る。甕部は全体的に比熱によって橙色化しているが内部に近い箇所では黄橙色をなす。この黄橙色した部分も円形に巡り甕の内側は壁面となっている。ただ、ほとんどの壁面は甕内に崩落しており、残存するのは両甕とともに作業場から見て奥側のみであった。

甕内は最奥が曲線的な平面形で、壁面はそのまま床面に至っているが、側面は直線的で全体的に長方形の平面形が復元される。床面は硬化が顕著で硬化範囲からも長方形形状の形態が伺える。左甕は幅30cm、

長さ約63cmである。仕事場と甕の境には焚口の掘り込みがあるが、その手前は硬化していない水平面が約10cmみられ、それを含めると甕部の床面の長さは約73cmである。この長方形の長辺は仕事場のラインに平行ではなく、若干砂糖甕の中軸ラインに向ってずれている。右甕は北側が未掘削のため幅は不明であるが、長さは焚口の落ち込みの手前に長方形の石材が設置されており、奥壁からは石材の奥壁側まで約72cm、石材を含めると約90cmを測る。内面の壁面は、奥壁は甕上端の円形ラインに沿うように曲線であるが、側壁はレンガ状に焼成されたブロックや石材が使用されている。

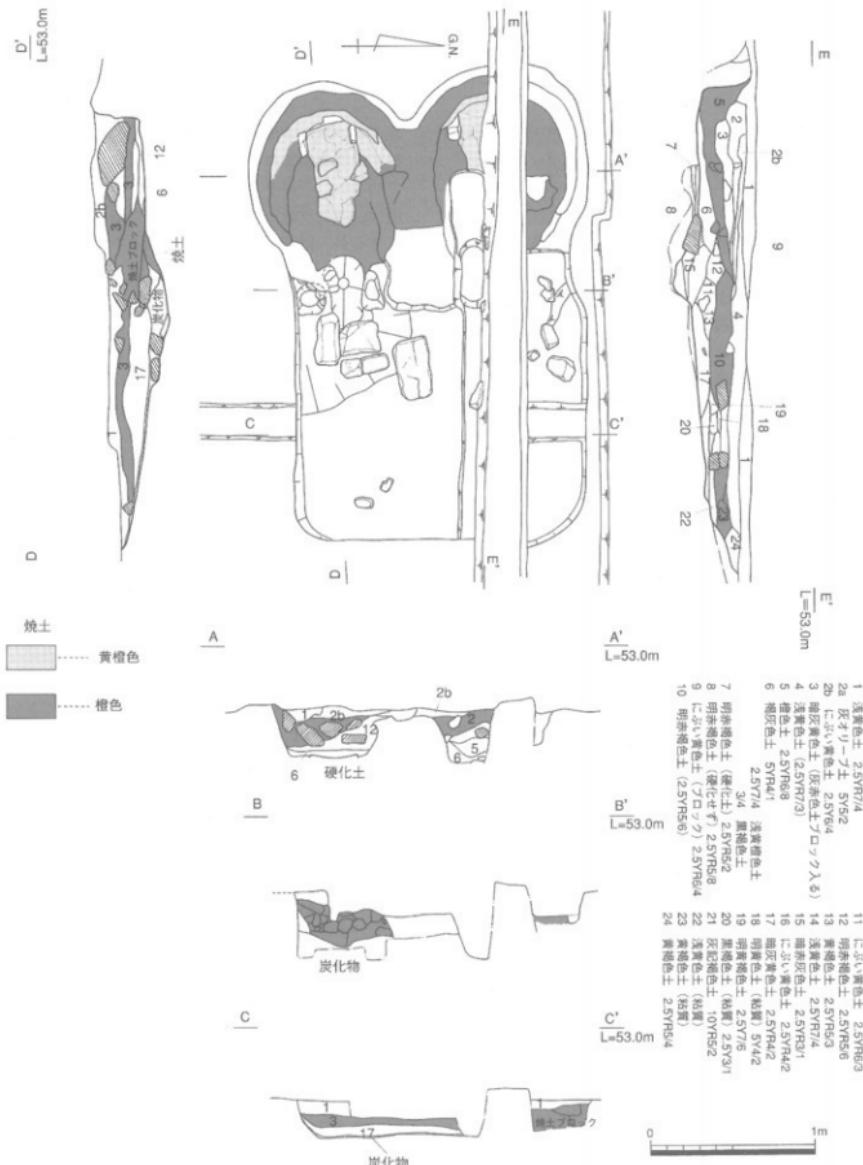
左甕では仕事場から見て右壁がレンガ状のブロック片、左壁が石材を使用している。右壁のブロック片は長さ約16cm、高さ16cm、奥行約6cmを測る。奥壁、床面は粘土の中にブロックを入れ込んだ状態にある。左壁は長さ13cm以上、高さ約18cm、奥行約8cmを測り、右側面と同様に奥壁の粘土、床面内に石材が入れ込まれている。床面から左側面の石材は約14cm露出しており、床面には4cm入り込んでいる。石材は内側に平らな面を向け、外側は凹凸が著しい。石材の上面は粘土によってさらに壁を高くしている。右壁もブロック上面は甕高の中位になることから、本来内面は円形の壁と長方形の壁の2段構造になっている可能性がある。

右甕でも奥壁に向って左壁にブロックが1点残存している。また、埋土中からブロック片1点が採集されている。左壁のブロックは長さ約18cm、高さ11cm以上、奥行約8.5cmを測る。上面は平坦になっていない。埋土中から出土したブロックは長さ8cm以上、高さ約9.5cm、奥行約5cmを測る。調査で確認されたブロックは法量に統一が見られない。

硬化した床面は両側面から中央に向ってわずかに凹む。床面上には厚さ約1cmで炭が堆積していた。

甕内には破壊された上壁がブロック状に堆積している。土壁は2cm程度の長石を多量に含むがスサの混入は認められない。壁面は丁寧に平滑に仕上げられており、壁面に煤の付着したものもある。また、複数に上端面をもつ壁面があるが、上端の平面形は若干曲線をもつことから上壁は円形であったと考えられる。

甕と作業場の間には焚口がある。左甕では東西長約40cm、南北長20cmの楕円形で深さ約10cmを測る。焚口の手前には敷石が3石見られる。焚口に接して花崗岩2石を並列して敷き、その南に角礫凝灰岩(豊島石)を1石敷く。角礫凝灰岩は表面に細線の



第39図 砂糖壺平面・断面図 (1/30)

工具痕が顯著に認められる。また、焚口の両端にも幅10~20cmの凹みがあり、礫を敷いていた可能性がある。焚口には炭化物が厚く堆積しているが、赤色化はしておらず、被熱の形跡は認められない。右竈は南北長が不明であるが、東西長約30cm、深さ約10cmを測る。焚口には左竈と同様に炭化物が厚く堆積はしているが、赤色化せず被熱の形跡は認められない。掘削した範囲では左竈のような敷石は見られない。なお、両竈の境に長さ約35cm、幅20cmの礫が見られるが、用途は不明である。

仕事場は東西約1.4m、南北約1.75mの隅丸方形である。東端から竈部に向けて全体的に緩やかに傾斜しており、現状の仕事場東端と焚口敷石上位において比高差約18cmを測る。仕事場には全面に厚さ1cmで炭が堆積していた。仕事場の南東部でレンガ状の焼物片が1点見られる。幅約9.5cm、厚さ4cm以上を測る。長さは5cm以上である。この焼物は竈内部のレンガ状のブロックに似るが胎土に雲母が多く長石は顯著でない。比較的きめの細かな胎土で竈内のものとは異なるが用途等は不明である。また、この焼物に隣接して破砕した花崗岩片がある。砂糖竈はほぼ東西方向に作られ、西が奥側となる。また、竈の周辺では畳屋等の柱穴や、砂糖絞小屋等、他の施設は確認していない。

出土遺物は瓦質の土瓶が見られる。

第6章 まとめ

第1節 蓑神塚古墳墳丘の推定復元

石室の現状とトレンチ調査から蓑神塚古墳の墳丘復元を行なう。まず、トレンチ調査で確認された石積と石室との関係であるが、両者を平面上で確認すると石積は石室の羨道部の延長上に位置し、若干開き気味に南に伸びている。トレンチ東端の右列もやや東によってはいるが違和感はない。次に基底石の標高は石室内が約51.2mに対してトレンチ内の石積が51.2~51.3mで両者はほぼ水平になっている。一方、トレンチ東端の右列は約15cm下位の標高約51.05mであり、後世に設置された可能性が強い。使用石材の大きさはトレンチ内の石積で長さ20~30cmに対して石室は50cm以上で正倒的に石室内の方が巨石を用いており、違いが見られる。石積と同規模の礫は天井直下の高さを調節した石や巨石間に充填した石に見られる。こうした相違点はトレンチ内の石積が石室開口部であり、前庭部として石積方法や

使用石材を変えている可能性がある。

以上の点からトレンチ内の石積は横穴式石室の開口部付近の前庭部になる可能性が指摘できる。一方、トレンチ東端に南北に伸びる右列は位置的には問題はないが、標高51.05mで石室や石積の基底石よりも15cm低いこと、トレンチ内の石積間の構造が石積から右列にむかって幅40cmまで傾斜して降り、そこから東の右列までの1.8mが平坦地を呈する特異な構造をしている。こうした構造は一般的な横穴式石室には見られないものである。この床面上に堆積している土層は中世土器片を含むことからこれらの構造が古墳築造時から後に改変されたものと推定し、右列に関しても後世に設置された可能性を考える。

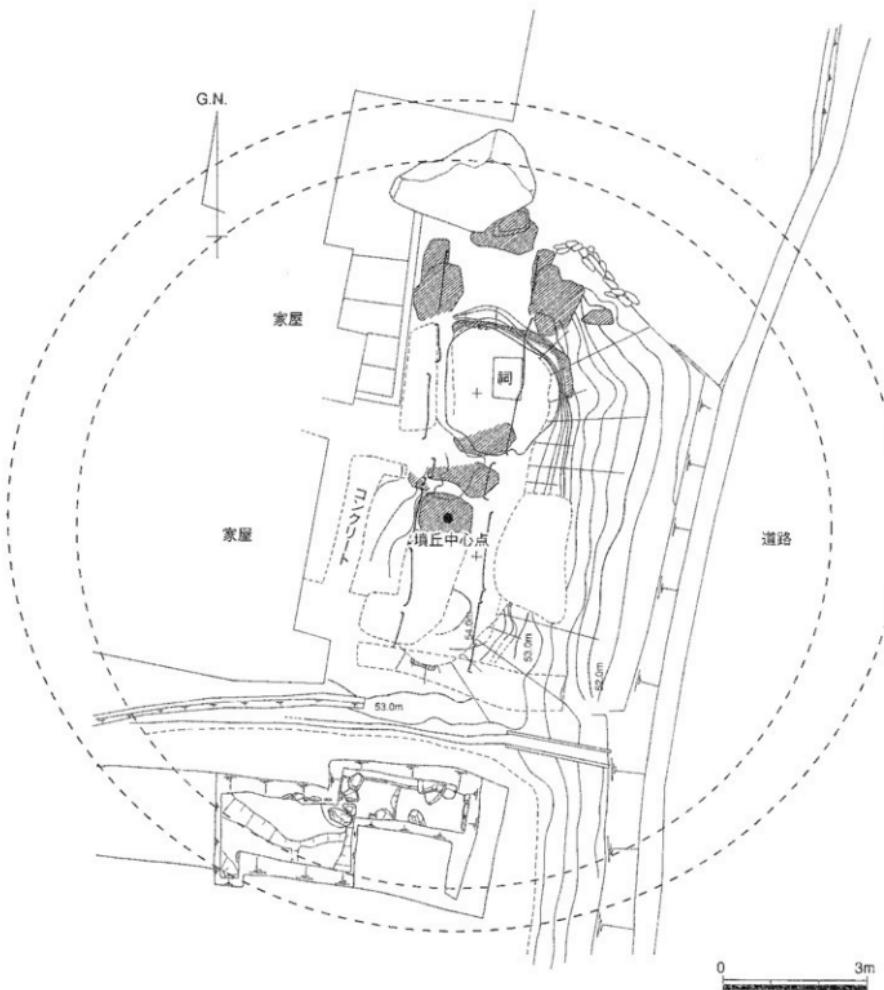
以上の検討からトレンチ内の石積を横穴式石室の前庭部と考えるならば、その西に見られる墳丘状の高まりは古墳の墳丘といえる。墳丘裾部のラインから径16mの円墳が復元される。ただし、この場合奥壁と北側墳丘裾部の距離は約2mと非常に近く、墳丘傾斜は急である。以上から本来の墳形は正円ではなかった可能性も想定しておきたい。墳丘裾から外側は平坦地となり、そこから外側にかけて地山が立ち上がりついたことから、古墳を巡る周溝と判断できる。周溝幅は墳丘裾から約1mで、周溝を含めた古墳の規模は径18mになる。なお、周溝底は標高約51.5mを測り、トレンチ中央の石積や石室の基底石よりも約30cm高い。

第2節 古墳の時期について

遺物の絶対数は少ないものの、横穴式石室床面の調査では鉄釘、ガラス玉、子持装飾器台の子杯が、今年度のトレンチ調査では杯身、長颈瓶、装飾器台の脚部接合付近が出土している。杯の立ち上がりが低いこと、遺物に鉄釘を伴うことから、7世紀前半の時期が指摘できる。

第3節 蓑神塚古墳と周辺の後期古墳

最後に蓑神塚古墳の歴史的意義を検討する。蓑神塚古墳周辺は古くから開口した横穴式石室が多く『畿坡国名勝圖会』(1853年頃)の「門入……仏の穴」といふ地名あり……塚穴所々に多し」や『新撰讀破國風上記』(明治中期頃)の「門入の所々に在。穴居の跡なり」という記載からも古墳の多さを伺うことができる。そこでまず蓑神塚古墳周辺で指摘されている後期古墳の様子をまとめることとする。



第40図 墓丘復元図 (1/100)

中尾古墳

古墳は北に派生した丘陵の先端に位置する。東は1.6km先の人川町の一ノ瀬古墳群までほとんど古墳の存在が知られておらず、蓑神塚周辺の古墳群の中では東端となる。

これまでの中尾古墳に関する記載は『明治34年10月右田村野外教授之集全』に「中尾に行きますと古

代の塚がありまして土器の色々の形をしたものが出ます。昨年（明治33年）に師範学校のK先生が10日間もほりて色々のものを取り出しました。」とある。昭和16年（1931）の有馬清平『右田村誌』には中尾古墳の紹介があり、「この地亦開墾せられて現存せるものなしと雖、一個は最近まで完全にありて玄室は余程人なりきといふ」とあり、昭和初期頃まで完

存の横穴式石室が開口していたこと、大型の石室であることが指摘されている。

昭和57年（1982）上地改良整備事業に伴い発掘調査が実施し、径20m以上の大規模な墳丘が想定された。

埋葬施設は南向きの両袖式横穴式石室で蓋石、側壁上半分を欠失している。石室は全長10m以上、玄室長約5.2m、幅2.4～3m、高さ1.9m以上、羨道長4.8m以上、幅約1.9m、高さ1.2m以上である。側壁は高さ1～1.5m、幅1m前後の巨石を縦においている。

出土遺物はガラス玉37、鉄刀片、須恵器杯蓋7、杯身5、高杯7、蓋付高杯2、高杯蓋4、長頸壺1が出土し6世紀末から7世紀前半の時期が指摘できる。

昭和60年（1985）、古瀬清秀氏は『寒川町史』において単独に近い形で築造され、しかも大規模な墳丘と石室をもっていることから、地域的首長と捉え、7世紀後半に創建される極楽寺廃寺を生み出す母胎となったことを指摘している。

相ノ山古墳群

極楽寺廃寺の東側丘陵上にあった古墳群である。丘陵端部近くに10基近い古墳があったのが、開墾によって破壊され、昭和44年当時で現存するのはわずか2基であった。古墳群の1基は明治32年（1899）、黒田安雄氏の『讃岐史要』に写真が掲載されている。写真的説明で「大川郡石田村に在り。此の石窟付近には數十ヶ所に石窟岩は古墳の遺跡あり」とある。黒田氏の発掘では勾玉、管玉、上器等が数多く出土したという。

昭和44年（1969）、農業構造改善事業によって丘陵が削平されることとなり、残る2基の古墳が調査された。

1号墳は丘陵突端近くに築造されており、横穴式石室が一部露出していた。築造当初の墳丘規模は径約10m、高さ3mに推測されている。

横穴式石室は西向きに開口され現存長約5m、玄室現在長約2.8m、幅約1.7m、羨道長2.2m、幅0.98m、高さは不明である。出土遺物に馬具、鍍金した鉄製品、須恵器振瓶、皿状鉄製品があり、6世紀末から7世紀に築造された古墳である。

2号墳は火葬場の東側丘陵上にあり、横穴式石室の床面を残すのみであった。石室は西向きに構築され1号墳と規模、形態で近似する。

出土遺物はガラス玉27、銀製耳環、鉄刀（鷲有り）、

須恵器杯、高杯などがある。6世紀末から7世紀に築造された古墳である。

極楽寺古墳群

『石田村誌』（1931）には現存する古墳3基、破壊された古墳10基以上あると指摘されており、勾玉、管玉、土器の出土を伝えている。また、丘陵上に水瓶さんと称する小社があり、その後方に天井石の露出した未発掘の古墳があるとしている。古瀬清秀氏の『寒川町史』（1985）にはかつて10基近い古墳で構成されていたが古墳のほとんどが消滅し、完存するものは一基もないとしている。昭和35年（1960）、丘陵上では6世紀末から7世紀の須恵器杯、高杯、小型台付き壺、平瓶が出土したが古墳については不明という。

極楽寺地区の藤井家には丘陵開墾前からの極楽寺古墳群資料が収集されており、6世紀末から7世紀の遺物が指摘されている。が、中に6世紀初頭の須恵器があり（『寒川町史』に記載）、古墳群の開始期は検討を要する。

薺神東古墳群

薺神古墳群と谷を挟んで東の丘陵上に位置する。『石田村誌』では丘陵端に西南を向った2基の古墳があるが、破壊されていると紹介している。『寒川町史』ではこれを北から薺神東1号墳、2号墳と呼称し、また、2号墳の東にある山腹傾斜面の古墳を薺神3号墳としている。

薺神東1号墳は径約7m、高さ約1.5mの円墳で西南に開口する全長約4.5mの横穴式石室を有する。石室は石材が抜き取られている。出土遺物は鉄刀、須恵器が伝えられているが詳細は不明である。

平成14年（2002）、この丘陵を横切る大川南部農免道路整備に伴い2号・3号墳が発掘調査された。報告書では2号墳を薺神5号墳、3号墳を薺神6号墳と呼称している。

薺神東2号墳（薺神5号墳）は長径14m、短径12.6mの楕円形の墳丘で、南側に周溝を検出している。横穴式石室は天井石を失い、西に開口していた。石室全長約4.17m、玄室長約2.67m、幅約1.55m、羨道長1.5m、幅1.06mを測る。出土遺物は須恵器杯蓋6、杯身9、高杯、壺、鐵鑑21、鉄刀子、耳環6、勾玉2、切子玉4、算盤玉2、蜜玉2、小玉295がある。また、人骨から3体の埋葬が確認されている。時期は6世紀末～7世紀である。

薺神東3号墳（薺神6号墳）は丘陵東斜面に位置

蓑神塚古墳



第41図 蓑神塚古墳周辺の後期古墳（1／10,000）



写真8 明治32年の讃岐史要に掲載された相ノ山古墳



写真9 昭和6年に石田村誌に掲載された蓑神塚古墳



写真10 大正時代頃の石田地区の横穴式石室

する。埴丘は上取りによって大きく損壊し、石室は露出した状態であった。埴丘は径約6mに推定されている。横穴式石室は右片袖式で南東側に開口する。石室全長2.21m以上、玄室長1.36m以上、幅1.08m、羨道長1m、幅0.7mを測る。山上遺物は過去の土取りで須恵器蓋杯1、台付鉢1、蓋付短頸壺1、調査で鉄鎌1、須恵器壺片が出土している。時期は6世紀末である。

なお、『石田村誌』ではさらに南方の山にも古墳が数基あり、明治年間に古鏡、ガラス玉を出土したと伝える。現在遺跡台帳には蓑神4号墳から12号墳までの9基の古墳が記載されている。

蓑神古墳群

大正11年（1922）、大内豊谷氏の『石田村古蹟考』には開口する横穴式石室が2基あると紹介されている。1基は蓑神塚古墳でもう1基は大蓑彦神社の北方山上にあると指摘している。尾根上の「小山」とよぶ小さな高まりの頂部に径7mの円墳があり、横穴式石室が東に開口していた。石室は大人が腰を曲げないと入れない小規模なもので玄室長、幅は約1.2m、高さ約1.3mを測る。

この古墳の周辺には破壊された同タイプのものが多い。玉類、金環、銀環が採集できると紹介されている。『寒川町史』によるとその内の最も北端にあった！ 基は山裾を「L」字形に切り取り、西南に開口する横穴式石室を築いていたという。玄室の全長約3m、幅約1.5m、高さ約1mで羨道はほとんど壊されていた。床面の礫敷きの上面から金環、玉類、鉄鎌、須恵器、土師器が出土し、時期は6世紀末である。

現在、蓑神塚古墳の南30mの山腹傾斜面に花崗岩の露山が見られ、横穴式石室の一部と考えられている。また、大蓑彦神社の裏の古墳は蓑神3号墳と呼称されているが、時期的に後期古墳より古くなることが指摘されている。

『石田村誌』には3基の横穴式石室が開口していると記載されている。

なお、この地域を撮影した大正期頃の絵葉書が伝わっており、この中に横穴式石室が見られ、蓑神古墳群の可能性があるがどの古墳であるかは今後の課題である。

森広天神山古墳

森広天神社境内にある徑約15m、高さ約3mの円墳である。埋葬施設は不明であるが、埴丘西側傾斜

面に大石が露出しており、横穴式石室の可能性が指摘されている。古瀬清秀氏は『寒川町史』において「森広天神山古墳が後期に属するのであれば、中尾古墳と同様に群集墳から独立して営まれた古墳として注目される。」としている。

野崎古墳

昭和40年（1965）頃、土取作業中に横穴式石室と考えられる石積が発見された。横穴式石室は玄室長2.5m以上、玄室幅1～1.2mで東に開口していたと推測される。羨道は完全に消失している。出土遺物は須恵器杯、長頸壺、提瓶、脚付椀があり、6世紀末が指摘できる。現在のところ、この丘陵上では単独で立地している。ここから西にかけては500m西南の大末古墳群まで横穴式石室ではなく、後期古墳は希薄になる。よって野崎古墳周辺が後期古墳の群集する地域の東限と推測される。

以上周辺の後期古墳の分布からは東西1.2km、南北800m間に後期古墳は群集している。時期的には6世紀末から7世紀前半が多く、長尾大石地区や緑ヶ丘地区のように7世紀後半の遺物を含む古墳は確認できない。比較的短期間にこの地域にたくさんの古墳が造営された様子が想定される。この地域では7世紀後半の創建が指摘されている極楽寺廃寺や延喜式内社の大蓑彦神社があり、新しい文化風習をいち早く取り入れた先進地であったと推測される。長尾大石地区や緑ヶ丘地区との横穴式石室使用時期の差異、そして、群集墳の広域な広がりはこうした地域的特徴を示している可能性がある。

また、当地域の群集墳は先史によって巨石の横穴式石室と小型の横穴式石室など石室規模に違いのあることが指摘してきた。大内豊谷氏は「此地には横穴式石室の円形墳大小2個」あるとし、1つはあまりにも小型であるため本来堅穴式石室であったと推測している。古瀬清秀氏も蓑神東3号墳について「規模からみて、横穴式石室より堅穴式石室の可能性が考えられる。古墳時代後期も末近くなると、横穴式石室の構築手法にわる堅穴式石室が出現する。これは横穴式石室に代表される家族墓としての古墳の在り方に、1つの変化が生じたことを示す例として注目される。」と当地域の横穴式石室の小規模な点に注目している。

阿河銳二氏は蓑神東2号墳（蓑神5号墳）と蓑神東3号墳（蓑神6号墳）において古墳立地と石室規模に差異を指摘し、同丘陵上に複数の造墓主体があっ

蓑神塚古墳

たとし、蓑神東2号墳（蓑神5号墳）が馬具、鉄刀が見られないことから、通有の横穴式石室墳の中では低位の家父長層とし、6号墳はさらに下位の階層としている。

さて、蓑神塚古墳は石室規模、使用している石材からみればこの地域で大型の部類に入る。当地域で玄室長が4mを越すのは中尾古墳と蓑神塚古墳のみで、多くは3m未満である。石材も中尾古墳とともに巨石が用いられており、小型石材の多い中で際立った存在といえる。中尾古墳は単独に築造され、しかも大規模な墳丘と石室をもっていることから、地域的首長と捉え、7世紀後半に創建される極楽寺廃寺を牛み出す母胎となったと評価されているが、蓑神塚古墳も同様の指摘が可能であろう。ただ、中尾古墳と比較した場合、使用されている石材こそ類似しているが、墳丘と石室の規模では明らかな差異が見られる。つまり、蓑神塚古墳は中尾古墳と同様の地域的所長としての位置づけはなされても、中尾古墳との関係において格差が認められるのである。立地をみると単独で存在する中尾古墳と群集墳の中にある蓑神塚古墳の差異は注意する必要がある。また、石室構造は基底石の巨石を縦に設置する中尾古墳と横方向を主とする蓑神塚古墳では差異が見られ、今後、こうした差異がどう歴史的に解釈可能か検討を深化させる必要があろう。現段階では玄室3m未満で小礫を使用した石室が圧倒的な当地域の群集墳において蓑神塚古墳は中尾古墳とともに傑出した大型墳であることを指摘したい。古墳の内には延喜式内社の人蓑彦神社がある。人蓑彦神社の創建は検討する余地があるが、古代においてこうした宗教施設を創建した集団の母胎であった可能性を考えられる。

<参考文献>

- 阿河銳二 2000『道味遺跡』寒川町教育委員会
阿河銳二 2003『蓑神古墳群』さぬき市教育委員会
有馬清平 1931『石田村志』
大内豊谷 1922『石田村古蹟考』
梶原藍水 1853頃『讃岐国名勝図絵』
片桐孝治 2002『原間遺跡I』
亀井芳文 2006『創建時の極楽寺遺跡調査』
『さぬき市の文化財 No.3』
國木健司 1993『石田高校校庭内遺跡発掘調査報告書』香川県教育委員会
黒木安雄 1899『讃岐史要』
寒川町教育委員会1983『中尾古墳発掘調査報告書』
寒川町教育委員会1984『極楽寺遺跡発掘調査報告書』

- 長尾町教育委員会1989『椋の木古墳 大石北谷古墳 調査報告書』
藤井誠一 『幻の寺 石田 梅葉寺』
古瀬清秀 1985『第一編 旧石器・繩文・弥生時代』
「古墳時代」「寒川町史」
細川信晃 1991『野崎古墳について』
『ふるさと寒川』
細川信晃 2000『蓑神古墳第三号古墳について』
『ふるさと寒川 第二十集』
松岡調 明治中期 『新撰讃岐國風土記』
森下英治 2006『石田高校校庭内遺跡』
『香川県埋蔵文化財調査年報』平成17年度
山本一伸・國木健司・片桐節子 1997『森広遺跡』
寒川町教育委員会
山本一伸 1997『石田高校校庭内遺跡』
寒川町教育委員会
山元素子 2000『本村・横内遺跡』
『県道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』



1 墓丘（南西から）



2 墓丘（北から）



1 トレンチ1 上段葺石（北から）



2 トレンチ1 上段葺石（西から）



1 トレンチ 4 下段葺石検出状況



2 トレンチ 4 下段葺石検出状況



3 トレンチ 4 下段葺石検出状況